

---

# 神の語り手といわれた少年

がぶりえる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神の語り手といわれた少年

### 【NZコード】

NZ079

### 【作者名】

がぶりえる

### 【あらすじ】

生まれつき不思議な能力を持つた吉原九十九は、父親が買って来た鏡を蔵の中にしまう最中に鏡に吸い込まれてしまう。

鏡に吸い込まれた先は異世界だった。

しかし、持ち前の楽観的思考のおかげであまり苦悩することはせず、自分のペースで異世界を旅する九十九。色々な仲間と出会いながら、九十九の異世界冒険が今始まる。

この物語は主人公が最強というわけではありません。

どちらかと言えば主人公の周りが最強です。

暇があつたらほちほちと書いているので、不定期更新です。

矛盾を指摘された為、大幅に修正しているところがあります。  
気になる方はご覧ください

第5話で大陸や国のこととを補足しました。一度確認をお願いします。

## 序章（前書き）

初めまして、がぶりえたると申します。

小説を書くのは初心者なので、誤字脱字や物語に矛盾が生じることがあります。

もしやうございましたら、お手数ですが報告をお願いします。

でせびりわべー。

## 序章

俺には物心ついた時から不思議な力があった。

それは火が出せるとか瞬間移動できるとかいう事ではない。

古くなつた物の言葉を聞き、自在に動かすことが出来るところと  
だ。

春が過ぎて、これから夏になるといつこの時期。俺こと、吉原 九  
十九はうだる様な暑さの中、家の蔵を整理していた。

「暑いなあ、くそつ」

（ほつほつほ、そう言いなさんな、坊ちゃん）

「でもさあ、蔵のじつちゃん。いくら木陰にあるといつても暑いも  
んは暑いぞ？何だつてこの暑い中整理しないとダメなんだか・・・

（それはー、あれだの。なんだつたか・・・そつそつ、何でも旦那  
様が古い鏡を手に入れたが置く場所が無くて、ここに置くことにな

つたらしこやこ)

またかよ・・・、じげやせながら俺は蔵の中を片付けていく。  
俺の親父は骨董品を集めるのが趣味で、気に入つた物があればホイ  
ホイ買つてくる困つた親父だ。

「だーーめんぢくせえ、・・・お前ら起れや、蔵整理だ」

（はつーなんだ坊ちゃんか。へいへい動きますよ）

（あらーん、坊ちゃん久しぶりねえん）

（ワシは奥がいいんじや、どかんかいー）

（何言つてやがるーー）ま俺の場所だつー！）

「はこはい、落ち着け落ち着け。壊れにくい物は下になれ、武具達  
は隅に一纏まり、壷とかはけやんと棚に入れ」

（（（（（はーー、坊ちゃん）））））

とまあ、こんな俺の日常をつらつらと語つてこいつと思つたんだが、  
まさかあんなことになるとはなあ・・・。

## 序章（後書き）

短くてすこません（・・・・・）

でもほら、プロローグなのでつー

感想などなど、お待ちかしこおつます。

## 第1話

「よし、こんなもんか・・・皆お疲れさん」

(ほつほつほ、『苦勞だったのう。坊ちゃん』)

「本当だよ・・・つあー、疲れたあ」

昼過ぎから始まった蔵整理は、夕方頃によくやく終了した。しかし夕食後に親父が買って来たという古い鏡を移動しなければならない作業がある。

「飯まで少し休むか・・・じゃあまた後でな、蔵のじゅうらん」

(ほほ、またの)

「ふいー、疲れた・・・」

(おお、九十九。蔵の整理は終わったのかえ?)

「あー・・・桜華、今終わった」

声をかけてきたのは机に置いてある鉄扇。名を桜華といふ。（本人）

（談）

「こいつも親父が買つて来たものだ、何でも戦国時代の武将が使つて  
いたとか何とか。」

（疲れておるのう、ビタマッサージでもしてやうりつか）

「おこおこ、鉄扇がビタマッサージするんだよ」

（ビタマッサージされるとこいづー・・・ベジベジヒー）

「やめこ、お前自分が鉄つてことを忘れてないか？」

（むむむう、人間になれたうのう・・・）

「まあ気持ちだけ受け取つておくよ、ありがとな」

（ひむひ）

そんな会話をしていると母親から「『飯をきたわよーー』」と浮び声  
がかかつた。

「そんじや、飯食つて鏡運ぶかー」

（九十九十九つ、わらわも連れてつとおくれつ）

「ん、了解。でもお前重いからなあ、腰のといでいこか？」

（んむんむつ）

（ええい、わらわを馬鹿にする出ないつ！鉄扇なんじやから重くて当然じやつ！）

「もしかするとお前より軽いかも知れないぞ？桜華」

「ひいじいじょ、と親父みたいな掛け声と共に持ち上げた鏡は思いのほか軽かった。

「はこはこつと・・・お、案外軽いな？」

奥でじりじりとしている親父に声をかける。すると「おーいー！寧に運べよーー。」と返ってきた。

「親父ーーもう運んでいいのかー？」

ふははは、ついやましきかわうーっと畳つてゐる場合じやなかつた。こいつを運ばなきやな。

（いいのう、母上の作るご飯はいつも美味そつだのう・・・。）

「ふいー、食つた食つた。」

べしへしと背中を叩いてくる鉄扇の彼女、案外しゃれにならない威力だ。いてて。

「いてて、悪かった！叩くの止めてくれつー。」

（分かればいいのじゃ）

そんなやり取りをしていると蔵に到着した。両手が塞がっているのでじいさんに扉を自発的に開けてもらいつつ、中に入つて予め作つておいたスペースに鏡を置く。

「ふう、改めてみるとかなりいい鏡じやないかこれ。古いつてことだから話せるんだろ？ うか・・・よし」

鏡の上に手を掛け、軽く集中する。すると鏡全体に光が灯り一瞬にして消えた。

言葉や動かしたり、物自体が動いたりするためにはこの作業が必要だ。何でかは知らん。

「さてさて、起きてるかー？」

つんつんと鏡を突いて見ると、反応があつた。

（ん・・・）は・・・一体？

「お、大丈夫みたいだな」

（声が、私の声が聞こえるのですか・・・？）

「ああ、俺のちょっと変わった力でね。ちなみに動かしたりもできるし、お前自体動けるはずだぞ。」

するとひゅっくりと鏡が動き出す、傍から見ると怪奇現象以外の何ものでもない。

（ああ、本当です……貴方を……貴方様のような人を待つていました……）

興奮したように話す鏡に俺は少しひるんだ。

「え、ちょ、何だ急に……」

（私の国を救つてください！語り手様！）

「え、語り手？……ってなんだおい……引っ張るな……」

（おお、この鏡はかなりの力をもつてあるぞ……九十九……）

「ちよ、おま……三つのおせえよ……」

身体がどんどん鏡に吸い寄せられているのに、桜華は今更なことを言った。ここつめ。

（申し訳ありません、語り手様。どうか、どうか私の居た国を救つてください……）

「とりあえず説明しろ……せつめ……つまおおおーのまれるひつめ……」

「ひつめ……」

こうして俺とのんき鉄扇の桜華は、何の説明もなしに鏡の中へと吸い込まれていった。

「おおい、鏡ちゃんよ・・・説明も無しに飛ばした挙句よ・・・」「せじ」だよおおおー。」

しかし返ってきたのは木靈だけ、そつ、じじは、森の中である。

「つたく・・・一体何だつてんだ・・・」

鏡に吸い込まれ、なんかわからん渦の中をぐるぐると回つて、ぽいつて吐き出されるように外に出されたら、地面に叩きつけられた！そして辺りを見渡したら・・・木、木、木、木、木、巨木、木と見事に森の中だつたというわけだ。

「森でじりじりしてんだよ・・・桜華、無事か？」

（大丈夫じゃ、それより九十九。じりするのかえ？）

「あれだ、じりじりときは確か川を探すんだ。んで下流に行けば村の一つや二つあるだらうね」

( 楽観的だのー )

お前に言われたくないわつ、と思いつつ川を探し始めた。  
木や草が鬱蒼と生え茂っている森の中をじばりく歩くと、サアーッ  
といつ水の流れる音が聞こえた。

「よーし、川発見ーしかし疲れた・・・ひょっと休んでいくか

( せうだのー、森の中を歩くのつて案外疲れるもんじやのう )

「だよなあ・・・つてお前は俺が運んでるんだねうがつー!」

「ふうー、結構歩いたなあ・・・まだ村や町がないのかよ」

( ほれほれ、がんばれがんばれ。もうすぐ日が暮れてしまつだ? )

「だーかーらー!・・・はあ、まあいいや」

相変わらず我関せずな桜華を放つておいてひたすら歩く。すると三  
の切れ目が見えてきた。

「むーーーはまだですかーよつと。おおー村発見!」

(おお！でかしたぞつ、九十九！)

その切れ目は少し滝になつていて、下を見ると丁度夕食時のか村  
らじき場所からいくつも煙が上がつていた。しかし・・・

「よつしゃーっとあれ？なんか様子がおかしいぞ・・・？」

そつ、いくら夕食時だといつても煙の数が多すぎるのだ。

「なんかやばそつだが・・・といつあえず今晚の寝床の為だ、行つて  
みるか」

(なあに、いざとなつたらわらわを使えばよこのじやー)

「おう、期待してゐるぜー」

そつして村に向かつて走り出す。近づいてはつれ村の様子がわかつて  
きた。  
ところどころ木の家が崩れていたり、いくつもの家が燃えていたが、  
どうやら襲われた直後のようだ。

「一体何が・・・賊か？」

(びゅぢゅ、その様じやの)

そう判断したのは、明らかに人対人の戦いの声が聞こえてきたから  
だ。

自警団が奮戦しているのだろう。しかし如何せん数が違います  
うで、あちらこちらで家を荒らしまわっているのが見える。

「だけど、自警団と賊以外の人は見ないな」

（警邏が察知して逃がしたのだろう、なかなかやるものじゃのう）

数が違うといつても、個人個人の実力は盗賊達より上みたいで、自警団が押し始めている。自警団つええ！

「（こ）は任せてもいいみたいだな、俺達は残った敵と逃げ遅れた住民を探すか！」

（そうじやの）

（なんとも、あっけないのう・・・・）

「ああ、何でこんなに弱いんだ・・・・？」

そう俺は呟く、後ろには俺が片付けた盗賊達が無造作に転がっていた。

いくら俺が喧嘩に慣れているとはいえ、盗賊達は明らかに弱かつた。

元の世界で俺は、生まれ持つた能力のせいでいじめられていた。

なつた。

そのおかげか、喧嘩という実戦ならこそ強いと自負している。しかし、盗賊相手に圧勝というのもおかしい・・・そしてこっちに来てから身体の調子がいいぞ？

「うーむ、なんか身体が軽かつたし、試した感じ力も上がってるみたいだ」

(ほう、それはまたなんとも珍妙な・・・)

「この分だと、桜華を使つ」ともなさうだな」

- 654 #15 (II)

プリンスカ怒つている桜華をほおつておき、周囲を見渡す。すると、村のちょっと外れたところに小さな道があるのに気づいた。

「桜華、ちょっとこの道に入つてみるぞ」

(うむ)

しばらく進むと、小さな家があった。

しかし盗賊に襲われているようで窓が割れたりしている。そして・・・

「嫌ー離して下せーーー。」

と、女の子の悲鳴が聞こえた。

「つー桜華、行くぞーーー。」

(「むーーー。」)

そして勢いよく家中に入つていいく。  
するとそこには俺と同い年くらいの女の子と、妹だろうか、14歳  
くらこの女の子が3人の盗賊に囲まれていた。

「げへへ、お嬢ちゃんたち観念しろよ」

「早く立つんダナ」

「けひひ、早くするでヤンスーーー。」

そこに居た盗賊達は、典型的なやられ役だった。

長身の男、太った男、瘦せてチビな男、明らかに弱そいだ。

「おお・・・・何という小物臭」

(「ンンン臭つておるのーーー。」)

そして俺と桜華は見たままの感想を述べた。

「んだとーー? 誰だてめえはー。」

「誰なんダナ」

「誰でヤンスー!」

一斉に振り向く盗賊達。

「えーと・・・名乗るほどの者じや『じれこませんよ。例えるのなら通りすがりの正義の味方かな?』

(なんじや それは・・・)

とぼけて見せる俺に、呆れながらもつゝこみを忘れない桜華。  
そしてその言葉に怒ったのか、怒りを顕わにしながら長身の男が部下に命令をする。

「ふざけやがつてーお前らやつちまえつー!」

「分かつたんダナー!」

「こぐでヤンスー!」

何だその一昔前の掛け声はと思ひながら俺は、剣を片手に隙だらけに突つ込んでくる盗賊達を迎えつつ。

太った男の大きく横雑ぎに降られた一撃を屈んでかわし、かわしたときの反動を生かしたアッパーを放つ。

「ブフウッ！？」

うしき、かかってこいや！」

次の男を相手にしようとしたとき、桜華から待つたがかかる。

(九十十九  
少し待一のしや)

了然の行 たは 俺は木三を警戒しながら心詰て木暮は答える

(二) 二

（いやなに、このまま小柄な男を倒してしまっては、頭がある女子を人質にするのではないかと思っての）

(ある) なるほど・・・

その言葉を聞いた俺は小男の攻撃をかわしつつ、リーダーの後ろに座り込んでいる居る女の子に目配せをする。

田舎の意味は気付いたのか  
女の子達は物音をたてないよ。はそ  
ろりそろりと移動をした。

り上げ小男は突撃をしてくる。

「ニシヤああああ！」

「オゴフツ！？」

それをチャンスだと思った俺は、半身を動かして攻撃をかわし、鳩尾に思い切り右ストレートをはなつた。

渾身の右ストレートを受けた小男はテーブル等を巻き込み吹っ飛んでいった。

「デブー・チビー・・・・くわう」

やられた一人の部下の名前を叫ぶリーダーらしき男、そのまんまじやねえか。

「いひなつたら女を人質に・・・つていねえー？」

桜華の予言通りに女の子を人質にしようとしたリーダーらしき男は後ろを向き、いつの間にか居ないことに驚愕した。

その隙を見逃さなかつた俺は突撃し腰の乗つた右ストレートをはなつた。

「貰つたあああああつ！」

「しまつヘブウツー？」

きりもみ回転しながら吹っ飛んだリーダーらしき男は、小男の上にべちゃつと落ちた。痛そつだな。

「危なごとに」を助けて頂き、ありがとうございました・・・」

盗賊達を縛り上げた俺は女の子達の無事を確認していた。  
よく見たら可愛い子達で、盗賊達が狙つのも分かる気がする。

「いやいや、当たり前のことをしたまでだよ」

普段あまりお礼を言わないので、少し照れながらそう返す。

「お兄ちゃん、強いんだね！」

妹らしき女の子が目を輝かせて言つてへる。やばいお兄ちゃんだつて！凄い照れる！

「や、それほどでもないぞうー！」

あ、声が裏返つてしまつた。恥ずかしい。

くすくすと、笑う女の子達。ここは天国ですか・・・？

「あ、私はシヒラと申します。いつもが妹のミレルです」

「よひしぐれ、お兄ちゃん」

「俺は吉原九十九、いつかだとシクモ・ヨシハラになるが？」

恐らくアメリカンな感じだと判断する。

「ツクモ様ですね」

「ツクモお兄ちゃん!」

お、おお・・・お兄ちゃん!これほどの威力があるとせ・・・恐る  
べし妹属性!

(む、何か不純なことを考へてあるな~)

(や、そんなこと無いでやー)

危つく妹属性に飲まれるといひだつたぜ・・・そういえば村の様子  
が気になるな。

「よし、とつあえず俺はここへ連れて村に戻つてみる」

「私達も!」一緒にさせてくだれ!、邪魔にならなによつてしますから

「ああ、ここに来る間ザコはあらかた片付けてきたら大丈夫だらう」

そんなこんなで村まで戻ることにした。

村に到着した俺たちは、盗賊を縛り上げていたおっさんに話しかける。

「あのー、こいつらも一緒に縛り上げてください」

「む、君は・・・？」

俺に若干警戒心を覗かせつつ尋ねてくるおっさん。当たり前か。

「バードおじさん、この人は私達を助けてくれたんです」

「シーラー!! レルーなんでここのー」

「お母様の形見を忘れてしまって・・・取りに戻つたら盗賊が居たんですね」

「それで困まれてた私達をこのシクモお兄ちゃんが助けてくれたんだよつ」

「そつだつたのか・・・私の姪を助けてください、ありがとうございました」

事情を聞いたバートさんは真摯にお礼を言つてきた。渋いぜー。

「いえ、当然のことでしたまでです。それに少し打算もありましたからね」

「打算?」のよつな状況なのであまりお金は出せませんが・・・

莫大なお金を取られるのではないかと思つたバートさんは、申し訳

なさそうに答える。

もひるん俺はそんな鬼畜じみたことをするつもりはない。

「ああ、もうじやなくて一泊あるといふを都合してもらえないかと思つただけですよ」

「もうでしたか、疑つてしまつて申し訳あつません・・・」

「氣にしないでトヨー、それが普通のことなんですか?」

（もうだの、もし金を取ると云つた時はわらわがじたま叩いてやるといふやつたわ）

貴方に本氣で叩かれたら死んでしまつて勘弁してください、桜華さん。

そんな話をしていると、遠くから地響きみたいな音が聞こえてきた。

「バートさん、何か聞こえませんか?」

「確かに、森のまづからぬのですが・・・」

「行つてみましょ」

嫌な予感がした俺は桜華に念話した。

（桜華、何か嫌な予感がする）

（奇遇じやの、わらわも感じておる）

そしてバートさんと数人の自警団と共に村の外れにある森の入り口

にやつてきた。

その間もどんどん地響きが近づいてきているみたいだ。

「これは・・・何か巨大なものが近づいてきているのか?」

「もしかすると・・・ま、まさか・・・」

「パートさん、何か心当たりが?」

「もしかすると何ですが、この森の奥に住む凶暴な魔物が「グオオ  
オオオオツ!-!」やはり!」

そこに現れたのは、熊を二倍にして額からりともたくましい一本角  
を持ったやつが出てきた。

## 第2話（後書き）

こんな駄文を読んでください、ありがとうございました。

これからぱぱぱぱと書いてこれまでの、応援の程よろしくお願ひいたします(・・・・)

感想などなど、お待ちしております。

### 第3話（前書き）

とつあえず、戦闘シーンは終わらせよつーと意気込んで書いてみました。

しかし、なにぶん初めてなもので・・・つまづく頭の中で考えたシーンを読者様が想像できるか不安です。

こうしたほうがいいよですか、いいですかーですか、そういうふたアドバイスを隨時受け付けします。

ではどうぞ

ななななな何だこいつは！？てかでけえ！なにあの角！熊ですか！

！ですか！

（これ九十九、落ち着かんか。）

（だだだだだつてなにあれ！？）

（落ち着けというに・・・パートとやらが何か知つてゐるみたいだから聞いたらよから）

あわあわしてゐる俺に桜華が話しかけてくる、なんでそんなに冷静なんだよ！

「あれはオルガベア！なぜこんなとこひる・・・！」

「知つてゐるのかーらいだ・・・じゃない！パートさん、知つてい るんですか！」

「え、ええ・・・さつきも話したとおり、あれはこの森の奥深くに 住んでゐるオルガベアといふBランクの魔物です。」

Bランク？なんだそれは・・・モンスター フームか？

「そのオルガベアってこいつのがなんでこいつまで？」

「わ、わかりません・・・」

( 感ひりくじやが、 じにの戦いの気配に釣らられて出てきたのだりつ )

「 わうなのか・・・って落ち着いてる場合かー・ビーヴィーヴィ、 靄く  
強わうだよー 」

話を聞いて少し落ち着いた俺だったが、 のしのしとオルガベアが近  
づいて来ている。 やばいー怖い！

「 私達では足止めにするならないでしようが・・・ツクモ殿、 シエ  
ラ達のことをどうかよろしくお願こしますー 」

なんか渋く命を捨てる覚悟決めちゃつたよこの人！ ちくしょうかつ  
こいいぜつ！

( だから落ち着けといつに！ 九十九、 この世界に来てからわらわも  
力があがつたみたいじや )

( いくら力があがつたとはい、 一般ぴーぽーな俺に戦えつていう  
のですか！ )

( そうじやないわ！ なぜか知らんが、 あることが分かっての。 わら  
わを手に持ち力を籠めよ。 九十九 )

お、 おう・・・なんか威厳が出たといつか、 そんなオーラが桜華か  
ら出ている。

( じー、 じつで良このか？ )

( つむ、 そして田を閉じ想いを籠めて念じよ、 「 顯現 」 と )

むむむ・・・けんげん・・・顯げん・・・顯現・・・！

「顯現せよー！」

そういう途端、持つていた桜華から目が眩むような光が放たれた。決死の覚悟で迎え撃とうとしていたバー<sup>ト</sup>さん達と今にも襲い掛かろうとしていたオルガベアがその光にひるんだ。そして持つてた俺もすゞしく眩しい。へあー、めがーめがー！

徐々に光が収まつていき、視力が戻つてくる。そして手には何だか柔らかい・・・そう、女の子の手のような感触が。

視線を前に向けていると、着物を着た美女が立つていた。

身長は俺の肩くらい、黒く艶のある長髪を腰まで伸ばし、袖口や裾などに桜の模様が入つた黒い着物を少し着崩していて、腰帯には一本の黒い鉄扇が挿さつている。

顔は切れ長の目なのだがすこしたれでいて、右目<sup>の</sup>ふちに泣きボク口がある。

鼻は小ぶりながらスッとしており、瑞々しい唇は桜と同じ薄紅色。プロポーションは抜群で胸はこ・・・いやロカ！

着物を着崩しているので、胸元が少し顯わになつていて、全体の雰囲気と泣きボクロと合わせて凄くエロイ・・・おつといけない、よだれが出そう。。。

「ふむ・・・こんな姿になるのじやな

「えつと・・・お、桜華か・・・？」

間違えとこ「」とは無いと思うが、一応聞いてみる。

「セツジヤゾ、九十九」

やつぱり当たつていた、しかしどうこうだとだりつ……と極んど  
いふと。

「おおー、これが九十九の感触か……やつと、やつての時が…  
・」

ちよ、なにやつてゐんすかーふふつー顔をはしゃむにゅーー。

「可愛いの、可愛いの、……では長年の夢を……」

「え、え？あの、桜華さん。なんで顔を近づけて……んむつーー。

「ちゅつ・・・ん・・・つふあ、ふふ、」馳走様じや

う、うえええええい！？キス！？キスされたよーー、なんで！？  
どうして！？なぜにW h y！？

「ふふ、少し落ち着かんか、九十九」

「だだだだつだだつだつて！キ、キ・・・キス・・・ー」

「うむ、よこ感じじやつた・・・これで元気百倍とこひぢやの  
？」

元気百倍つひ・・・ほひ、バートさん達とあのオルガベアまでぽか  
ーんつしてしてゐる。

「さて、バーーとやらとお付の者よ、下がつておれ。あのけむくじ  
やうめわらわが相手致そつ」

「は・・・は?し、しかし女性の身でオルガベアは

「なあに、わらわに掛かればあんな獸などにちうひじや

ちよ、そんなこといつちや 「グオオオオオツー」 ほら怒つたじやん  
!つていうか言葉わかるの!?

「桜華、大丈夫なのか・・・?」

「つむ、なぜか負ける気はせん。見ておれよ、九十九」

そつこいつつ、俺から離れた桜華は腰に挿さつていた一本の黒い鉄  
扇を両手に構えた。

鉄扇の長さは見た感じだと50㌢くらいあるだらう。鉄で出来て  
いるので重いはずだが、桜華は重さを感じさせずに持つている。ど  
うなつてるの?

「では往くぞ、けむくじやー!」

「ガオオオツー!」

グンツ、とそのか弱く美しい女性とは思えないほど速く飛び出した  
桜華。地面が少し陥没していた。

しかし、やはり動物というべきか、凄まじく速い桜華の行動が見え  
るのか巨腕を振り下ろすオルガベア。

だが桜華は何を思ったか、その巨腕を一本の鉄扇を交差して受け止  
めようとする。

「お、桜華っ！」

潰れると思った俺は思わず叫んでいた。しかし・・・

「ふむ、この程度かや？」

桜華は易々と巨腕を受け止めていた。

「では」こちらから参るぞっ！」

桜華は受け止めていた巨腕を上に弾き、両手の鉄扇を開く。そして開かれた鉄扇を弾いた巨腕に薙いだ。

「ガオオオツ！？」

鉄扇の薙がれた巨腕は深々と斬れており、その傷からおびただしい血が流れ出ている。

その血に当たらないようには、さらにオルガベアに距離を詰める。

「はつ！ふつ！」

左右の手に持った鉄扇をオルガベアの左腕と右足に薙ぐ。飛び出る鮮血。

そして薙いだ反動を利用して回転しながら飛び、首を狙う桜華。

しかし野性の本能か、オルガベアはあたる直前に首を引いた。かわされたことに舌打ちをし、瞬時にオルガベアの胸を蹴り離脱する。

するとその一瞬後にオルガベアの腕が振り下ろされた。離脱しなければ叩き落していただろう。

「ふふ、中々速いの、」  
「ふふと悔しそうに鳴き、今度はオルガベアから距離を詰める。熊の一倍ほどの大きさに似合わぬ速さで動くオルガベア。

激しそうに咳き、開いていた鉄扇を左だけ閉じる。そして振り下ろされた右腕を左の鉄扇で弾き、左腕を半身ずらしてかわし、開いていた右の鉄扇で、先ほど深く斬りつけたところをもう一度斬りつける。

ショピッという風切り音が聞こえたと思ったたら、オルガベアの左腕はなくなっていた。

あの細腕でオルガベアの巨腕を支えていた骨ごと斬り飛ばしたのだ。ギヤオオオツと血を噴出しながら激しい痛みに踏鞴をふみ、ひるむオルガベア。その隙を逃さず右足を斬る。今度は右足が飛んだ。

「これでもうお主は逃げれまい。往生せよ！」

激しい殺氣と共に、閉じていた左の鉄扇を開き、くるくるくるくると回転しながら、右足をなくしバランスを崩し倒れかけているオルガベアの至る所を斬りつける。血飛沫が舞い散るその中を黒い鉄扇を広げながら回る姿は、幻想的な舞を見ているようで俺は見惚れていた。

「これで仕舞いじゃ」

その声と共に両手の鉄扇をパチンッと閉じる。そしてその音と共に、オルガベアはズウンと力なく崩れ落ちた。

鉄扇を軽く振り、ついていた血糊を飛ばし腰帯に挿す。あれだけ激しく血飛沫が舞っていたのに、返り血一つ浴びずにこちらに近づい

てくる。

そんな桜華はまだ見惚れている俺に、「テナンと首を傾げ一言呟いた。

「『褒美、くりやれ？』

### 第3話（後書き）

強いですね、桜華さん。そしてエロイです。  
私の妄想では、もうエロエロです。もー、あーんなことやーーんな  
こちウワナーラスルヤメロー！

感想などなど、お待ちしております。

## 第4話（前書き）

かるーい世界の説明となつてこます。

詳しいことは後々とこいつとで（・・・）

でまじめ

「うーん、褒美、くりやれ？」

一へ?え、あ・・・この褒美?」

いかんいかん、ほーっと見惚れてしまつていた。しかし、僕美うてなんだ?

「そんなもの決まっておるう。では早速・・・」

え、ちよちよ、待つた！」

そんなこといいながら近づいてくる桜華に待ったをかける。そのご褒美の正体がわかつたからだ。

正体は何だ？ て？そりゃーあの＝＝＝＝＝・・・・

「む、どうがや？」

「ど、どうしてってほら・・・バートさん達もいるし!」

「そんなのほおつて置けば良いではないか」

「そんな訳いくかー！」

バートさん達も何とか言ってくださいよーといつ気持ちでバートさん達のほうを見る。

「ええ、我々のJETは既にセールスオーディン

ほい、パートさんもそいつって・・・えーっー・ビーブルじゃないよ  
！周りもウンウンと頷くな！

「ふふ、では遠慮なく・・・」

「ちよ、ま・・・いやあああー！」

まるで女の子のような叫びをあげてダッシュで逃げる俺。そこへい  
ぐじなしどか言つな！

「逃がされぬっ！」

後ろから「ン」という音が聞こえたと思つたら、こいつの間にか田の  
前には桜華が居ました。

ツクモは逃げ出した。

しかし回り込まれてしまつた。

「えええ！？オルガベアの時よりは、つんむううーー？」

「はあ・・・はあ・・・息できなくて死ぬかと思つた・・・」

「ふふ、すまぬのう。わらわの長年の夢だったのでな」

「うういにながら、とても幸せに微笑む桜華。かくして可愛いやねえかべらほづめ！」

「も、もうよろしくのド・・・?」

「うむ、まだまだしたりなうが、これは後々の楽しみにしておくとしようかの」

おずおずと聞いてきたバートさん、にやうとしながらひそひ返す桜華。

怖い！怖いよこの人！後々つてなに！？何されるの…？

「では村に参りましょう、シホラ達と他の自警団員が待つておりますので」

「わうじやの、ほり往くぞ、九十九」

「ああ、わかつた・・・つてそんなにくつ付くな！」

おかしい、鉄扇だったときは確かに甘えたがりだったが、もつとしつかりしてはいたはずだ。

しかも夢つてなんだ？向こうの世界では聞いたことないな。

「んふふふ・・・鉄扇のときも思つていたが、九十九は良い身体付きをしておるのう」（すつすつ）

や、やめてくれーー腕にくつ付かれるど、む、胸が・・・胸があ  
つー

「ツクモ様ー、バーートおじさんー」「お兄ちやーんー、おじやーんー」

くつづいてくる桜華をどうにか離さうとしている、シトウちゃん  
達がこちぢり走つてくる。

「凄い音がしたので心配しました・・・無事で何よりです」

「一体何があつたの?」

「ああ、オルガベアが出たんだ」

そつ心配そうに聞いてくる一人に、バーートさんが答える。

「「オ、オルガベアー!?」」

オルガベアの名前を聞いた途端に、ものすゞく驚く一人。なぜだ?

「なあ、そのオルガベアってそんなに強いのか?」

「たいしたことなかつたがのう?」

「そんなにって、Bランクですよー!普通に戦つたら王國騎士10  
人は居ないと・・・、あら?」

「お兄ちゃん、その綺麗な人は誰・・・?」

疑問に思つたことを桜華に聞いたところ、シトウちゃんに突つ込ま

れる。

そして今気づいたのか、俺の腕に巻きついている桜華について尋ねてくる一人。なんか黒いオーラがつ！

「あ、ああ、こいつは俺の「嫁じや」なんだ、ついてもつくなよ！？」

「嫁……？」

「ああー黒いオーラが増した！？何だこの威圧感は！怖いです！

「ち、違つよ、こいつは俺の「妻じや」なんだ、つてもつやめて！？」

「むう、それでいいではないか」

よくないッス！一人のオーラで胃が痛くなつてきてマス！

「い、こいつは俺の武器なんだ！」

「「武器？」」

「せ、ほりベルトに挿してただろ？」

それを聞いた一人は、そいつえべと思つてくれたのか、オーラを抑えてくれた。  
まだだいぶ残つてゐるが。

「ですけど、今は綺麗な女性になつていますが……」

「ふふ、綺麗と言わると嬉しいのう。お主も鼻が高いであらう?」  
九十九

しな垂れかかってこないで!一人のオーラが、オーラが増すから!—!

「そ、それは何でかよくわからないけど、力を籠めた瞬間この姿になつたんだ」

「確かに、構えたと思つたら眩しい光が出て、気づいたら立つていましたな」

あれが一体何なのか分からぬが、たぶん小説等によくある異世界移動による主人公補正で俺の元々持つていた能力が強まつたんじやないかと思つ。

そして俺の能力を三人に説明すると。

「ま、まさか……!」

「なんと……伝承の中だけだと思つておりましたが、実在したとは!」

「お兄ちやんす!」—!

な、何だ?驚いてるぞ?!!レルちゃんそんな輝いた眼で見てこないで!照れる!

「あの、伝承とは……?」

「それはここではなく私の家でお話しましょつ。今は村の復旧をして、夕食のときにもども」

「ああ、わかりました」

向ひで食べてきたとはいえ激しい運動したから、丁度腹が減つていたところだ。

「ではそのよひ。シーラ、ミレル、お前達もおいで」

「はい」

「わーい、ジーナおばさんの『飯』」

説明してくれるなら、その時にこの世界のことも聞いてみるか。とつあえず今は村を復旧させないとなー！」

そんなこんなで避難していた村人達と合流し、村をあらかた片付け終えた俺達は、そのままバートさん宅へお邪魔することにした。

「貴方、おかえりなさい。ツクモさんもお待ちしておりました。シーナ、ミレル、ツクモさんを手洗い場まで案内してあげて？」

「はい、わかりました」

「お兄ちゃんひつねだよー！」

俺達を迎えたのはバートさんの奥さんで、ジーナさんだ。村人と合流したときに挨拶を済ませている。

バートさんの家は被害があまり無かつたので、ジーナさんは先に食り夕食の準備をしてくれていた。

「貴方、本当に無事でよかつたわ・・・」

「ああ、ただいま。ジーナ・・・」

そして抱きしめあつていたことは、それはまた別のお話。

「つめーーーれつめーーー！」

「いじや九十九、はしたないぞ！」

「ふふふ、気に入ってくれたみたいで何よりですわ。たくさんあるのでどんどん食べてくださいね？」

まじでうめーー！鶏肉っぽいのをトマトソースっぽいのでコトコト煮た料理をガツガツ食いまくる俺。  
他にもポテトサラダっぽいものや「ソシメスープっぽいものなど、  
全部つまーー！」

「ね、ジーナおばさんの料理おこしでしょ~♪

「ああ、想像してたのよつ更こつまーー！」

手を洗つてゐるときに、ミレルちゃんから如何にジーナさんの料理が美味しいかを聞いていた俺だつたが、その想像を遥かに上回る美味しさだつた。

昔、村一番のモテ男だつたバートさんを落とした料理がこれだといつ。やはり男を落とすには買袋を押されるのが一番らしい。

そして食べ終わつた俺達は、お茶を頂きつつ伝承について聞いてみた。

「バートさん、伝承についてと、よかつたらこの世界の常識なんか教えてくれませんか?」

「わかりました、お話ししましょう」

おつまんと、序まいを直してバートさんは話し始める。

「それは遠い昔からの伝承で、『この世界が滅びに向かうとき、神々の鏡から生み出されし者、世界を救うであらう。その者、神の語り手といふ者也』という話で、何でも聖剣などの伝説の武器を具現化し、世界を救つたといわれてゐるのです」

「なるほど、確かに鏡に吸い込まれたしなあ、それに具現化?もできるし・・・でも世界を救うって何だ?」

「最近なぜかわかりませんが、魔物達が活発化していふと噂になつてゐるのです・・・そちらの方が倒したオルガベアも、本来ならこのよつた所まで出でてくるはずはないのです」

うはー、これはベタな展開だぞー。きっとその原因は魔王とかそんなんだろ!

「ひとまず話はわかりました、それで」ひるの常識とか注意する」とつてありますか?」

「ツクモ殿はこれからどうなれるかわからずで」

「うーん、とりあえず旅をしてこいつかなと思つてます。なんか救わないと帰れなさそうだし?」

「なるほど・・・常識は追々教えてこきましょ。注意する点は、盗賊や山賊などや魔物がいるところ」とじょりか

うーむ、オルガベアみたいなのがうじやうじや居たら困るなん、Bランクって何かきてみよ。

「バートさん、オルガベアにBランクって言つてたのは何ですか?」

「ああ、あれはギルドによつて定められているランクですよ。ギルドといつのは村や町に必ずあります」

「ギルドですか・・・それって何か大事なんですか?」

「わうですが、冒険者なら登録したほうがいいかもしません。ギルドといつのはEからSランクまであります、クエストというのをこなしていけばランクが上がるシステムとなつてます。詳しいことはギルドで聞いたほうがいいでしょ」

「おー、やつぱりあつたか。何だかゲームの世界みたいでわくわくしてくるなあ。

「じゃあ、登録しておこうかな」

「それがいいの?」

「では明日シエラ達に案内をせましょ?」

わくわくしそぎて今日寝れるか心配になつてきたな。

「しかし・・この村はいいのですが、大きな町のギルドにオウカ殿を連れて行くのはやめたほうがいいかもしません」

「なぜじゃ?」

「冒険者といつのは、粗忽者が多いので・・・もちろんそうじゃない人もいるのですが」

「あー、なるほど・・・桜華は綺麗だし、特徴的な服を着てるからなあ」

「きつ・・・綺麗など・・・九十九に言わると照れるではないかあ」

あ、なんか顔を赤らめてクネクネし始めた。可愛いなあ。

「うーん、しかしなあ・・・連れていかないわけにもなあ・・・」

「それなら、元の姿に戻ればよからん?」

「できるのー?」

だつたら最初から言えよ！

「だが、町に着いたらの話だけどの」

「え、なんで？」

「人間の姿に憧れておったのもあるが、じつして九十九と触れ合えるという理由が一番じゃのう」

そういうながら俺にしな垂れかかつてくる桜華。ふおおおー柔らかいものがつ！

「ツクモ様、お茶のお代わりはいりませんか？」

「いいいい頂きます！」

いつの間に近づいてきたシエラちゃんから、例の「じとく黒い」オーラがあふれ出していた。

なぜだかわからないが、胃がキリキリしてきた。怖いです。

「ごほん、とりあえず今日のところはお休みになられたほうがよろしいですね。シエラ、二人を案内してあげなさい」

「はい、ではこちらですツクモ様、オウカ様」

にこやかに笑いつつオーラを漂わせながら案内してくれるシエラちゃん。これに比べたらさつきのオルガベアなんて怖くないぜ！

「ではツクモ様はこちらで、オウカ様はお隣の部屋になつてます」

「なんじゅと一緒にわは十九と回じ歸國に決まつてゐるー。」

「えええー。？ その姿でー。？」

「もうひるじゅ、それに夜はまだまだ長こゆべ、お楽しみと出でりつ  
ではないか」

お、お楽しみつてーだめだめーなーあるつもつなのーー

「ハルも醒めので、ナリニツわナには參つませんよ・・・」

おばさまはまばさま、シヒリちゃんのホーリが更に噴出しつて渦巻こつてゐるよー。ハハハハハハ聞こえるよー。？

「む、む、・・・なりませ方にの・・・」

「わかつてください、あつがとひるじゅこまゆ」

シヒリちゃんつえええー

やつて異世界で初めての夜が更けていった。

## 第4話（後書き）

はいー読んでくださいありがと「ひざれこました！」

ほんとにちゅうとしか説明してないのですが、少し補足を。  
世界の名前とか大陸とか国の名前とかは、次の町で明らかになります。決してこの話で説明するのがめんどくさいんじゃないですよ？

後は考えてるのですが、シトワ&ミーレルをレギュラーにするか、ここでお別れにするか悩んでおります。

シナリオをちゃんと考えてこるとこちわけじやなくて行き当たりばつたりでやつてこるとこになるんですね、わかります（・・・・）

そんなわけでして、もしレギュラーにしてくれー!ってこいつでしたら「一報をW

では感想などなど、お待ちしております。

## 第5話（前書き）

皆様こんばんわー。

やつてきました、冒険者ギルド。綺麗なお姉さんに話しかけ、説明も終わりこぞクエストへーといつお話になつてます。まだ冒険に出ません・・・ああ！物を投げないでください！痛い！

相変わらずの説明パートですが、『容赦ください。

ではじづー

「ふあーあ、よく寝たあ

昨日は案内された部屋に入つてすぐ、ベッドroomしてしまつた。疲れてたのかな。

眼をこじこじと擦りながら、ベッドから立ち上がる。

「んー・・・今何時だろ?」

もちろんこの世界には時間の概念はあるらしいが、この家には時計がないらしい。ちょっと不便だ。

「まあ、大きい町に出たら探してみるか

そう呟き、俺は居間に向かつた。

「おはようございます、ツクモ殿。今朝は早いですね

「おはようございます、パートさん。早いって今何時くらいですか?」

「太陽を見るに、8時くらいでしおうな。よく眠れましたか？」

「なんと、田覚まし無しで8時に起きた！人生初の快挙だ……。

「ええ、おかげさまでよく眠れました。太陽を見るにって、時計はないんですか？」

「残念ながら……」

そう聞くと、バートさんは申し訳なさそうな顔をした。

「時計というのは高価でしてな……一般家庭で持つてる人はあまりいないのです」

「さうなんですか……といひで、他の皆は？」

基本手作りになるから高いんだろう。

これ以上聞くのもアレなので、話を変えることにした。

「ジーナとシエラは朝食の準備を、ミレルとオウカ殿はまだ寝てゐようですね」

「そうですか、じゃあ俺は桜華を起こしてきますね」

さてさて、桜華の部屋は……」とか。

あいつ鉄扇だったときから寝起きが悪かつたからな……物で低血圧ってなによ？

「桜華ー、入るぞー」

「ん・・・う・・・」

「おー、案の定ぐつすりだな

シャツとカーテンを開け、桜華を揺する。

「おーい、起きるー」

「わう・・・後3年・・・」

「なげよーせい、起きるー」

「んだけ寝るんだよー！」

そつ心の中でもつこみつつ、起きなこのでたつあより強く揺する。

「む、むー・・・九十九・・・つてもお・・・」

「つあおーこらー抱きつこいくるなー！」

柔らかいんですー何がとは言わなーなどねー

「ふふふ、つてもお・・・一緒に寝よ・・・う・・・」

「だーーーまた寝ようとするなーそして俺をひっぱつこむなーーー

そんなやつとりをしてると、ガチャツとこう音が聞こえ、一拍置いてからものすごい殺気が押し寄せてきた。  
この感じ・・・シHラフちゃんかー？

「朝から、なにを、しているの、ですか・・・？」

「ひこつー、なんでも『わざこません』…」

起しへきたミレルちゃんを連れて入ってきたシトウちゃんは、笑顔を浮かべながら聞いてきた。

その区切りの言葉に恐怖を感じた俺は、今までにない速さで桜華から離れる。

「ちつ・・・、い所で邪魔しそうで・・・」

「起きてたのかよー、」

舌打ちしながらのやのやと起きあがじぬ。

桜華・・・恐ろしい子・

「朝食ができましたので、エリナ、こりしてくだやー」

さわやかにこり笑顔とは裏腹に殺氣を放つシトウちゃん。  
失神しそうなんで、殺氣やめてください。

「ツクモ殿、ギルドの登録が終わったらすぐに出発なれるのですか

？」

「あー、それも考えたんですけど、旅をするのにお金貯めないと行けないので、この村で少しクリストをしようとかと思つてます」

何にしても、先立つものは必要なのですよ・・・

「なるほど、いかほど貯めるおつむつですか？」

「んー・・・旅をするのに十分なぐら」ですねえ

「ふむ・・・これからこのことを考へると5000ゴールドくらいで  
しうつな」

「ゴールド？」

なんだ？ じつちの通貨か？

そういえば金の事とか何も知らないな、俺。

「ああ、ツクモ殿は「ちうの」とことをよく知らなにんでしたな

「ええ、よかつたら教えてくれませんか？」

「わかりました、まあこの大陸の通貨は「ゴールド」といいます」

バートちゃんはさう言いつつ、腰の袋から一枚のコインを出した。

「これで1、ゴールドですね。この銅貨のほかに、銀貨と金貨があり  
ます」

「へえー、銀貨と銀貨の価値ってどれくらいですか？」

「1Jの銅貨1000枚で銀貨一枚、10000枚で金貨一枚となります」

ふむふむ。

「そして銀貨10枚で金貨一枚ということですね。例外として、このコインが欠けたらその分だけ価値が下がるようになってしまいます。その場合は受け取る側との話し合いでなると思します」

「なるほどー、うーん・・・どれくらい貯めればいいんでしょう?」

「そうですね・・・大人一人が一日で使う食費が約30ゴールドです。宿は高級じゃない所なら80ゴールドから100ゴールドくらいですから、万が一のことを考えると5000ゴールドくらいがよろしいかと思います」

「ほー、そんなものなのか・・・つまり、1ゴールド100円って感じか?」

そう考えると、5000ゴールドは中々貯まらないなあ。

「宿代があつては中々貯まらないでしょう、どうぞ我が家をお使いください」

「え、いいんですか?」

「もちろん、この村を救つてくださつたのです。これくらいは当然ですよ」

そう言つてははははとこにこやかに笑うバートさん。そこには痺れる憧れるう！

でも悪いなあ、食費くらいは払つたほうがいいよな。

「ありがとうございます、でも悪いので食費は出しますよ。クエストが無事終わつてからですが・・・」

「気にしなくても・・・と言いたい所ですが、そうしてくれると助かります」

そりや、襲われたばつかりならしかたないわなあ。

「ついでに、この世界の国々のこともお教えしましょうか？」

「あ、お願いします」

バートさんは机にあつた地図を取り出した。

「まずこの一番大きな大陸はドルーガリフといいます。そしてこの大陸にはザザーランド王国とミシシユガルド帝国がちょうど半分ずつ治めています。この二つは現在戦争はしてませんから安心を。そして私達が住む、フレッセント村があるのはザザーランド王国ですな」

地図の真ん中にはドでかい大陸がドドーンと描かれてある。地図から見ると、大きさや形はアフリカ大陸くらいか？

その左にはドルーガリフ大陸の半分くらいの大きさの大陸と、二つの大陸から少し離れたところに、一回り小さい大陸がある。

「この大陸と小さい大陸は？」

「隣の大陸アルーガリフといい、聖アルサルム教国が治めていて、  
その隣は未開の大陸ですね」

ほつほう、大陸は全部で3つしかないんだな。

「うーん、どこに向かうか・・・」

「目的がないのなら・・・そうですね、幸いここからサザーランド  
王國王都ザナログリフまで、歩いて10日もあればいける距離です。  
そこで色々と情報を集めるといいでしよう」

「おお、そなんですか」

じゃあ当面の目標は王都ザナログリフに向かうといつよ。

その後、バートさんにこの世界の常識と呼ばれるものを教えてもら  
い、一通り教わったところでギルドに登録をしにいった。

「冒険者ギルドによいよ」

到着した俺達は、窓口に向かい、早速登録をする。

「あの、ギルドに登録したいんですが」

「あつがとつりぞります、後ろの方達も」一緒にしようか？」

「ああ、登録するのは俺だけです」

「かしこまりました、ではこれからお名前をお書きください」

「わやー！バートさんに文字を教わるの忘れてたーー？」

異世界移動のおかげか、文字は読めるんだが・・・つーむ。

どうしようか悩んでいたのに気づいたのか、殴付のお姉さんがフォローハーベル。

「文字が書けないよつでしたら、私が代筆致します」

「あ・・・お願いします」

その気遣いに惚れちゃつたつです、お姉さん。

「かしこまりました、ではお名前をどうぞ」

「吉原・・・あー、ツクモ・ヨシハラです」

「ツクモ・ヨシハラ様ですね」

「おおつ、じつちではいつ書くのか。何か不思議な感じだ。

「それでは次に、戦闘タイプをおつしゃってください」

「戦闘タイプ……うーむ、俺の戦闘タイプってなんだ？」

わからなかつたので後ろの三人に相談してみる。

「勇者様はどうでしょうか？」

シドラちゃん、それは恥ずかしいとこうか、自信過剰すぎる！

「んー・・・お兄ちゃん！」

ミレルちゃん、もはや戦闘タイプじゃない！

「やうだのう、何があるのか聞いてみるとこ

「やうするか。すいません、戦闘タイプってどんなのがあるんです  
か？」

「戦闘タイプですね、一概にこれといった定義はありませんが。剣  
が得意なら剣士、いろんな武器を使うなら戦士、魔法が得意なら魔  
法使い、神に仕える者でしたら神官、といった具合になつております。  
もちろん騎士の称号を持つていましたら騎士でも構いません」

なるほど、でも俺つて剣は使えないし、魔法も使えないし、神に仕  
えてないし、騎士の称号なんてのも持つてないぞ。  
と、なると・・・

「じやあ戦士でお願いします」

「かし」まつました、では登録致しますのでしばらくお待ちください

い

そう声をかけ奥にひっこんだ受付のお姉さん。  
見計らつて桜華が話しかけてくる。

「九十九や、どうして戦士なのじや？」

「ほら、俺は剣もつてないし、唯一の武器ついでにいたら桜華だしな。  
だから戦士にした」

「なるほどの・・・そこまでわらわのことを想つてくれるとは嬉しいの？」

その言葉を聞いて何が嬉しかったのか、笑顔で抱きついてくる桜華。  
田立つからやめてくれ！

「お待たせ致しました、こちらのブレスレットをお付けください」

そう言いつつお姉さんが渡してきたのは、黒いブレスレットだった。

「これは？」

「こちらのブレスレットにツクモ様個人情報やギルド情報が入つて  
おります。もし破損や紛失した場合は千ゴールドで再発行を致しま  
す」

なるほど、結構高いんだなあ。

「続きまして、まず冒険者にはランクといったものがござります。  
このランクはクエストによってポイントがありまして、そのポン

トが溜まつたら次のランクに昇格いたします。そして、自分のランクより上のクエストは受けられません。さらに、同ランクの5人の方とパーティを組まれれば、一つ上のクエストを受けることができす。」

「なんだかややこしくなつて来たな・・・

「その上で一つ注意がございます。例えばツクモ様がランクEと仮定します。そしてランクDの方4名とパーティを組むときは、そのツクモ様のパーティはランクEの依頼しか受けることはできません。これはランクが低い方の危険を避けるための措置です。ですが、そうした場合ランクDの方はポイントが半分しかもらえない。ここまでよろしいですか？」

「はい、大丈夫です」

「続きましてクエストの受け方ですが、入り口右手側にございます、クエストボードから用紙を持って、こちらのカウンターで受付し、出発となつております。ランクごとに分けて張つてありますので、あちらからご利用ください。ツクモ様のランクですが、どなたからも紹介がなかつたのでEランクからとなつております。ランクEからランクDまでは500ポイント必要となつております。ランクはEからSランクまでとなつております。ランクが上がりりますと、下のランクでパーティを組んだとき以外、報酬の半分をギルドが頂くことになつていますので、お気をつけください」

「ランク上がつて、下のを受けると半額しかもらえないのか・・・まあ、ペナルティがないと下のクエストばっかり受けるからなあ。あと500ポイントつて長いのか・・・？」

「魔物討伐系のクエストを完了した場合は、魔物の部位を持つてください。それが証明となります」

「部位ですか？」

「はい、例えばランクEの魔物レッサー・アントでしたら牙、ワンハンドクラブなら爪といった物ですね。詳しくは魔物図鑑を購入するか、クエストを受ける際に私どもにお聞きください」

なるほどなるほど、如何にもクエストって感じだな。

「以上で説明を終わらせて頂きますが、何かご質問はござりますか？」

「んーと、特にないです」

「かしこまりました、ではまたのじ利用をお待ちしております」

説明を聞き終えた俺達は、早速ボードに向かった。何かいいのあるといいな。

「ふむ、農場の草刈り20ポイントヒー100ゴールドか……これつて高いのか？」

「どうなんでしょう……その辺にもよつますナビ、普通に受け分なり問題ないと思いますよ~」

「モーなのかー」

「ふふ、あまりやつたくなれりですね」

そりゃあ、草刈だしなあ……

「やつぱつ、クエストとこつたら魔物を倒したり、冒険だよなー」

「いや、心が熱くなる感じのやつがあればいいよな！」

「まあ、まだまだ時間あるし、よく吟味しておくかー」

「モーリジヤの」

「がんばってねーー」

「私達は家でお待ちしてます。クエストがんばってくださいね」

クエストについてこれないシーラナがやん達は家に帰つていき、俺と桜華はクエスト選びを始める。

「ふむ、ネコを探して、5ポイント10ゴールドか、ダメだな」

「モーリジヤの」

ちなみに、魔物以外は向こうの世界と同じ動物がいるらしい。  
あんまりいいのがないなあ・・・と思つてると、一番端にいいものを見つけた。

「桜華、桜華！遺跡調査だつてよ、これいいんじゃないか？」

「ほうー、でも危険ではないのかえ？」

「いや、魔物の掃討は終わつてゐるし、学者さん連れての調査なんだつてさ」

「ふむ、ちなみに報酬はどうなつておる？」

「100ポイントに500ゴールドだつてよ、行こうぜー。」

遺跡調査という如何にもファンタジー的なクエストに興奮してしまう俺。男として普通だよな！

はしゃいでる俺を見て、桜華は・・・

「ふふ、微笑ましいのう」

「おわー！子供じゃないんだから頭を撫でるなよー。」

「わらわにすれば、九十九はまだまだ子供じゃよ」

と、頭を撫でてくる。恥ずかしいからやめてください。

「とにかく、これ行けぜー。」

「うむ

こうして俺達の初クエストが始まるのだった。

## 第5話（後書き）

読みでくだせり、ありがと「いわ」れこました。

いきなり次の町にいくのもなーお金のこともあるからなーと思ひ、  
とつあえずしばしば滞在させておくことにしました。

次の話ではなんと・・・と期待をもつておまづく。

感想などなど、お待ちしておまづく。

## 第6話（前書き）

さくさく更新しますよ！

いつまでさくさく出来るかわかりませんけど、出来る限りがんばります！

さてさて、遺跡調査に向かうために依頼人の下へいく九十九達。合流し、遺跡調査に乗り出した依頼人と九十九。そこに待ち受けていたものとは！

ではどうぞ～

「甘える子猫亭は……あつた、ここだ」

遺跡調査のクエストを受けた俺達は、依頼人の学者が待つこの村で唯一の宿屋にやってきた。  
やたら可愛い名前の宿屋だな。

中に入ると、正面に受付があり、左手に階段、右手には食堂兼酒場があった。

俺は宿の主人に挨拶をし、そのまま右手に向かった。

「えーと、依頼人は……」

学者の特徴といえば、白衣やら変な帽子だと思つてゐる俺は、とりあえずそんな服装をしてる人を探し始める。食堂には数人いるのだが、村人っぽい人と冒険者っぽい人しか居なかつた。

「あれ、まだ着てないのか?」

クエスト依頼書を片手にキヨロキヨロしていると、如何にも冒険者!という感じのお姉さんが話しかけてきた。

「貴方、もしかして遺跡調査のクエスト受けたかしら?」

「え、はい、そうですけど……?」

「待つてたわ、私がクエストを依頼したクレアよ」

「ええっ、冒険者だつたんですか？」

「あはは、違うわよ。最近は物騒だからね、旅をしている以上学者と言つても戦えないダメなのよ」

「やうだつたんですか・・・」

どう見てもやり手の女冒険者にしか見えなかつたよ！

依頼人のクレアさんは、背は175cmある俺より少し小さいくらいで、綺麗な金髪ウエーブを肩口でそろえている。眼は碧眼で如何にも外国人ですよつて感じの美人さんだ。

「それにしても全然受けてくれる人が居なくて困つてたのよ、助かつたわ」

「え、こんな高いポイントとお金もらえるの?ですか?」

「ええ、いくら周辺の魔物を掃討したといつても、成り立ての冒険者は怖がつて受けてくれないし、かと言つてDランクにはこれより高いクエストばっかりだしね」

「はあー、ラッキーではなかつたのか

「見たところ貴方も成り立てのようだけビ、武器は何を使うのかしら?」

やつぱり成り立てつてばれてしまうのか、そんなことを聞いてきた。そりや心配だわな。でも安心してくれ、俺には桜華がいるからな！

(他力本願)

「ああ、俺は」こつを使います

「えーと・・・鈍器かしら?」

パーティーで依頼を受けたわけじゃないので、桜華には元の姿に戻つてもらつている。

クレアさんにいつものベルトに挿した桜華を見せたが、どんな武器か分からなかつたみたいだ。

「ちょっと違うんですけどね、いつやって開くと斬撃にも使えるんですよ」

と、開いた桜華を軽く振つて見せる。シュピッといい音が聞こえた。

「へえ、変わつた武器ね・・・それに美しいわ」

そう、桜華は閉じてみると黒い鉄の棒のよう見えてしまつが、開くと桜を象つた模様が、夜空一面に広がつていてとても綺麗なのだ。

(美しいといわれるとい、やはり照れるのう)

(まあ、実際に美しいからな)

(・・・ツー? )

ははは、照れてる照れてる。可愛いなあ。

「それで、クレアさんは遺跡でなにをするんですか?」

「ああ、あの遺跡には神を祭つていたみたいで、壁一面に不思議な文字が書かれてるのよ。それを一度見てみたくてね」

「ほー、そうなんですか」

神を祭つていたのかー、お宝がありそつだけど、もつ調べ尽くしてあるみたいだから、残念だけどもうないだらうなあ。ひえ。

「さて、それじゃあ早速いきましょうか」

「わかりました、がんばりましょうー。」

木の枝と枝の間から、燐々と煌く日の光を浴びながら歩くこと一時間。遺跡の入り口と思われる場所に到着した。道中、依頼書に書いてあつた通り、魔物と一匹も遭遇しなかつた。動物は居たけどね。

「これがここ の遺跡、フレッセント遺跡よ

「おー、ここがそなんですか」

フレッセント村にあるからフレッセント遺跡とこいつらしく、安直だ

ね！

「ち、時間も惜しごし行きましょ、ひ

「はい、」

「うおー、遺跡だ、生遺跡だーーとはしゃぎながら調査を開始する俺。クレアさんは若干興奮気味に壁の文字を読み、書か『』しながら進んでいく。ちゅうと色っぽい。

「はあ・・・すばらしいわ。ここまで完璧に残ってるなんて・・・」

「普通の遺跡つてこんなに綺麗じやないんですか？」

「せうなのよ、大抵は所々魔物に壊されてたりとか、ギルドに発見を報告しない低脳でーー種でーー屑なーー冒険者に荒らされてたりするわ

「ちよ、クレアさん怖いです！

しかし、本当に学者なんだなあ・・・と感心する。

「もちろん、そんな冒険者ばかりではないのだけどね」

「あ、あはは・・・気をつけます

「やつして頂戴、遺跡といつのは先祖が私達に残してくれた貴重な財産よ。それを壊す、荒らすといつことは先祖の顔に泥を塗る」と同じだわ」

「熱心なんですね」

「あはは、学者として当たり前のことを言つただけよ」

「若干照れながらもやうやく答えるクレアさん。尊敬しちゃうねー。

「」の先にある大部屋が私が一番見たかった所よ、魔物も居ないみたいだから、書き写すことに集中できるわね」

石で出来た大きい扉を一人掛けで開いた先は、ドーム型の部屋になつており、先祖が残したとされてる文字や絵が、壁一面に描かれていた。

「ああ・・・すばらしくーとてもすばらしくー！」

さつきよりも興奮しながら一心不乱に書き写すクレアさん。

「しかしこれだけのものを書き写すつて時間かかりそうだなあ・・・暇だし、」のいらへんぶらぶらしてくるか。桜華もそつしたいだろ?」

（つむ、やうじゅの。しかしここは神聖な空氣が満ちておるのう。気持ちがいいわ）

「ほー、そうなのか・・・クレアちゃん!俺ちょっと周辺を見てきますね!」

「わかったわ、気をつけてね!」

いきなり居なくなるのもどうかと思い、クレアさんに声をかける。返事をもらつたし、行きますか!

この部屋に来る途中に、色々と小部屋があつたので、そこを見てまわることにした。クレアさんが学者仲間から聞いた話では、小部屋には文字や絵が描かれてないらしく、クレアさんは素通りしていた。しかし異世界初クエストな俺としては、全部見て回らないと気がすまない!…ということで只今見回っている最中である。

「ほー、石で出来た寝床だ。机もあるし、使用人の部屋かね」

(どうやらそういうみたいじゃのう)

あちこち見て回っていた俺だが、今まで見てきた小部屋とは違う感じの部屋にたどり着いた。

「今までが使用人の部屋なら、ここは偉い人の部屋みたいだな」

中に入り、色々と調べまわる。遺跡つてすごいなあ。

(む・・・九十九、何なら隅にある岩から大きな神氣が溢れておる)

「神氣?この変な模様の入つた岩からか?」

(いや・・・この奥からじや)

奥? て」とは動くのか? よーし、やつてみよ! 一.

「せえ・・はあ・・せえ・・はあ・・・全然動かねえじゃんか!」

押したり引いたりしてみたが、全然びくともしなかった。

(おかしいの? ・・確かにこの奥から溢れてくるのじゃが)

「あくしょつ、岩の分際で!」

腹が立つた俺は、岩の側面を強く蹴った。すると・・・

「ガガガガ」とこづ音と共に脚が横にずれていった。なぜかと思い調べてみる。

よく見ると、つま先が当たつた部分が少しへこんでいる。なるほど、へこんでる部分に強い衝撃を加えると動く仕組みになつてゐるのか。

(おおひ、でかしたぞ! 九十九! )

「おひよー。じやあ行つて見よつぜー!」

「ソソソソと下に続く階段を下りていった俺達は、さつきの大広間にあつた扉より豪勢な作りの扉が現れた。

（ほおー、すばらしこの。この事をあの学者に知らせなくていいのかや？）

「んー、もしかすると魔物がいるかもしないし、先に調べてから報告するぞ」

魔物が居たとして、学者さんに戦わせるわけには行かないしな。

（そうか、では参りうござ）

「うし、思いつきり押すぜ！」

さつきは一人掛けでゆっくりと開いていったから、一人だし思いつきり押してみよう。

「いくぜー、どりやーっあああああーー？」

手が触れた瞬間に、カコンといとも簡単に開いた扉。思いつきりよく開け様としたせいか、勢いあまって転がってしまった。

そして、何か硬いものにゴンッと後頭部からぶつかった。

「いつてえええ！？」

うおおお、と頭を抑えて悶えていた俺に桜華が声をかけてきた。

（九十九、九十九！）

「おおうおう・・・お・・・おー、ビンした?」

(「の剣から神氣があふれ出してゐるよ」)

「剣だと?」

まだ痛むが、気にせず後ろを向く。するとそこに、とても綺麗な剣が刺さっていた。

半分ほど埋まっているが、刃には壁で見た昔の言葉が刻んであって薄く光っている。上にいくと鐔には大きな青い宝石がはめ込まれており、両側には羽の模様が刻まれている。

そして柄頭には、鐔と同じ宝石がはめ込まれてあった。

「ほおー・・・綺麗だな・・・」

(九十九! 不用意に触れるでない! )

いつの間にか、綺麗な物を手にしたいという欲求に負けて、柄を握つていた。

すると頭の中に声が響いた。

(私の声が聞こえますか? )

「お、おう・・・聞こえる

(ああっ、この時を・・・この時をどれほど待ち続けたことか・・・  
!)

愛しこものによつやく会えたよつた、感動した声が響く。

「む、むう・・なんだかよくわからないが、良かつたな？」

(はーつー・本当に良かったですー)

「つむ、元気がよろしくよいで。それじゃー！」

シユタツと手を上げ、その場を去りひしする俺に焦ったがり声を  
かけてくる剣。

(あああー・待ってくださいー！行かないでつーー)

「あはは、冗談だよ、冗談」

(主様は意地悪です・・・)

「いのちめコ・・・主様？」

(はーい！主様ですー！)

えーと、どうこういとなの？

「あの、主様つて・・・？」

(え？主様は主様ですけど・・・呼び方嫌ですか？)

「いや、それはどうでもいいんだけど、何で主様なの？」

(だつて、語り手様ですよね？)

「えーと、何かそつみたいだけど・・・」

(私は語り手様のために作られたんですね、ですから語り手様が主様なんです!)

おおいー・じうこひーとだこれー!!

「つ、つまり・・・君は俺の物つてこと?」

(いやん、主様つたら大胆・・・でもそういうことあります・て・き )

す・て・き じゃねえよー訳を説明しろ!

(まあ、落ち着け、九十九よ)

「あ、ああ・・・そうだな」

(む・・・そこの貴方は何者ですか?)

(む?わらわは九十九の嫁じゃが・・・)

(なんですか!?)

「こいつは俺の相棒だ、名前は桜華

(や、そうでしたか・・・)

(相棒・・・九十九のいけずう)

じょげでいる桜華をまおつておいて、話を進める。

「それで、俺が君の主ってわかったけど、名前とかってあるのか？」

（あ、そうでした。私の名前は聖剣セラファイムと申します。主様）

「セラファイムが、セラファイムでいいか？」

（はいっ）

「それでセラ、俺が君の主ってわかったけど、どうすればいいんだ？」

嬉しそうにしているところを悪いけど、話が進まないんでな！

（あ、はい。えーと、私を抜いてから、力を籠めて、顕現せよと強く念じてください）

「ああ、あれか。わかった」

柄を持ったままだった俺は、そのままゆっくりと上に抜いていく。セラは想像以上に軽く、まるで羽を持っているようだった。そしてそのままセラを両手に構え、力を籠めて念じる。

「顕現せよー」

その言葉と共に部屋一面に眩しくも優しい光が広がつていった。

## 第6話（後書き）

はい、いかがだったでしょうか。

新しい仲間が出来ましたよ、その名も聖剣セラファイム！

ペンネーム見て分かる方もいると思いますが、私は天使が好きなんです。

なので、どうせなら天使の名前でいいかなー?と安直につけました。本当は天使の名前じゃないんですけどね、役職みたいな感じですwでは、感想などなど、お待ちしております!

## 第7話（前書き）

この小説にアクセスしてくれた方が、なんと1万人越えました！  
こんな駄文を読んでください感動しております！！

これを励みにがんばって行きますので、どうかこれからもよろしく  
お願いしますw

ではどうぞ~

眩く優しい光が徐々に引いていく。

ゆっくりと眼を開けると、超が着くほどに美人さんが田の前にいた。

「セラ……か？」

「はい、主様。セラヒジギぞいます」

「はあー……えらい美人だな」

「まあ、照れてしましますわ」

（浮氣者ーー）

率直な意見を言つたらセラが頬を染めて照れる。ていうか桜華、浮氣者つてなんだよ！

背は俺の肩くらいで、美しく輝く銀髪を青いリボンで腰で纏めている。

眼の色は深みのある蒼色で、鼻筋はすっと通っていて、黄金比に極まりな顔をしている。

プロポーションは出てこないとこれは出て、引っ込んでるとこれはキュッとしまつている。

服装は膝丈までの真っ白なワンピースに、銀で出来たこの世界の古い文字が刻まれた胸当てと間接を守るプロテクター、それと同じく銀で出来たガントレットとブーツ装備している。

腰には革で出来たコルセットとびつしりと古代文字が刻まれたベル

トをつけており、自分と同じ剣が銀で出来た鞘に收められてゐる。うまく想像できない人はどうぞの騎士王みたいな格好と思つてくれていい。

そんな風に観察していると、セラは俺の田の前で片膝をつき、祈るような姿勢になつた。

「私はとても長い間、主様をお待ちしておりました。これからは貴方の剣となり、邪惡なる者を全て切り払い、主様に指一本触れさせないとこの剣に懸けて誓います」

「う、うん。よしきくな、セラ」

「はい、

（一応、よしきくなしてやうともない・・・だが九十九は渡さぬぞー）

「ふふ・・是が非でも頂きましょ」

ああ、桜華とセラの間に火花が散つてゐるののはせだらう・・・

と、そんな風に現実逃避していると、セラが真剣な顔つきになつた。

「どうした？」

「主様、悪しき気配・・・? つて魔物か! ?」

「悪しき気配・・・? つて魔物か! ?」

「はい、気配の数が多いので恐らく群れでしょ！」

「た、大変だ！早くクレアさんに知らせなきや！」

つていうか、この辺の魔物掃討したんじゃねえのかよ！」

「大変だ！クレアさん！」

「ひやつー、どうしたの？」

壁画を「写す」ことに集中していたクレアさんに、魔物の襲来を大声で知らせる。

「魔物の群れがこっちに向かってきているらしいんだ！早く逃げないと！」

「あはは、そんなまさか・・・本当なの？」

「はい、間違いなく」

「貴方は・・・？」

「そんなことよつも早く逃げないと…」

今はセラを説明している時間も惜しい、初クエストで死亡なんてやつてられるか！

「もしそれが本当だとしたら、この遺跡は魔物に荒らされてしまつかもしれないわ」

「そ、そつかもしれないけど…」

「私は貴方に説明したはずよ、こんなすばらしい遺跡を破壊させたりなんかしないわ！」

剣を抜き放ち、天高らかに宣言するクレアさん。  
か、かつこい・・・じやなくて！

「でも群れなんだ！俺達では・・・」

「ふふふ、主様は私をお忘れですか？」

「え、セラ・・・？」

「気配からして、数は30近くですが、私には造作もありませんわ」

見惚れるような笑みを浮かべ、そう言い放つセラ。

そんなセラに桜華は確信をもつて言った。

（まあ、あの程度の気配ならセラにはかすり傷一つつけられないだろ？。無論わらわも余裕じゃがの）

「そつなのか・・・3人なら何とかなる・・・のか？」

いや、でも依頼主に戦わせるわけにも行かないよな・・・

「ふふふ、主様達のお手を煩わせる」とも「ございません。私一人で十分ですわ」

「す、すごい自信ね・・・とにかく、早く外に出ましょう」

外に出た俺達は、ここに向かつてくる魔物を待ち構える。

ドドドッと地鳴りが聞こえ、遠くに魔物らしき影が見てきた。

「あれは・・・ロランクのサーベルウルフの群れね。でも何て数なの・・・」

クレアさん曰く。

サーベルウルフはその名前の通り、サーベルのような長い牙を持つた狼だ。

大きさは成人男性くらいで、動きはすばやいが攻撃は単調なのでランクは低い。

だが群れだと必ず一回り大きなボスがいる。そいつが統率しているので少しばかり厄介な敵らしい。

普段は5匹程度の群れなのだが、今回は30匹近く・・・なんでこ  
んなに?」

「恐らくだけど、ここでの掃討で群れ同士が合流したんだと思つわ。  
そして住家によわやうなこの遺跡に来たんでしょう」

「なるほど・・・セラ、こけるか?」

「お任せください。主様」

美しい剣を抜き放つ、遺跡内でも光っていた刃だが、日の光を受けて更に輝きを増す。

そして剣を構え、一気に飛び出す!

凄まじい速さで先頭にいたサーベルウルフに横薙ぎで切りかかる。そのあまりの速さにサーベルウルフは対応できず、無抵抗のまま真っ二つに切り裂かれる。

振り切ったセラは、その勢いを殺さず回転し、横にいた奴らの首を飛ばす。

暴風みたいな攻撃で、一瞬にして5匹のサーベルウルフを屠つたセラ。

それを見て、ボスは指示を出すよつに遠吠えをした。

その遠吠えを聞いた部下達は、セラを囲むよつに散開する。

「少しほは頭が回るよつですが、その程度では私を止めることはできません、よつ!」

完全に囲まれる前に動き出すセラ。狙いは一点、ボスのみだ。

部下を散開させたことによって、ボスを守る壁は薄くなつたといつたのだ。

「はああああっ！」

剣に光を纏わせたセラは、ボスを守るつと前に出てきたサーベルウルフ達に向けて剣を振るつ。

剣から凄まじい衝撃波が生まれサーベルウルフ達を切り刻んだ。

「ふつー！」

後ろから飛び掛ってきたサーベルウルフを後ろ回し蹴りで吹き飛ばし、横からきた奴を反動を利用して両断する。囮まれているのを物ともせずに、近づけさせないセラ。

嵐のような斬撃と、時折体術を織り交ぜ、サーベルウルフはどんどん数を減らしていく。

敵を蹴散らすその姿は、まるで美しい剣舞を見ているようだつた。

一歩引いたところから見ていた群れのボスは勝てないと悟り、部下に指示を出す。

殿を数匹残して、撤退することを選んだみたいた。

「そう簡単に逃がしません！」

指示を受けた部下は、決死の覚悟でセラに向かつてくる。

しかし、セラは剣を上段に構え、神々しく輝く神氣を大量に纏わせる。

「我が振るつは断罪の剣、我が放つは戒めの光、聖なる輝きー・ジャ

ツジメント・セイヴァアアアアアーー！」

目が眩むような輝きを纏わせた剣を振り下ろす。

刹那、凄まじい光が轟音と共に、向かつてきたサーベルウルフ達を飲み込む。

しかしそれだけでは止まらず、大地を抉り、岩を砕き、木をなぎ倒しながら一目散に逃げていた群れをも飲み込んでいった。

「ど、どうなったんだ・・・？」

光が收まり、ゆっくり目を開け前を見ると、セラの前から扇状に約100メートルにわたり、近くにあつたものは全て消滅していた。岩や木、そしてもちろんサーベルウルフ達も。

残った木から木漏れ日が降り注ぐ下で剣を鞘に收め、一ひらに振り返り、誰もが見惚れる笑顔を浮かべ、セラは爽やかに言つた。

「ふふ、神罰完了です 」

## 第7話（後書き）

読んでくださいり、ありがとうございました！

少し短いですが、如何だったでしょうか？

・・・はい、すいません。戦闘シーンに迫力がないですよね。わかります。

本当はもっと凄いんです、セラさんは！ だけど私に文才が無いためにこんなことに・・・これからもっと精進していきたいと思います

（ ； ； ）

では、感想などなど、お待ちしております。

—モウタリ！

戦闘シーンのグダグダ感に定評のあるがぶりえるです！

もつと迫力のある戦闘シーンが書けるようになりたいですね。・・・  
どなたか矮小なる私めに文才をください・・・(、;:、)

あ、補足ですが。

セテの一人称である私はワタクシと言っています。分かりづらくて申し訳ありません(・・・・)

サーベルウルフ達を殲滅し終えた俺達 といつても、実際に倒したのはセラだけだが は一先ず遺跡の中に会った使用人達が使う1室に集まっていた。

戦闘終了後からこの部屋に移動するとき、そして今にかけてまでクレアさんはセラのことをじーっと見ている。

しかしそんな視線を物ともしないのか、にじにじと俺の隣に座つているセラ。

さて、どう説明しようかな・・・。

「え、えーと・・・」

「ツクモ君」

「ひやー!」

とつあえず、大部屋に来る前に会つたと言えばいいかなと思つていた俺は、こきなりクレアさんに名前を呼ばれ変な声が出てしまつた。

「その子は一体・・・?」

「いじつはですね、そのー・・・」

なぜクレアさんに本当のことを言わないかといふと、俺が語り手と知つた場合における一つのマイナス面を考えたからだ。

第一に、クレアさんが国とつながりがあつた場合、城に連れて行か

れて王に会い、勇者とかしてか英雄としてか担ぎ田され、国にいよいよに使われてしまう可能性。

そして第一に、クレアさんは歴史学者だ。そこに遙か昔からある伝承の中に登場する者が現れたら、どこぞの研究機関に連れて行かれて、研究というな実験動物にされてしまうかもしれないじゃないか！

（一つはわからんでもないが、一つは考えすぎだじや）

（こやこやー！）は慎重に行かないとダメだ！）

（主様、私はここの人に話しても大丈夫だと思いますよ？）

（む、なんで？）

とこうか、人型でも念話出来たんですね。

（この人からは邪まな気は感じませんから）

（へえー、そういうのもわかるのか）

（ええ、ですから信頼してもよろしいかと）

（うむ、まだ一抹の不安は消えないが話してみるか。

「ええとですね。こいつとは、この遺跡の地下で会つたんです」

「地下？そんなものはないはずだけど・・・」

「大きい部屋を調べてたんですけど、そこの暗闇から階段が出てきて、降りたら居たんです」

「す」こちつくり説明してしまった。通じるかな？

「大きい部屋・・・大神官の部屋かしら？ちょっと案内してもらいたい？」

「あ、はい」

大神官の部屋に入り、中についた階段を下り、扉の前にたどり着く。

「こんなところが・・・ここも書き跡かな」と

「ど、とつあえずそれは後にして中に入りましょー」

「あ、え、ええ・・・そつね」

なんだこの人、壁画書き写したい症候群にでも患っているのか。そう思いつつ中に入る。大丈夫、今度は転ばないさー。

「す、す」こ・・・地下なのに明るいし、何よりもこの壁画・・・

!

えー、JULYの会いたんですね」「

「でも、何だつてこんなところ? ツクモ君より早く見つけてたのかしら」

「いえ、私はそこに刺されてたんですね」

「刺され……？」

セラは自分が刺さっていた場所を指差す。しかしクレアさんは意味が分からなかつたみたいで、説明して欲しそうにこちらを見る。間違えじやないけどさ、その説明じや誰にもわからぬと思つぞ・・

「とりあえず、見てくれば早いと思います。セラ、一回剣に戻つてくれないか？」

「わかりました」

とにかく、ここに立って歩こうとしても、さながら田の前で止める。  
動きが一々可憐すぎるんだよ！  
セラの肩に手を置き、集中する。

「送還」

すると一瞬光つたあと、俺の手には剣の感触があつた。

「え、あの、え・・・？」

「まあ、驚きますよね」

「え、えっと、どうなってるの・・・?」

「えーと、神の語り手の伝承について知っていますか?」

「え、ええ、大陸中に知られてるし、私達歴史学者の最大の研究対象だから・・・ま、まさか!」

「何か俺が語り手みたいです」

あ、クレアさんが固まつた。

ずっとこんな調子である。困つたな。

「と・に・か・く・わつきみたいな口調でいいですかー!」

「わ、わかりました・・・いえ、わかつたわ」

やつと戻つてくれた。しかし語り手つて偉いのか?  
でもあの家族は・・・そいえばミレルちゃん以外は敬語だつた気が  
がする。

「クレアさん、語り手つてひよつとして偉かつたりする?」

「ええ、伝承にも残されているくらいだしね。それに実在したとい  
う記録は残されているから、恐らく大陸中の王よりは偉いはずよ」

「うひやー・・・」

そんなに偉かつたのか・・・実感がわかないなあ。前の世界の家で  
は一番地位が低かつたし。

それにもしても、俺が語り手とわかつても態度を変えなかつたミレル  
ちゃんは大物になるな。

「びつくつするのはこいつのほうよ、まさか本物の語り手に会える  
とは思いもしなかつたわ・・・」

「本物のつてことは、偽者がいたつてことですか?」

「ええ・・・それこそ山のようにな。ただの鎧びた剣を持って、偉  
そうにしている奴とかたくさんいたわよ」

「その人達ってどうなったんですか？」

「死刑ね」

ひいいいい！？

そんな重罪になるの！？

「とりあえず私は壁画を書き[下]す作業に戻るわ。[上]も書き[下]せないといけないからね」

「あ、すいません。護衛は俺の仕事だったのに、作業を中断させてしまって」

「謝らなくていいわ、それに貴方のおかげでわかったことがあるから」

申し訳ない気持ちで謝った俺を止めたクレアさん。

わかったことってなんだ？

「わかったことって？」

疑問に思い聞いてみると。

「[上]の遺跡が語り手のために作られたことがわかったからね」

クレアさんは見惚れるよつた笑みを浮かべ、ウインクしながら言った。

惚れちゃいました。

(（浮氣者ーー））

ええい、黙れ！

クレアさんが書を跡しているのを見守りながら、俺は思ったことをセラに聞いた。

「やつにえはセラ、お前つて鞄はないのか？」

（鞄ですか？ありますよー？）

「む、どこにあるんだ？美しい剣と言つても、流石に抜き身のまま持てないからな」

（こやん！もう、美しいなんて主様つたら）

（こ）で装飾のことつて言つたら怒るだろつなあ。まあ人型でも恐ろしく美しいんだが。

そんなことを考えてると桜華がちよつと焦つたように聞いてきた。

（九十九よ、わらわはどつなのじやー）

「ん？ ああ、もちろん桜華も綺麗だよ」

(「ひむひむ、やひひあひひ」)

ああ、可愛いなあ・・・！」の子達。

「それで、鞄はどこにあるんだ？」

(あ、えっと、刺さつていた所の近くにあつたはずです)

「どれどれ・・・お、あつた。

セラのインパクトが強すぎて忘れてたな。

セラを鞄に入れ、ベルトに挿す。

ちなみに桜華は後ろのまづに挿している。

しかし後でこっちの服買わないとダメだなあ・・・旅をする」とも考えて、マントとかも欲しいな。

(確かにのう、そので「一しゃつとじーんずともらも格好いいんじやが、旅には不向きじやな)

(「そうですね、それにその姿じや寒そつですしき」)

「そうなんだよなあ、バートさんの古着つてもうえたりしないだろうか？」

そんな何気ない話をしていた俺達に、全て書き終わったのかクレアさんが声をかけてきた。

「何の話をしているの？」

「ああ、クレアさん、終わつたんですか？」

「ええ、もう全て書き[写]したわ。それで？」

「旅に出るための服装とか、道具とか何があつたらいいか話してたんですか？」

「ふふ、なるほどね

「む？ 何かおかしかったか？」

「ああ」「めんなさい」、伝説の存在がそんな話をしているのが面白くつて

「むう、伝説とか言われてますけど、俺はただの人間ですよ？」

「ふふ、はいはい。そうだったわね

何か訝然としないぞ！

俺達が村へと戻った頃にはもう夕方だった。そしてギルドで依頼完

了の手続きをした。武器が一つ増えていたが、タイプを戦士にしていたので特に不審に思われなかつた。

ちなみに、サーベルウルフの群れのことは、セラのジャッジメント・セイヴァーで大半が消滅していたので報告だけ済ませた。

「なんか、終わってお金貰うのって嬉しいなあ」

「ふふ、ツクモ君はすぐ旅に出るのかしら?」

「いえ、旅の道具や服とか集めないとダメですし、お金もある程度ためないとダメだと思うんでここを拠点にしばりくつもりですよ」

そう答えるとクレアさんは「そうなのね」と考え込んだ。そしてなぜか若干頬を染めながら提案してきた。

「よ、よかつたら明日道具や服とか見繕つてあげましょうか?」

「え、いいんですか?」

「もちろん、ツクモ君の都合が良かつたらだけど……」

「喜んで……と言いたい所ですけど、お金足りるかなあ

一応バートさん」「バートの価値を教えてもらつたが、不安が残る。

「500ゴールドもあれば旅の服くらいなら簡単に揃えられるわ、それにも足りなくとも私が貸してあげる」

「む、流石にそれは悪いような……」

「いいのよ、気にしないで」

そう言われてもなあ、自分でいうのもなんだが、謙虚な日本人としては中々受け入れられない。

そんな気持ちがわかつたのか、クレアさんは俺の額を指で軽く突きいつた。

「人の気持ちは素直に受け取つておくれものよ。」

「はい、じゃあお願ひします!」

そんな言葉を受けた俺は、これ以上遠慮するのも悪いと思い、笑顔で承諾した。

どこまでも着いて行きます!姐さん!と言つてしまいそうになつたのは俺達だけの秘密だぞつ

(でーとじや・・・)

(トートですね・・・)

うるさいよー

つとねうだ、クレアさんに言つておかないと。

「クレアさん、俺が語り手つていうことは秘密にしてもらえませんか?」

「あら、どうして?公表すれば何もかも思つがままに出来るのよ。」

「んー、実感わかないっていうか、偉いってことに慣れてなくて・・・

・それに、偉くなつたら自由がなくなるじゃないですか」

確かに金とか美味しい物食べれるのとかは魅力だが、自由がなくなるのは嫌だ。

フリーダムで居たいんだ、エームフリーダム……フリーダムの綴りがわからなかつた訳じゃないぞ！ 本当だぞ！

「ふふふ、貴方つて不思議ね」

「む、どうしてですか？」

「普通は権力というものは魅力的なはずなんだけど……でも貴方のそういうところ、私は好きよ」

これは所謂、フラグといつやつでしょつか？

（何をー！ わらわのほうが好いておるー）

（私だつて負けません！）

あー、はいはい。ありがとう。

「それじゃ、私は宿に戻るわ。明日の昼頃来てくれる？」

「あ、はい。わかりました、昼頃ですね」

「ええ、それじゃまた明日」

そういう残し颯爽と去つていつたクレアさんを見送り、明日のことを考える。

うーむ、そう言われると確かにデートか・・・だからクレアさんは照れてたのか？

（九十九！わらわも行くぞ！顕現せよ！）

(私も行きます！顕現してください！)

さてさて、明日が楽しみになつてきたぞ。

( ( #0-----! ! ) )

そんなこんなで、俺の人生初の冒険は終わつた。

## 第8話（後書き）

とこりとしたー！

いやー、戦闘シーンだと行き詰まるナビ、日常シーンだとこんなに書けるのは何でしょーつー不思議つー！

次回ですが、新たなる可愛いあんけくしじょうが増えるのでお楽しみにー！

では、感想などなど、お待ちしておつます！

## 第9話（前書き）

どうもー！

今日はクレアさんとお買い物、もとい「ドートのお話です。  
でも途中で戦闘が入つたりしますので、こんなに長くなつてしまい  
ましたw

あと2話ほど進んだら冒険に出ますので、今しばらく日常をお楽し  
みくださいませー！

### 補足

お金のことに関してですが、多少変更しました。

大人一人当たりの一日の食費は30ゴーラード。

そして銅貨1000枚で銀貨1枚、10000枚で金貨1枚とされ  
てますが、銀貨10枚で金貨1枚にもなります。

では第9話、始まり始まり～

「ん、んー……頃まで寝てるつもりだったけど、目が覚めちまつたな」

硬くなっていた身体を伸ばし、ベッドから降りる。

「桜華、セラ、起きてるか?」

（はい、おはようございます。主様）

（むー……もう朝かえ……?）

「おはよう、二人とも」

カーテンを開けて桜華達に声をかける。

なぜ桜華達が俺の部屋で寝てるかといふと、セラが俺の部屋で寝るつて言ったのに對し、桜華が対抗して自分も寝ると言つて一悶着あつたからだ。

人型だつたらどっちも部屋に入れなかつたが、元の姿だつたので受け入れた。

「なあ、まだ時間あるしギルドでクエストでも受けていようぜ」

（せうじゅのう、金も稼がねばならぬからな）

（そうですね、魔物討伐は私と桜華さんが居れば楽勝ですし）

昨日クエストが終わり、パートさん宅へ戻つた俺達。

無事に帰ってきたことと成功したことをパートさん達は自分のことのように喜んでくれた。

そしてジーナさんのご飯を食べ、風呂に入り、ベッドに入つたのだが、その時に約束通り、500ゴールドの内30ゴールドを食費として払つたのだ。

470ゴールドではある程度は買えるだらうが、十分な装備は無理だらう。

クレアさんは足りなかつたら奢つてくれると云つてくれたけど、それに頼るわけにもいかない。

別に装備集めてすぐ出発といったわけでもないので、のんびり集めていけばいいのだが、早くクエストといったことに慣れておきたいのと、金を貯めておきたいといった思惑もある。

それを踏まえて、時間あるときはギルドでクエストを受けよつと図つたのだ。

「おし、やつと決まれば早速準備して行けりつー。」

(はこー)

(つむり)

「さて、何かいいクエストないかなあ。むぐむぐ

ギルドに到着した俺は、ジーナさんに作つてもらつたサンドイッチを食べながらクエストが貼つてあるボードを見ていた。  
少し固めのパンにトマトにキャベツ、厚めに切つたベーコンにジーナさん特製ソースをかけ、それを挟んだ物だ。めちゃくちゃ美味しいぞこれ！

（主様、あの派手な依頼書なんてどうですか？）

「ん、どれどれ・・・緊急・山奥のオルガベアの巣壊滅、30000ポイント3万ゴールド・・・つてランクAじゃねえかこれ！」

俺はまだランクEです！

（おぬがべあとは、あのモモくじやらのことかや？ 楽勝じやのう）

（それでしたら桜華さんと私が居れば余裕ですね）

「ギルドの規定で自分より高いランクは受けちゃダメなのー！」

それに怖いし！

（むう、つまらんのう）

（つまらないですねえ）

ぶーぶー文句いつてる一人を無視して、クエストを探し始める俺。  
お、なかなかいいのがあつたぞ！

「煙に出たレッサー・アント5匹討伐、30ポイント300ゴールドでランクEか、これにじょり」

クエストを見ると「」から煙まで20分くらいみたいだし、間に合うな。

そう思いボードから依頼書をはがし、受付にもつていく。

「これお願ひします」

「はい、ランクE依頼、レッサー・アント5匹討伐ですね。ブレスレットをお出しちゃい」

受付のお姉さんは、差し出したブレスレットに小さな針見たいのを差し込む。

この作業はブレスレットにクエスト情報を記録する物らしい。何らかの魔法で針に情報を読みこませ、それをブレスレットの穴に差し込んで、ブレスレットが情報を記録するといったことらしい。魔法つて便利だなあ・・・

そんなことを考えていると、受付のお姉さんが聞いてきた。

「ヨシハラ様、レッサー・アントのことば」存知ですか?」

「え、あー・・・魔物のこと全然わからないんですね」

「せうでしたか、よろしければ」こちらのギルド発行の魔物図鑑を貸し出し致しますが、いかがでしょうか?」

あー、昨日いってたやつだな!

「あ、お願ひします」

「かしげまつました、それでまだつゞ」

「ありがとうございます」

渡された図鑑を早速読みである。

レッサー・アント・・・アント系の魔物で、大きさは大型犬くらい。動きは遅いが、顎の力と鋭い牙には注意が必要。巣に餌を運ぶ役割を持つている。

他には巣を守る役割のソルジャー・アント。女王の護衛のナイトアント。女王のクイーン・アントが居る。持ち帰る部位は牙。

ふむ、たまに張り切りすぎて遠くまで来てしまって、帰り道が分からなくなつたばぐれアントもいるのか。今回のレッサー・アントはそのはぐれアントか。

「どちらの図鑑ですが、紛失したり破損させたりしますと、弁償とこう」と1000ゴールド頂きますので、お気をつけ下さい」

「わかりました、ちなみにこの本つて買えるんですか?」

「はい、1000ゴールドで販売いたしております」

なるほど、これはいつか買つておきたいな。

「では、『武運をお祈りしてあります』

「よつしや、行くかー!」

畠近くに到着し、依頼主である畠の所有者の家に向かつた。

「すいませーん、ギルドから来ましたー」

扉をノックし声をかける。すると一拍置いて扉の中から人が出てきた。

「あ、すいません。ギルドから来ました」

「おう、とりあえず入れ」

こちらを一瞥し、奥に引っ込んでいく依頼主。何か感じ悪いぞ？  
中に入り、早速状況をきいてみる。

「レッサーラントが出たとのことですが

「ああ、どこからか分からないが、いきなり現れてな。畠の作物が  
荒らされるんだ」

「何時くらいからと、どこから現れるか教えてくれますか？」

「大体」の時間くらいこと夕方の2回で、山のまづから来るんだ

まづまづ、一日一食なんだな。

「じゃあちょっと見回つてきまますね」

「ああ・・・お前みたいな子供で大丈夫なのか?」

ああ、だから感じ悪かったのか。このやうひつ・・・

「ええ、任せてください。それじゃ行って来ます」

「あ、ああ」

依頼主の家を後に問題の畠へいつてみる。

(主様を子供扱いとは・・・ふふ、神罰が必要ですね)

(やうひじやのう、ハつ裂きにしてしまおうか?)

「お前ら落ち着け、実際子供なんだからいわれて当然なんだ」

(しかしのう)

「まあ、これを早めに片付けて力を見せてやるが

(主様がそうおっしゃるなり・・・)

俺の「」と怒つてくれるるのは嬉しいけど、内容が過激すぎるわ!

(よし、九十九。わらわを顕現せよ)

「んー、今回は俺の力だけでやつてみるよ」

(なつー? 危険ですよー)

(わうじゅう、わらわ達に任せとけばよいー)

「それだといやと詰つ時困るだろ?だから俺一人でやるが、敵は弱いみたいだしな」

任せっきりだと、自分ひとりのときに恐怖で固まって動けないってなつたら大変だしな。

それに女に頼るのは男として情けない・・・俺よりも遙かに強いけどさ。

(む、お出ましのようです。主様)

気配を感じたセラが注意を促してくる。

(ええい、ならわらわを使え! 流石に素手だと心配じやー!)

「サンキュ、久しぶりに使わせてもらひよ

がさがさと茂みのなかから、大型犬くらいの赤い蟻が5匹出てきた。こちらを敵と見なしたか、ガチガチと牙をならして威嚇する。

「うわー、如何にもモンスターって感じだな

(ぼやつとするな、近寄つてきておるがー!)

「へいへい、さつくり行きますか！」

無防備に近寄つてきていた先頭のレッサー・アントの頭に、閉じたままの桜華を力いっぱい振り下ろす。

桜華の重みと威力に耐えられなかつたレッサー・アントの頭は、凄まじい音と共に潰れた。

よかつた、牙は残つてゐ！

（わわわ！汚いではないか！）

「そんなこといつてもしょうがないだ、ろつ！」

足に牙を立てようとしていた奴の首を、開いた桜華で切り裂く。その凄まじい切れ味に何の抵抗もなく首が飛んだ。

あつという間に一匹が倒されたことに、警戒し隊列を変えた蟻達。バラバラに近づいてきていたのを、縦に列を作つて足並み揃えてこちら向かつてくる。

「ちつ、ジョットストリー アタックか！」

先頭が足を、一段目が腹を、3段目が首を狙つて飛び掛つてくる。それを見た俺は先頭の頭を蹴つて飛び、一段目を身体をひねつて交わす、そして二段目に向かつて開いた桜華を胴体めがけて振り下ろした。

先頭の蟻は首が変な方向に曲がり絶命。3段目の胴体は真つ一つになつた。

必殺の陣形が破られると思つていなかつたのか、残つた蟻は右往左往している。

その隙を見逃すはずなく、牙に気をつけて桜華で叩き潰す。

そんなこんなで、俺の魔物との初戦闘はさっくりと終わった。

牙を回収し終えて、ふう、と一息ついたときに横腹に痛みが走った。何かと思い見てみると、牙がかすつたのか、浅い切り傷が出来ていた。

「もう、無傷で勝利とは行かなかつたか……いてて」

（九十九、大丈夫か？）

「ああ、浅いから大丈夫だ。でも応急処置はしたいな……依頼主さんに頼むかな」

（主様！私にお任せください）

報告と応急処置をしに依頼主の家に向かおうとしていた所に待つたが入つた。

「任せつて？」

（私の能力で、持ち主は傷を治すことが出来るんです）

「え、そつなの！？・・・つづあ」

（大丈夫ですか！？）

「ああ、とりあえずやり方を教えてくれ」

大声を出したら傷に響いた。いてて。

(柄頭にある宝石を傷口に当てる、治れ~って念じるんです)

「ふむふむ、それで?」

(それだけですー)

「おおいー!簡単すぎるだらう!」

(えへへ)

「何を照れてるかわからんが、こつか・・・治れ!」

すると宝石が淡く光り、傷口がみるみる塞がつた。

「おお、すげえ・・・傷がなくなつた

(ほうー、それは便利じやのう)

「どのくらいここまで治せるんだ?」

(死んでなければどのくらいまでも治せますー治して見せますー)

「や、そつか・・・桜華はなんか能力とかあるのか?」

(わらわか? うーむ・・・この世界に着てから持つた能力だと、持つてただけではほうとやらを無効化できるようになるの)

「は?」

なんだつて・・・?

そんなこと言つたらほほ無敵じやないか・・・

(手放せば効果は消えるがのう)

ああ、なるほど。

つまり桜華やセラを持つてなかつたらアチ強い人間つてことになる  
わけだな・・・

「もうお前らを絶対離さない」

(まあ、主様つたら )

(へ、うむ・・・大事にしてくりやれ?)

依頼を終わらせた俺達はギルドに戻り報酬を受け取つた。  
子供だから出来ないだろうと思つてた依頼主は半信半疑だったが、  
魔物の残骸を見て驚いていた。  
へん、ざまあみろ!

そして時間も丁度いいので、クレアさんが泊まつてゐる甘える子猫

亭に向かつた。

中に入ると、食堂でお茶を飲んでいたクレアさんが「おひがいにまつわせ、手を振つてくる。

「お待たせしましたか？」

「いいえ、簡単なクエストを終わらせてきて一服してただけよ」

「やうでしたか、よかつた」

「お皿は食べた？」

「いえ、まだですよ」

「じゃあこじで食べましょうか、奢るわよ」

ひやつはーー皿代浮いたぜ！

といつ軽い口調は心の中だけでいい、せりんとお礼をこいつ。

「あつがとつざれこますー」

「それじゃ、食べたら早速買い物に行きましょつか」

「はー」

そして談笑しながら皿を済ませ、俺たちは買い物に出発した。

最初に見たときは、所々焼けていたり崩れていたが、村人総出で治したのか、今はそんなところは無くなっている。

団結した人の力に驚き感心しながら、村を散策した。

野宿に必要な保存食や寝袋などの道具は、今買つてもかせばるので出発する日は買おうといふことになつて、とつあえず荷物を入れる袋やバック、旅に耐えられる服などを買つ始める。そして今俺はクレアさんの着せ替え人形のよつになつていて。

「つーん・・・黒い髪に白い服つたらやつぱり黒かしら?」

(主様は元がいいので何でも似合つますよー。)

(わらわの時代とは服装がかけ離れてるのう・・・わらわは助言でわらうもないわ)

「あのー、何でもいいんですけど・・・」

「それはダメよ、何事も形から入らないとー。」

(そうですー!主様にぴったりの服を選ぶまでは出ませんー。)

(どうせわらわは古い女じよよ・・・)

桜華がいじけてるー

(そんなことないさ、桜華には小さい頃からいつも助けてもらつてるし、感謝してもしきれないよ)

(わらうかや・・・?)

(ああ、これからも助けてくれ)

(「つむり、わらわに任せとおけっ）

（むー・・・イチャイチャしないでくださいー・）

セラに怒られました。

気を取り直して、自分でもいいのがないか探してみることにした。

「ふー、こんなものかな？」

「そうね、これだけあれば大丈夫でしょう」

あれからしばらく見て周り、5着ほど選んだ。

黒い動物の皮をなめした、上から被るタイプのローブと黒と白の長袖のシャツ、それと黒いジャケットのような上着。下は丈夫な皮で出来たパンツだ。靴はスニーカーが一番動きやすいので買わなかつた。

それと荷物を入れる袋を合わせてしめて260ゴールド

他には皮の胸当てを、プレゼントだといってクレアさんが買つてくれた。

「さて、買い物はこんなものかしら？」

「うーん、そうですね・・・何処かに古い道具や物を扱ってる所はありますんか?」

「古道具屋のことね、確かに辺りに・・・あった、あそこよ」

そういうて、外にまで壇やら木で出来たタンスなどを置いてある店に入つていつた。

中に入ると、商品が乱雑に置かれていてカウンターには斧メガネを掛けたおじいさんが座つていた。

挨拶をし、商品を見て回つてると、奥が光つたような気がした。

「ん、なんだ・・・?」

(主様、奥から聖なる氣を感じます)

(つむ、セラと回じよじやが・・・少し違うの)

「行ってみるか」

奥に出ると、指輪や腕輪等のアクセサリーが置いてあつた。その中で田を引いたのは金縁に緑色の宝石がついているネックレスだつた。

(主様、そのネックレスから氣を感じます。私達と同じでしうか?)

「んー、それは分からなーいが・・・値段は200ゴールド、やけに安いな」

「ああ、それかね

後ろから声をかけられ振り向くと、店のおじいさんだった。  
びっくりした。

「それは意匠はいいんじゃが、なぜか売れなくてのう・・・お前さん  
が買ってくれないかね」

「そうですね・・・じゃあ買こまーす」

カウンターにもって行き、お金を払う。

「何かいいのあつた?」

「あ、クレアさん。これです」

買ったばかりのネックレスをクレアさんに見せる。

「へえー・・・そんないい物があったのね」

まるで鑑定人のごとく見ていくクレアさんに小声で話す。

「ほりへ、セリナと回りこまーす」

「やうなの?」

「ええ、だから顕現させたいんですけど・・・」

見ていたものを俺に返し、クレアさんは提案してきた。

「……で顕現は出来ないでしょつから……それとも、私の部屋でし  
まじゅう」

「は、はい」

そうして甘える子猫亭に戻った俺達は部屋に入る。  
女性の部屋に入るのって、何かドキドキするよね！

クレアさんは買ったものを端に置き、お茶を用意している。  
あまりじろじろ見ちゃいけないと思い、お茶が来るまで買ったネッ  
クレスを眺めていた。

「おまたせ、早速だけど顕現して見せてくれないかしら？」

「あ、わかりました」

お茶をすすりと一口飲み、目を閉じて集中する。

「顕現せよ」

言葉と共に、ネックレスから緑色の光が溢れた。  
桜華やセリのときとは違つて、あまり眩しくはなかつた。

「はい、おはよつりますです……」

光が引き現れたのは、約30cmくらいの小人だった。

「え、えーと、おはよう」

「はい……はい？」

寝ぼけながら皿を「じ」じ擦つていたが、俺の声を聞き一瞬止まつてこちらを向いた。

サイズは小さいが、緑色の髪と眼をしていて、耳が少し長く尖つている。服は薄緑色のワンピースみたいなのを着ている。小動物みたいでめちゃくちゃ可愛い。

「か、可愛いわね・・・」

（可愛いです・・・）

（癒されるの、）

クレアさん達もわかつてたみたいだ。

「はわわわ、ijiはぢ」ですか？そして何で姿が見えるのですか～？

パタパタと慌てながら聞いてくる。

「このネックレスを古道具屋で買つたんだ」

そうこうで、パタパタしている小人に見せる。

「ああ～、やこの中で寝てたのですよ～？」

「そ、そなのか・・・えっと、君は妖精・・・？」

「ちがいのです～～精霊なのですよ～」

妖精といったことに立腹だったのか、プリプリと怒りながら訂正していく。可愛すぎる。

「寝ていたのに、何でここにいるのですか？」

「あ、ああ、俺が起こしたんだ」

「はわー・・・そりだしたか・・・ぎりぎりやつて？」

「この力を籠めて、顕現せよって」

「はわつ、も、もしかして語り手様なのですか！？」

「う、うん」

「し、失礼しましたのですーー。」

俺が語り手と聞いてさう「パタパタ」と慌て始めた。なにこの可愛さ・

・鼻血が。

「あー・・・と、俺そういうふうなのが手だから普通にしてくれ

でもーとつてくる精霊を説得し、なんとか普通の口調にに戻した。そして今までのことを話始めた。

「はわー・・・語り手様であるシクモさんに見初められるなんて友達に血腫であるのですか」

「見初めて・・・そりこえは、名前は？」

「名前ですか？ありませんですよー」

「え？ ないの？」

セリフとかはあるから、普通はついてる物だと思つたけど・・・。そつまえてると、クレアさんが説明してくれる。

「精霊と呼ばれるものは、基本的に名前がついていないものなのよ」

「やうなの？」

「やうなのですよー」

「だから、持ち主であるシクモ君がつけてあげたらいいわ」

ふむ、名前か・・・ネックレスに寝ていたからー、ネックレス・・・クレス・・・クレスなんてどうだらう？

「クレスってどう？」

(安直だのう)

(安直ですねえ)

「安直だわ」

「つるわいよ！」

ネーミングセンスないんだよ！猫にタマ、犬にボチは基本だらうー。

「わーい、今日からクレスはクレスなのですー」

ほひ、喜んでるじゃん！

「まあ、本人が喜んでるならいいのだけど・・・」

「とりあえず、今日からよろしくな。クレスー！」

「はいですー！よろしくなのですっ！」

クレスは元気に返事をし、俺の頭の上にポテつと乗ってきた。  
その後はクレアさんの部屋で談笑し、夕方頃にバートさん宅へ戻つ  
ていった。

## 第9話（後書き）

クレス可愛いijoクレス、クレアさんと名前似てますが、クレアさんはサブキャラなのでよし…としてこの名前にしました。安直つていな！

そして大分前に書っていた、シエラとマーレルのことですが、レギュラー化にはしない方向で行きます。

なぜかと云ふと、色々とキャラがかぶっちゃうスルハナセー！

では、質問や感想、矛盾や間違えなどがあつたらメッセージをお願いします！

## 第10話（前書き）

どうせー！

祝10話達成で、わいします！でも何もしませんけどねw  
もし何かしてくれといふなら、メッセージをばお願いします（・・・  
）

前回にへりべるど、今回は短めです・・・申し訳ありません（・・・  
・・・）  
いことじりで区切りないと、永遠と書き続けてしまうので切りせて  
頂きました。  
あいかわらすのへりべる小説ですが、『じりさんへだせ』

あの買い物からしづらべのときが経つた。

クレアさんに旅の注意点などを教えてもらいつつ、順調にクエストをこなしていく、そして今日俺はランクEからDに無事昇格した。何度も危ない場面もあつたけどな。

「ランクCまでは3000のポイントとなつてあります。がんばってくださいね」

EからDは500でDからCは3000か・・・大分違うんだなあ。他に何ぞれいくらいるか聞いてみるか。

「すいません、CからBまでのランクアップに必要なポイントって教えてもらいたいことがありますか?」

「かしこまりました。DからCは先ほど言いました通り3000ポイント、CからBは100000ポイント、BからAは500000ポイント、AからSは1000000ポイント、SからCまでは200000ポイントとなつておつます」

ひえー、最高ランクまでかなり掛かるなあ・・・

(主様なら大丈夫ですよー)

(わらわ達が居れば楽勝じゃわ〜)

(そーなのです、クレスもがんばるですよー)

果てしない数に驚いていた俺を落ち込んだと勘違いしたのか、励ましてくれる3人。

(ありがと、頼りにしてるぞ)

(「うむ」)

今のところ金は4500ゴールド溜まっている。

クレアさんはもう旅に出ても大丈夫だと言っているが、目標の5000ゴールドまで貯めようと思つていて。あつて困るわけじゃないからな。

しかし金がかさばるな・・・銀行というのはないのだらうか？

そう思い、ギルドのお姉さんに聞いてみることにした。

「お金預けるといふことがありますか？」

「はい、当ギルドでお預かり致します」

ギルドにこんなことも出来るのか。

「じゃあお願こします」

「かしこまりました、では預けたい額のゴールドとギルドプレスレットをお出しぐださいませ」

4500枚のうち、4000枚を出す。

これで持つているお金は5000ゴールドと大分すつきりした。

それでも十分重たいんだけど、小銭のほうが何かといいだろ？

そして金を預けた俺は、残りの額を稼ぐためにクエストを見始める。

「んー・・どれもぱつとしないな

「あら、何を探してるの？」

「あ、クレアさん」

いいクエストがないか探していると、クエストを受けに来たのか、後ろからクレアさんが話しかけてきた。

「何かいいクエストがないか探してまして」

「ふーん、ランクロ見てるけどランクあがったの？」

「つこわつきになりましたよ」

「おめでとう、でもこれからが長いのよ」

「そうみたいですね」

はははと苦笑しながら答える。ランクCまではまだ良いとして、ランクBからがとても大変だ。

「それで、田標金額までもう少しなのかしら？」

「ええ、あと5000ゴールドで50000ゴールドになるんですよ」

「じゃあこれを一緒に受けない？」

そういうて差し出してきたのは、ランククロの緊急クエストだった。

「えーと・・・緊急・烟に出たソルジャー・アント6匹の討伐100ポイント一人600ゴールド。早急に討伐して欲しいので二人以上のパーティのみ」

「ツクモ君と私で十分だと思うから、一緒にどう?..」

「んー、じゃあお願ひします」

しかし烟つて・・・またあの烟か?

クエストを受け、目的地に来た俺は予想通りの結果に苦笑した。  
またこの烟かよ!

「すみません、ギルドから来ました」

クレアさんがノックし、中から人が出でてくる。  
案の定、このあいだのおっさんだつた。

「来たか・・・ん、お前は」

「どうも、ランク上がつたのでまた来ました。蟻に好かれる畠なんですね」

「や、それだけ栄養のある野菜を作ってるひとなんだよー。」

そんなやり取りをしつつ、依頼のことを聞いてみた。  
今回もまた山のほうからやつてくねりつい。そんな中クレアが難しい顔をしてくる。

「どうかしたんですか?」

「ええ、話を聞く限りだと、レッサーアントも出たのよね?..」

「はい、俺が討伐したんですけど」

「もしかすると、アントの巣が山に出来ててるかもしねーわ

クレアさんがさうこつた瞬間、外から

「アントの群れが出たぞーー!」

と外から叫ぶ声が聞こえてきた。

右から来たレッサー・アントをセラで袈裟懸けに切り裂き、左から来たソルジャー・アントを桜華で叩きつぶす。

そして前からきた奴の顎を蹴つて距離を取る。

「ちくしょー! きりがねえ!」

「やつぱり巣があつた、みたい、ねつ!」

クレアさんも剣を抜き応戦する。しかし数が多くすぎる……

「桜華、セラ、悪いが一緒に戦つてくれ!」

(つむ、わかつた)

(「こんなありん」、一瞬で片付けちゃいましょー!)

その声を聞き、両手に持っていた一人を顕現する。

光が放たれひるむアント達。その隙に顕現した桜華とセラは次々と蹴散らしていく。

徐々に数を減らしていくが、まだ50匹は居るだろう。

武器がなくなつた俺を狙つてくるが、こつちに来てから上がつた身体能力と、クレスの能力で僅かに筋力等が上昇する効果のおかげで、難なく素手で叩き潰す。

「これではきりがないのう……仕方あるまい。皆下がつておれ!」

何を思ったか、桜華は俺達の前に出る。

「桜華、どうした？」

「ふふ、わらわもひつわざひひを試してみよつての」

「往くべ・・・乱れ散る桜を受けてみるがよい！舞い狂え！桜花乱舞！」

「花びらに当たつた瞬間、鋭い刃で切られたみたいに切り裂かれる。それが数えきれないほど襲い掛かるので、花びらが通つた後には砂のようにならさらになつたアント達しか残されていなかつた。」

「ふむ、こんなものじゃのう」

アント達が全滅したのを確認して、パチンと鉄扇を閉じる桜華。空中を舞つていた桜の花びらは音と共に全て消えた。

「ふふ、どうじゃ九十九。すごいであろうー。」

田の前まで歩いてきて、えつへんと胸を張る桜華。正直田のやつ場に困ります。

「あ、ああ。しかしビリヤんの技を見につけたんだ?」

「なにやうひつひに来てから色々と力があがつてのう」

「それは恐りく主様の力のおかげですね」

「そうなのか、でも俺にはあんまり能力プラスされてないけど……  
いえ、なんでもありません」

「これで巣ができることが確定したわね……ギルドに報告に戻りましょう」

「でも、またすぐに沸いてくるじゃないですか……?」

「確かにその確率は高いけど……」

「報告じたる間に畠を荒らされたたら、いの畠のおつねさんが自殺  
しちゃいますよ」

あの感じならやりかねないしな!」

「でも……それならどうするの?」

「桜華とセラがいるから、大丈夫でしょう」

「はい、お任せくださいな」

「つむ、蟻共を蹴散らすなんて雑作もないわ」

「こつらが本気だったら、山と消えそつた氣がするのは言わない

「おひつ・・・

「おひつ・・・それなら巣へ行つてみましょうか」

「了解しました！」

「ひむひー・

「ええ、お任せください・

頼もしい返事だ、俺も何か武器もつたらいいんだけど、持つたら持つたで浮氣だーっていわれそうなんだよな・・・

「行く前に、保険として依頼主にギルドへ連絡してもらいましょう

そんなことを考えてみると、クレアさんが提案してくれる。

しかし、応援が来たとき、桜華達のことを説明するのがめんどくさい上、元もしかすると語り手だとばれてしまはうかも思ない、待ったをかける。

「あー、桜華達のことがばれたら大変だから、俺達だけでもつまんん?」

「ややこじ立てになるのは嫌なんだ！」

「それもおひつね・・・じゃあ見回つとおひつ事にしましょうか

「はい、それじゃあ行きましょう！」

依頼主に見回つとおひつ、俺達は今回の騒ぎの原因であるアントの巣

へ向かつた。

その頃のクレスはといふと・・・

(どーせクレスは役に立たないのですよーだ・・・・)

ネックレスの中でいじけていたのであつた。

## 第10話（後書き）

はい、とこりじとで。次はボス戦です！

クレスは戦う能力がないので、ネックレスの中でお留守番です。しかし、身体能力を上げるという効果があるので、地味に役に立つんですよ？ 本当ですよ？

では、質問や感想などがありましたら、よろしくお願ひします！

## 第1-1話（前書き）

どうもー！

ついにやつてきました、初ボス戦。  
結果はどうなったかはこの後すぐ！（番組風に）  
ではじめ～

アントの巣まで急ぐ俺達4人。

その道中にもアント達がわんさか居たのでそれを倒しながら進む。

「これ、はーギルドで応援よんだほうがーよかったです、つとー。」

「やうねーこんな、にー多いとは思わなかつたわー。」

言葉が途切れ途切れなのは、アント達が襲い掛かってくるためだ。しかし桜華とセラは涼しい顔をしてどんどん倒していく。この化け物め！

「何か失礼なことを考えているかや？」

「ええ、邪まな気配を感じました」

ひこつ！

一人は群がるアント達を蹴散らしながらもひかりジグジーとした目を送つてくる。

「ナンデモナイデスヨー。」

「貴方達、余裕過ぎないかしら・・・」

そんなやり取りをしてくると、巣だらうか、洞窟が見えてきた。

「クレアさん、あの洞窟つて、ああーつひとつじーー・アントの巣ですか？」

「ええ、そうよ。クイーンアントは土の中じゃなくて、山に洞窟を作つてそこを巣にするわ」

「なるほど、それじゃ もつ一がんばりますか！」

アントを蹴り飛ばし、殴り飛ばしながら進んでいく。

巣の前にきたら、10匹のソルジャー・アントとソルジャー・アントより一回り大きく白いアントが居た。

「ガードアントね・・・わしづめ門番といったところかしら」

「あれがガードアントか・・・かなりでかいな」

ここでギルド魔物図鑑で見たアント達の大きさを見てみよう。まずレッサー・アントはランクEで大型犬くらいの赤い蟻、ソルジャー・アントはそれを一回り大きくした青い蟻でランクD、ガードアントはさらに一回り大きくした白い蟻でランクC、クイーンアントはガードアントの一倍はあるらしに黒い蟻で一つ上のランクAだ。以上、九十九の魔物講座でした。

つとふざけてる場合じゃなかつた。

今までバラバラに襲つてきていたアント達が、まるで軍のよつて陣形を敷き待ち構えている。

ガードアントを中心として前列に4匹、左右に3匹ずつのがぢゅうかというと防御主体の陣形だ。蟻のクセに頭いいじゃないか！

「ふつふつふ、それで門を守つてこらつもりか・・・?」

不敵に笑つ俺を警戒して、アント達は一步後退する。

「そんなもので俺を止められるわけがない!・・・では先生方、よろしくお願ひします!」

「まあ・・・わかつておつたがのう」

その言葉に桜華は呆れ

「ふつふつふ、お主も悪よのう!」

セラは若干違つたノリをしていた。

「わらわが周りの雑魚を貰つとじよつ」

「じやああの由こありますね」

まるでスイースを分け合つよつた会話をしながら、一人はすゞい速さでアント達に走りよつた。

警戒していたとはい、あまりの速さに対応できず、前列の4匹はいとも簡単に倒された。

横列にいた6匹はすぐに食い止めよつと殺到するが桜華によつて止められ、セラはその隙にガードアントに襲い掛かる。

ガードアントは向かつてきたセラに対応するために、後ろに立き、牙で剣を受け止めよつとす。

「ふふ、その心意氣や好し・・・だがー。」

剣と牙がぶつかり合ひへ。

「我が剣に断てぬものなし・・・なんぢやつて」

まるで牙など無かつたかのよひに真つ一つになり、ガードアントは絶命する。

一方桜華はどうと

「ほれほれ、はよつひに來ぬか」

近づいてきたソルジャー・アントを殺さないように吹き飛ばし、また近づいてきたやつを吹き飛ばしと遊んでいた。  
どうだったのか！

「桜華さん、終わりましたよ」

「おお、存外早かつたのう」

ガードアントを倒しえ終えたセラは、ソルジャー・アントをじじめていた桜華に声をかける。

「どれ、これで終いじゃー！」

素早くソルジャー・アントに近づき、両手に持った鉄扇で叩き潰し、切り裂く。

6匹いたソルジャー・アントは一瞬でその命を失った。

「ふむ、あつけないのう……」

「そうですね、クイーンアントさんが楽しませてくれた」と期待しましょう

お前らが規格外なんだよ！と思いつながら巣の中へ入つていつた。

「案外広いんだな・・・つと、しかし横穴がありすぎてどこが本線かわからないな！」

巣の中はとても広かつた。縦は4メートルほどで、横は大人4人が両手を広げて歩けるくらいに。

「本線は」の広い道よ。でも、いくらなんでも広すぎるわ・・・」

アントの巣は、クイーンアントの大きさによって変わる。それはクイーンアントが通り抜けられるくらい広くすると、ついでに

これほど巨大というわけだ。  
どこの怪獣だよーと心中で突っ込みつつ、俺達は順調に巣の中を進んでいく。

もちろん敵がないわけではない。

横穴や前方からアント達が襲い掛かってくるのだ。

俺とクレアさんはレッサー・アント、ソルジャー・アントを相手にし、桜華とセラはガード・アントを相手にする。

理由はガード・アントがランクCで、クレアさんはランクDなのと、俺はいくら補正やクレスの効果で身体能力があがつてるとはいえ、素手で一つ上のランクを相手に出来るほど強くはないからだ。

（やつぱり、これ終わったら武器買つたほうがいいな・・・）

（ツクモさん、浮気は良くないのですよーーー）

浮気じゃないわ！

襲い掛かってくる敵を蹴散らしながら進むと、前方からガード・アントの群れがこちらに向かってきた。

後ろには大きな穴が見えていた。そもそも終点か？

こちらに向かってきた10匹は居たであろうガード・アント達を、桜華とセラは難なく屠り、俺達は大穴に入った。

そこに待ち構えていたのは

「ギシヤアアアアアツー！」

大きさは穴の通りで、王冠のような頭殻、巨大な目、何もかも噛み砕いてしまいそうな顎に鋭い一本の牙。

6本ある脚は全て平らに踏み潰してしまった。そこに巨大で、尻尾には長いサーベルのような刃がついている。

ランクAのクイーンアントだが、本来は2～3メートルくらいで、尻尾に刃などはついていない。

亞種と呼ばれるものなのかなわからないが、つまり何が言いたいのかといふと

「ランクB、ね……」

「ははは……俺の163000ポイント上の敵か……」

何か俺、じつに来てから不幸な目にばっかりあってるような気がする。

「桜華、セラ、いけるか?」

「相手にとつて不足なじゅうや」

「久しぶりに楽しめそうな相手ですね」

しかし一人はやる気まんまんのようだったので、俺とクレアさんは後ろを警戒しつつ、大穴の入り口まで下がった。

二人はそれぞれの得物を構え、クイーンアントに攻撃を仕掛ける。それを見たクイーンアントは、煩わしいというように、尻尾を振りかぶり、巨大な刃を一人に向けて横薙ぎに振るう。その攻撃を桜華は飛んでかわし、セラは剣で受け止める。

まるで重たい鉄と鉄がぶつかつたような音が鳴り響いた。

「つぐー！思ひのほか重たい一撃です、ねつ！」

ズザザと衝撃で後ずさつたが、受け止めきつたセラは尻尾を上に弾く。

その隙に桜華は、クイーンアントの頭めがけて鉄扇を振り降ろす！

攻撃を察知していたクイーンアントは、蟻達を木つ端微塵に叩き潰してきた一撃を物ともせず、その巨大な牙で鉄扇を受け止めた。クイーンアントはそのまま頭を振り、攻撃を受け止められ空中で固まっていた桜華を吹き飛ばす。

「つと、やりおるの」

空中でバランスを建て直し、地面に着地する桜華。そこにクイーンアントの巨大な脚が迫つてくる。

「おつと、危ないのう！」

桜華は迫り来る脚の横をすり抜けつつ、開いた鉄扇を叩きつける。しかし、その一撃はクイーンアントの堅殻に弾かれてしまう。クイーンアントの巨体を支えているその脚の甲殻は想像以上に硬いものだった。

セラも隙をみて、比較的柔いはずの間接部を狙つて剣を振るうのだが、やはり弾かれる。

クイーンアントはちまちまと攻撃を当てるべる一人に苛立つてか、尻尾をめちゃくちゃに振り回す。

しかしその攻撃は一人に当たることはなく、その後も一進一退の攻防を続けていた。

「仕方ありませんね

はああッ！」

空気が震えるくらいの気合と共に、セラは美しく輝く剣に神氣を纏わせ、脚に斬りかかった。

「ギシヤアアツー？」

クイーンアントは、自分の甲殻が破られると思つていなかつたのか、易々と切り裂かれた痛みに大きく仰け反つた。

「なるほどの一。」

それを見た桜華も二つの鉄扇に桜色のオーラを籠めて尻尾の刃に叩きつける！

凄まじい衝撃音と共に叩きつけられた右の鉄扇は、クイーンアントの刃半分ほどまで打ち碎いた。

「一回では無理か・・・なりばもつ一つー。」

半分ほどで止まっていた右の鉄扇に重ねるように左の鉄扇で叩く！両方の衝撃で、クイーンアントの刃はまるで大きいガラスが割られたような音と共に碎けた。

「ミシヤアアアー！？」

あまりの痛みに怯みながらも、自分がアント達の女王である証の刃を碎かれ、怒り狂つたクイーンアントは桜華を噛み砕き、食いつきと噛み付いてくる。

しかし

「よそ見しちゃ、いけませんよー。」

「ピシヤアアアツー？」

桜華に集中していた隙を突き、セラが再び脚を斬りつけ、注意を逸らす。

一方が攻撃し注意を向け、もう一方がその隙に攻撃を仕掛けるといつた連携攻撃に、クイーンアントは為す術もなく攻撃を受け続けていた。

「まつたく、しぶといのう」

「ですが、存分に楽しめましたね」

一方的な攻撃を受けていたクイーンアントは、6本あつた脚は3本が切り裂かれ、1本がもう大地を踏み締めることができないほどズタズタになつており、王冠のような頭殻は碎かれ、尻尾の刃は粉々になり、牙も一本失っているという、満身創痍になつていた。

「そろそろ止めと往くかのう・・・桜の中で溺死しき　　舞い狂え！桜花乱舞ツー！！」

「我が振るうは断罪の剣、我が放つは戒めの光、聖なる輝き！ジャッジメントオオ・セイヴァアアアアアツー！」

瞬間、アントの巣は凄まじい光に塗りつぶされていった。

「ふうー、一時はどうなるかと思つたけど、なんとかなつたなあ

「そうね、それもこれも全てツクモ君と守護者の一人のおかげね」

巣から帰つてきた俺達は依頼主に報告にいった。

依頼主はボロボロになつた俺たちを見て驚いていたが、森で残りのアント達を殲滅していたと伝えると、報酬を100ゴールド増やしてくれた。ラツキー

（むーー！クレスもがんばったのですよーーー！）

「ははは、クレスも頑張つたと言つて上げて下せこ・・・プリプリ怒つてますので」

「ふふ、ごめんね。クレスちゃんもご主人様をよく支えてたわね

（えつへん、わかれればいいのですよー）

可愛いいやつめ！

「さて、俺はそろそろ帰ります

「そう、旅は明日出るの？」

「ええ、もうお金も溜まつましたので

今日のクエストで、目標5000ゴールドを達成したのだ。正確には5100ゴールドだけどな。

「寂しくなるわね・・・」

「ははは、また会えますよー。」

「もうね、明日は私も見送りするわ。いつ頃出るの？」

「そうだ、それを考えてなかつたな。」

「んー・・・毎週ですかね？」

「わかつたわ、それじゃまた明日」

「はー、おやすみなさい」

そしてクレアさんと別れ、俺はパートさん宅へと帰つていったの  
だった。

## 第1-1話（後書き）

はい、如何でしたでしょうか？

・・・ですよねー、迫力が足りないですよねー（、・・・）  
私にもっと文才あればいいのですけども、残念ながらあまりありません。

これからももっと精進いたします^\_^

そして皆様にアンケートというか、聞きたいんですが。  
男キャラって出したほうがいいと思います？

設定資料には一応一人作ってあるんですが、もし「居るー」っていう方が多いならならそのまま出しますし、「女の子に決まってるだろ馬鹿者め！」って方が多ければ修正しますけど、どっちにしましょ？

では感想などなどお待ちしておりますマース！

## 第1-2話（前書き）

どうもー！

なななんと、この小説が累計500000アクセス、ユニーク5000人突破しました！

まさかこんなに行くとは思っていなかつたので、緊張しております！

皆様の期待を裏切らないように精進していきますので、叱咤激励をお願いしますー！

フレッセント村を出て3日が経つた。

今はフレッセント村から東へ行った所にあるカミールといふ町に向かっている。

カミール町。

ザザーランド王国の東にある比較的大きな町で、フレッセント村から4日程いったところにある。

人口は約15000人ほどで、フレッセント村と王都ザナログリフとの山の間にある盆地に作られていて、山の恵みを特産物にしている。ここで取れる山菜はとても美味しいと評判らしいので少し樂しみだ。

しかし山に囲まれていることもあってか、魔物の被害が絶えないらしく、その為の冒険者も多いので治安に若干の不安があるようだ。

ちなみにフレッセント村の規模は、人口800人ほどの小さな村で、遺跡があること以外は普通の村らしい。

旅をすることに決めたのは、俺をここに連れてきた鏡が「この世界を救つてください」と言ったことが気になつたからだ。

しかしそうやって世界を救うのか分からぬ今、とりあえず情報を集めるために、東にあるザザーランド王国の王都ザナログリフに向かうこととしたのだ。

このザザーランド王国は信仰心の篤い国で有名らしく、語り手に関する情報も豊富にあるのではないかとバートさんに相談したときに言つていた。

それにも関わらずフレッセント村を旅立つときは大変だった。

シホラちゃんとミレルちゃんが着いていきたいと駄々をこねたからだ。俺やパートさん夫婦が何を言つても聞かなかつたのだが、クレアさんが旅をする」との大変さを2割増しで伝えて、なんとか事なきを得た。

・・・シホラちゃんの殺氣があれば魔物が近づいて来ないかもと考えたのは秘密だぞ！

「ふー、旅をするつてこつのは大変なんだな」

（セウジヤのう。わらわ達が居た世界とはかけ離れてるからのう）

（私も寝ていただけなので、旅のことは全くわかりませんでした。）

（クレスもなのです～）

前の世界のような道路などはなく、街道といつても王国まで続く道

の草や木などを取り除き、土を均しただけの道だ。

道路を歩きなれた俺としては、結構辛い。

「しかし、湧き水がこんなに美味しいとは思わなかつたな」

今居る場所は、カミール町に続く道の途中を少し外れたところにある川いる。水筒の水がなくなつたのと、身体や髪を洗いたかつたからだ。

もちろん裸になつてゼビーン…つていうわけではなく、布を濡らして身体を拭いたり、シャンプーみたいな洗剤をつけて髪をじやぶじやぶ洗うだけなんだけな。裸になることを桜華達に期待されていたが・・・

「もう大分日も暮れてきたし、今日はここで夜を明かすか

旅をした中でわかつたことがある。

それは夜の森を歩き回ることの危険性だ。

初日は疲れてなかつたこともあって、夜になつても町を目標として歩いていた。

しかし大体の魔物は夜行性らしく、襲撃が恐ろしく増えたのだ。まじで怖かった。

でもお陰で動物系の魔物を殺すことに違和感が無くなつたのは良かつたと思う。

その襲撃の教訓を生かして、次の日からは夜にはちゃんと休むようにしている。

夜番一人と火を起こせばあまり近づいてこないしな。

「さてさてお前ら、食料調達の時間だ」

身に着けていた桜華達を顕現させる。

だいぶ慣れてきたので、手に持つて集中しなくとも顕現できるようになつたんだ。まあ、魔物のゲリラ的襲撃のおかげで覚えたんだけどな・・・

「じゃあ、俺とセラで上流に魚釣りに行くから、桜華とクレスは果物とか取ってくれ」

「むう、わらわは九十九と一緒にいい

「桜華さんは昨日一緒にいたではないですか、ここは私に譲つていただきます！」

「うう、仕方ないのう・・・往くぞ、クレス」

「はいなのですーーー、ツクモさん、セラさん、お気をつけてなのです  
」

分担を決めた俺達は早速森に入していく。

なんか桜華、こっちに来てからやけに素直に甘えてくるようになつたな・・・向こうに居たときなんて、典型的なツンデレだったのに。

そんなことを考えていると、上流の開けた場所が見えてきた。

「今日は何匹釣れるかなーっと」

「ふふ、たくさん釣れるといいですね」

俺は道具屋で買った高かった釣りセッティングをつまきしづら出す。向こうではあまりにも釣れなくてつまらなかつたが、こっちではまさに入れ食いといつていいほど釣れるのだ。水が綺麗だからか？

これからのこと想像して空を見上げながら鼻歌混じりに上流に向かう。

すると騒がしい音がして、何だと思い前を見ると

少女がでかいイノシシのような魔物と追いかけっこしていた。

「たーすーけーでーー！」

「ちらりに氣づいた少女は、一目散に向かってぐる。もちろん後ろのイノシシも向かってぐる。

「ちよおおおおー！？」

思わず釣竿を放り投げ、少女を受け止め横に避ける。そのとき「バキッ」という音が聞こえた。

イノシシが通りぬけた跡を恐る恐る見ると、そこにはM-Y釣竿が無残にも碎け散っていた。

「つ、釣竿おおおおおおおおー！」

その時、俺の中の何かがブチンと切れた音がした。

「フフ・・・フフフ・・・貴様・・・生かしては還さぬ」

抱えていた少女をポイとセラに投げ渡し、村で買ったバグナウを両手に構える。

バートさんやクレアさんに、自分の武器がないとあまりにも危険だと言わされたので買ったものだ。

「シャアアアアアアアツーー！」

某全身火傷の剣客のような奇声を上げながら、未だ方向転換をしているイノシシに突っ込む。

その無防備な横腹にバグナウを思いきり突きたてる。突然の衝撃に踏鞴を踏むイノシシ。だが俺のターンは終了してないぜ！

「オラオラオラオラオラオラアアアアアツ！…」

連打連打連打！

イノシシはものすごい攻撃に悲鳴を上げながらビンビン後ろへ押されしていく。

「ムダムダムダムダムダムダアアアアアツ！…」

必死に抵抗しようとするイノシシにそんな隙を『『えず、ひたすら拳を連打する。身体中に返り血を浴びたが、そんなものは気にしない！

肉を食い破り、骨を碎き、牙をへし折る。

もはや立つ事も限界なのか、イノシシはふらふらし始めた。

そのチャンスを逃すはずもなく、イノシシに容赦なく攻撃を仕掛け る。

「これは俺の分！…」

顎に向けて右フックを放ち

「これは少女の分！…」

今度は左フック

「そしてこれはああああ、釣竿の分だああああああ……」

最後の一撃とばかりに額に向けて渾身の右ストレートを放つ。

「キヤと骨が碎ける凄まじい音がして、イノシシは頭を上げることなく大地に沈んだ。

「ああ・・・俺の、俺の愛しい釣竿よ・・・」

イノシシを「ATUGAI」したあと、俺はフカフカと釣竿に歩み寄つた。

「なんとこう姿になつてしまつたんだ・・・くそお・・・くそおおお  
おつ！」

イノシシの返り血で真つ赤に染まつたままだが、愛していた釣竿の残骸を胸に抱き、空に向けて魂の慟哭をあげる。

「あ、あの～・・・？」

「ああん！？」

「ひいツ！？すこませんでしたーーー！」

あまりの悲しみに咽び泣いていた俺に、少女が声をかけてきた。しかし、愛しいMY釣竿を失った俺は気が立つていて思わず喧嘩腰になってしまった。

「主様、この子が怖がってますよ」

そんな様子の俺に若干引きながらセラがいつ。

「ああ、『めん・・・あまりにショックな出来事に気が動転していたんだ』

「ひ、ひえ・・・全然大丈夫でしゅつ！」

あまり大丈夫に見えないが、本人がそういうので気にしないことにした。

「俺はツクモ・ヨシハラ、こつちはセラフィムだ。んで、どうしてあのクソ野郎に追いかけられてたんだ？」

少女は、ありつたけの感情を籠めたクソ野郎にびくつになつたが、すぐに気を取り直して、おずおずと答えた。

「あ、あたしはアイナ・キャンベルです・・・あの、ギルドのクトで・・・失敗してしまつて・・・」

「ほっ？」

「ひいい！？」

「主様！」

また怖がつてしまつた。普通に返事をしただけなんだが・・・なんで？

「まあ、それで？」

「こ、逃げ回つてたら、貴方達が見えて・・・それで・・・」

「助けを求めたと？」

「は、はい！」

なるほどな、確かによく見ると少女の腰には短剣が刺さつていた。背丈は頭の天辺が俺の胸の辺りで、ブラウンのショートカットだ。同じく茶色のくりくりとした瞳が不安そうに見上げてくる。

「そ、うか、まあ今日はまつ遅いからな・・・セラ、この子を連れて戻つてくれ」

「主様は・・・？」

「俺はここのまだ胸の中に残る狂おしいほどの怒りを静めてから戻る

「わ、わかりました・・・行きましょ、アイナちゃん」

「は、はい・・・

来た道を引き返していくセラとアイナを見送った俺は、ゆっくりと森の中を歩く。

次の獲物を探すために・・・

その日の森は夜遅くまで、魔物の断末魔が止むことはなかった。

## 第1-2話（後書き）

九十九君が壊れました。

今宵限りですけど、殺意の波動に目覚めてしまいました！

なぜここまで怒ったかといいますと、ゲームなんていうのはなく、田中や休憩のときの暇つぶしは釣りしかなかったのです。そして前の世界ではあまり釣れなく、待ち時間も長かったのでありますやらなかつたのですが、こっちの世界では入れ食い状態だったのです、釣りの楽しさに目覚めてしまったからというわけです！

普通に釣れると楽しいんですよ？

やつとことない人は、一度体験してみるといかもしれませんw

では、感想などなどお待ちしております！

## 第1-3話（前書き）

どうせー！

最近パソコンの調子が悪いみたいで・・・もしかすると壊れるかも  
です（、；、；）  
もし急に更新が止まつたら、パソコンが「臨終になつたと思つてく  
ださると助かります・・・

では気を取り直して、1-3話をどうせー！

俺達はイノシシを倒した上流近くで、魔物と戦っている。

「っしゃあ！」

後ろから飛び掛ってきたサーベルウルフを回し蹴りで吹き飛ばす。凄い勢いで吹っ飛んでいったサーベルウルフは、近くにあった木にぶつかり事切れた。

「はっ！」

少し離れた場所では、ainaがセラに見守られながら2匹のワンハンドクラブを相手していた。素早い動きでクラブ達を翻弄しながら少しづつダメージを与えていく。

「aina、身体を持ち生きている物は、総じて間接が弱点です。そこを狙いましょう」

「はーっ！ やあっ！」

セラのアドバイスを受け、素早く後ろに回りこみ、クラブの脚を狙う。

振るわれた短剣は理想的な起動を描き、狙い通り脚を間接ごと切断する。

「たああっ！」

脚を切断されバランスを崩したクラブの刃を狙い、止めの一撃を深々と打ち込んだ。

その調子でもう一匹のクラブを倒し、アイナは一息つく。

なぜこんなことになつているかと云ふと、昨日の夜まで遡らなければならぬ

八つ当たりという名の食料調達を終えた俺は途中で汚れや血を落とし、別れた川まで戻つた。

「ただいまーっと、魚じゃなくて肉を持ってきた

「主様、おかえりなさいませ」

「お、おかえりなさいー。」

戻つた俺を待ち構えていたのは、微笑むセラとカチコチに固まつたアイナという少女だつた。

そういえば、セラと一緒に戻らせたつける・・・

「おお、戻ってきたか」

「おかげりなのです～」

桜華達も戻つていて、川で果物や山菜を洗つていたようだ。  
今日は野菜スープでも作ろうつかね。

「んじや、飯にするか。アイナだつけ？お前も食べるだろ？」

「ひやい！ いただきまふ！」

カミカミだな！

なぜそんなに緊張しているがわからないが、とりあえず今は料理を  
しよう。

「うし、んじや料理するか

小さめのナイフを取り出し、野菜を切る。

セラは肉の解体をし、桜華は果物の皮をむき、クレスは俺の頭の上  
で足をパタパタさせていた。働け！

「あ、あのーあたしは何をすればいいんでしょうか？」

「ん？んー・・・じゃあ申し訳ないけど、やこの川でこの鍋に水を  
汲んできてくれ」

その好意をありがたく受け取り、アイナに鍋を渡す。

「わ、わかりましたっ！」

相変わらずカチコチと鍋を受け取ったアイナは、カチコチと川へ向  
かっていった。

面白い動きだなと考へながら、後ろで肉の解体を終えたセラに声をかける。

「なあセラ、ずっとあの感じなのか？」

「いえ、主様が帰つてくるまでは談笑しておりましたよ？」

「ふむ、やつぱり俺が原因なのか・・・なぜだ？」

「それは主様が修羅の如くイノシシを倒したからだと思つますよ」

「そつ苦笑しながらセラは言つ。修羅つてなんだよ。

「ふむ、どうしたものかね。短い間といつても町まであと一町へり  
いあるしなあ・・・」

「師匠！水を汲んできました！」

「おひ、ありがと・・・師匠？」

「師匠つてなんだ？」

「あああーし、失礼しました！」

「え、えーと..」

突然のことに俺は困惑つ。

「あ、あのひ・・・あたしの、あたしの師匠になつてくださいつー..」

そんな俺に、ものすごい勢いでおじぎをしながら言つてくる。  
しかし、水の入った鍋を持ったままなのでバシャアと水をこぼしてしまった。

「あわわっーす、すいません！」

「い、いや、とつあえず落ち着いて

「ま、また汲んできますー！」

ピューッとまた水を汲みに行つてしまつた。  
なんだかそそつかしいな。

「ふふ、初々しくて可愛いではないか

「つーむ、しかしなあ。まあ飯のときでも詳しく述べてみるか

一通り準備を俺達は、アイナが水を汲んでくるまで待つこととした。

グツグツと煮えるスープを啜る。  
うん、んまい！（テー レッ テレーー！）

「味はどうだ？」

「美味しいのうー、 セスガは九十九だ」

「セスガです、 主様」

「皆さんは食べれていのでしー・・・」

桜華達には概ね好評のようだ。そしてクレスは精靈だから食べれないらしい。

フーフーと冷ましながら食べているアイナにも聞いてみる。

「アイナ、 味はどうだ？」

「はい！美味しいです、 師匠！」

「ふむ、 その師匠の理由を聞いていいか？」

「あ、 はい」

アイナは器を膝の上に置き、 話し始めた。

「ふむ、 孤児院の為に冒険者になつたのか

アイナは、 町の孤児院出身で、 その孤児院の子達を養うために15歳になつた半年前から、 比較的稼ぎやすい冒険者をしているらしい。しかし、 戦い方があまりわからない事もあって、 弱い魔物にも苦戦してしまつて未だにランクE。

そして、 上流に居るランクEのワンハンドクラブを倒しに来た所、 ランクCであるビッグホーンボアが水を飲んでるところに遭遇し、

追いかけられていたところを俺があつと、いう間に倒したので戦い方を教えて欲しい！ということみたいだ。

「そうなんです……でもあたし弱くて……だから、お願ひします！あたしの師匠になつてください！」

土下座までしそうな勢いで、お願ひしてくるアイナ。うーん、困ったな……

「でも使う武器はアイナは短剣だろ？俺は格闘だからなあ

「そんな……」

ダメかもしれない感じた、アイナは俯いてしまう。

「それでは私が教えましょうか？」

「え？」

セラの提案を聞き、アイナは顔を上がる。

「そ、うか、セラが教えてあげればいいんだな」

「え、でも……？」

こちらを向き大丈夫なのかと、田で語つてくれる。そんなアイナに苦笑しつつ答える。

「大丈夫だ、セラは俺の100倍は強いぞ」

「ええつーー？」

「それに剣を使つからな、短剣のこともわかるだろ？」

「はい、剣の扱いなじみ。ただ、一番得意なのはこの剣のみですね  
どね」

セラはそういうながら、自分の剣をほんぱんと呂く。

「もうこうわけだ、だからセラに教えてもらつてこよ

「わかりました、セラさん、よろしくお願ひしますわー」

「はー、よろしくお願いしますわー」

そんなこんなで師匠の話は終わった。

「むー、わらわ達はひとつあればいいのじや?」

「なのですよーー。」

そうだ、桜華達のことをすっかり忘れていたー

しかしやのことを言えば更にいじけてしまつことが手に取るよつて  
わかるので、慌てて取り繕つ。

「桜華達は俺を見ていてくれないか?」

「ツー? いきなりそんなことを言わると恥ずかしいないか・

・」

「はーー、渴れちゃうのです～」

「ナニこいつ意味じゃなくってねーっ」

「ほり、セラが睨んでるじゃないか！」

「まだ戦い方に不安があるから見ててほしいんだよ」

「なんじや、やつこいつとかや」

「残念そつて言つ桜華。なにを期待してたんだ！」

そして雑談しながらスープを食べ終わり、後片付けをして、俺達は寝ることにした。

ちなみに今日の夜番はセラになつた。

そして夜が明け、冒頭に戻る。

戦闘が終わり、町へ出発し、じょりくの時間が経つた。

「ふー、町まで後どれくらいだ？」

「後少しで着きますよ、師匠」

実際に教えるのはセラなのが、未だ師匠と呼んでくれるアーナ。なぜだ・・・

「なあ、その師匠といつのはやめないか?」

「いえ!教えてくれるのはセラさんでも、師匠は師匠です!」

どんな理屈だ!

「まあまあ、いいじゃないですか」

「やつだぞ、師弟関係といつのも悪くながりつ

うーむ・・・そんなんでいいのか?と考えていると、アイナが涙目になりながら言つてくれる。

「でも、どうしても止めてくれといつならやめます・・・

「だーー歸つて呼んでいから泣きそつた顔するなー!」

その重圧に耐え切れなかつた俺は、了承してしまつ。するとアイナは花が咲いたような笑顔になり、お礼を言つてくれる。

「あつがとうござります!」

「いや、えーと・・・もつこです・・・

女つて怖いね!

「師匠、見えてきましたよー！」

「お、そうか。じゃあもう一頑張りますか、ね！」

ガサガサと藪を搔き分けて、ロングネイルモンキーが襲い掛かつてきた。

それを気配で察知していた俺は、その長い爪をかわし、顔面に拳を叩きつける。

その一撃で、ロングネイルモンキーは飛び掛ってきた藪の中に吹っ飛んでいき、ドスンという衝撃音が聞こえてきた。

「さすが師匠です！」

「ははは・・・」

実はヤラから田配せがあつたなんていえない・・・！

その後は特に襲撃もなく、無事にカミール町に着いたのだった。

## 第1-3話（後書き）

はい、とにかくで、可愛い弟子が増えました。

といっても、この町だけのサブキャラですけどね。w  
話の展開が遅くて申し訳ないです。・・・ノロノロと進んで行きます  
が、これからも頑張りますので応援をよろしくお願ひします。w

感想などなど、お待ちしておつまーす！

## 第1-4話（前書き）

どうもー！

この小説のお気に入り人数が100人を超えた！  
登録してくださった方、ありがとうございますっ　ｗ  
こんな駄文を応援してくれているなんて、感謝のしようもございま  
せんっ　＞＜  
精一杯がんばっていきますので、これからも応援のほど、よろしく  
お願いします！

では、第1-4話、はじまりはじまりー！

カミール町に着いた俺達は、まず最初にアイナの道案内で宿屋に向かつた。

案内された宿は市場に程近い3階建てで、個室と大部屋があるらしい。あまり汚れてなかつたので、最近建てられたばかりなのだろう。幸い大部屋が開いていたので、そこを借りることにした。1泊100ゴーランドだったので、とりあえず3日分予約する。

従業員に案内された部屋は3階で、ベッドが3つに大きなテーブルが真ん中に置かれ、座椅子らしきものが4つほど置いてある。窓からは町並みがよく見えた。近くにある市場は中々賑わっているようだ。

荷物を置き、これからのこと話を話し合つ。

「とりあえずはアイナのクエスト完了報告をするとして、その後はどうする?」

「そりじゃのう、わらわ達は九十九について行けばいいだけなんじやが・・・」

桜華はそつ言いながら、ちらりとアイナを見る。

なるほど、そういうことか。

(セラ、アイナに俺が語り手だということを教えても大丈夫か?)

(邪まな気は感じませんから、大丈夫だと思いますけど・・・)

(思ひますナビ~.)

(「ナビ」とですかから、ぱりと零してしまつかもしませんね)

この短期間にセツのアイナへの印象は決まったみたいだ。つまり  
ジッ娘と。

(「じゃあ秘密にしておいたほうがいいな。監も気をつけてくれ

アイナには少し申し訳ないが、ここにで騒ぎにならへりになら黙つて  
たほうがいいだろ。

ちなみにクレスのことばは「この物だと教えてくる。信じてくれる  
かわからなかつたが、素直な子なのですんなりと信じてくれた。高  
い壇とか買わされそうで不安だな・・・

「じゃあ、とりあえず俺とアイナだけでギルドにこいつてみるよ」

「あら、なぜですか?」

「んー、ちょっとな。後で市場に連れて行つてやるから待つてく  
れ」

「ふむ、そういうのなら待つとしようかの

納得してくれたみたいだ。

なぜ連れて行きたくないかといつと、バートさんがギルドには荒く  
れ者が多いと言つていたことがあつたからだ。  
もちろん桜華達がそんなやつらに遅れをとるはずもないし、そいつ  
らがどんな目に遭うか簡単に想像できる。

まあ、要は乱闘騒ぎで目立たたくないつていうのと、絡んでくると

思われる輩と必要以上に関わりたくないってことだ。

「よし、それじゃあaina、案内してくれ」

「はい、師匠！」

そうして、ainaに案内されながらカミール町のギルドへと向かつた。

「なるほど、バートさんが言つたこともわかるわけだ・・・」

案内され、ギルドの中に入ると、昼間だといつのに酒臭かつた。そして俺を值踏みする視線と共に、隣にいるainaにもいやらしい視線を送るものがたくさんいた。

この口利きン共めー

ainaには女性の受付のところに行かせて、俺はギルドの中を見渡す。フレックセント村のギルドとあまり大差はないらしく、ランク別のクエストボードとかはあちらと同じだ。あるとすれば、ギルド中でいる人の数だらつ。

酒場には酒を飲んでるものや、馬鹿騒ぎしているもの等が多い。

そして女性にはいやらしげに視線を送るところへ、セリが居たら纏めて神罰といつなの駆除をしそうだ。・・・・・つれてこなくて良かった！

「師匠、どうしたんですか？」

「あー、なんか騒がしいなと思つてな」

報告が終わったアイナがキョロキョロと見渡してこの俺に向う聞いてくる。

「……はこつもそんな感じですよ、魔物から守つてくれるのは嬉しいんですけど、あまり長く居たくはありません」

それに何かいやらしい視線も感じますし・・・・・少し怒つたように言つアイナ。

おこ、ロツロン共、視線がばれてるだ。

「まあ、行くか」

「そうですね」

そう言って出で立つとする俺達の前に、ハゲ散かした大男が立ちはだかった。

「おつおつ、待ちな。おめえ、見たところ新顔だな？」

「うわー、このテンポ的な展開、絶対来ると思ったよ・・・・。

「やうだけど、何かようか？」

げんなりしながら答える。

「へへ、先輩に対して何かしら挨拶つてのがあるんじゃねえのか?」

「うだうだーー!と周囲から声が聞こえてくる。

「何が言いたいんだ?」

「金だよ金、少し置いてけや。そこの嬢ちゃんでもいいけどな!」

ガハハハと下品に笑う男に、アイナは脅えて俺の後ろに隠れる。ちよつと嬉しいのは秘密だ。

「はつ、誰がてめえなんかに金を払うかよ。アイナはもつての他だ、失せろ!」

「あんだと? 俺を誰だと思つてる。ランクのゾンゲ様だ!」

明らかに雑魚っぽいんだが・・・

「ゾンゲだかロンゲだか知らねえが、邪魔だからそこを退け!」

「てめえ、言わせておけば!」

別に挑発したつもりは無かつたが、殴りかかってくる大男。でかい身体の割りに意外と早いパンチを打つてくる。さすがにランクって事だけはあるみたいだ。だが

「な、なにい！？」

俺はその一撃を易々と受け止めていた。

「なんだ、ランクCでこんなもんかよ

「て、てめえ！放せ！」

掴まれている拳を離さうと必死に引っ張るハゲ。

そんなハゲを無視して、受付のお姉さんに声をかける。

「なあ、どれくらいだつたらやつてもいいんだ？」

その質問を理解したのか、受付のお姉さんは、ほんの少しに笑いながら答える。

「殺さなければ、如何様にも」

「りょーかい

その声を聞いた俺は、掴んでいた手に徐々に力を籠める。途端に、ハゲの拳がミシミシと音を上げ始めた。

「いで、いだだだ！ちくしょう、放しやがれッ！」

痛みに耐え切れなくなつたハゲは、空いてる手でまた殴りかかってくる。

「無駄だよ

「うわあああー。」

「うひみひ、拳を受け止め、力を籠め始める。  
そして

「ぐわやああー。」

バキッと、両手の拳の骨が割れる音がして、男が叫び声をあげる。

「うわせえな、黙つて寝てるー。」

軽く飛び、ハゲの延髄にハイキックを打つ。

「ヒュウ」と空気が抜けるような声と共に吹き飛ばされたハゲは、  
壁にぶち当たり、動かなくなつた。

それを見ていたギルド内に居た者たちはシーンと静まりかえる。

「おひ、アイナ行くぞ」

「は、はーーー。」

それらを無視して、俺とアイナは宿に戻つた。

宿に戻り、町へ買い物だ！…といつときこぶと『アーヴィ。

「なあ、お前らってその鎧とかしかないのか？」

桜華達はいつも同じ服や鎧を着ているのだ。

もちろん臭いとかそういうのではない。それは武器に戻り、また顕現すると何故か汚れなどは落ちてているからだ。しかし、女の子と買い物に行くのに、相手が戦闘服姿だと何かもつたいない気がする…といつことでもダメ元で聞いてみたわけだ。

「わらわはこのままじゃのう」

まあ、桜華は着物だしな。

「私は普通の服もありますよ？」

「おお、そつなのか！」

「せつかくの買い物なんだし、堅苦しこのはやめよいせー！」

どんな服を見せてくれるのか、ワクワクしながら言ひ。

あれ？でもいつ買ったんだ？そつ思つてこると、セラは目を閉じた。

「では失礼して…・・・武装解除！」

そういうと、セラの周りに光が集まつた。

そして光が消えると普段着姿のセラが現れた。

上は仕立てのいい、フリルの着いた白いカットソー。下は黒い膝丈

のタックススカートを着ている。

靴は花の「カージュ」をあしらつた赤いパンプスのようなものを履いている。

一言で表すと、貴族のお嬢さんつて感じの服装で、セラことともよく似合っている。

「ふふ、主様、どうですか？」

「あ、ああ、よく似合つてゐよ」

その場でぐるりと回り、スカートの端を摘みながら聞いてくるセラにドキッしながら答える。

「...」

(むうー・・・なのです)

桜華とクレスから感じる視線を無視して、町に出かけることにした。

色んなところを見て周り、もう夜になろうとする時間になつた。

そして俺達は、古道具屋に来ていた。ちなみにアイナはもう孤児院に帰つていった。

ここに来る途中には、色々なことがあった。

セラはナンパされたり、桜華は迷子になつたり、クレスはネックレスから飛び出してきそうになつたり、未然に防いだがスリにあつたりと大変だった・・・

セラなんて、強引に連れて行こうとする奴を笑顔で殴り飛ばしてたからな。あれは超怖かった。

そんなこんなで店を見て回つたが、めぼしいものが無かつた。しかし、こんな大きな町にクレスみたいなのが無いのはおかしいと思、俺は店主に聞いてみることにした。

「店主、この町には何と言つか、いわく付きみたいのとか、宝とかつてないのか?」

「なんだあんた、そういうのが望みか・・・それなら北側にあるスマムに行つてみな、闇市が開かれてると思つよ」

「闇市・・・そんなものがあるのか」

まあ、盗賊とかいるくらいだからあっても当然か。

「ただ、無事で帰つてこれるかどうかは知らないよ」

「ふむ、合法ではないのか?」

「当たり前だ、いつも憲兵が追つかけまわしてるけど、なかなか潰れないのさ・・・ワシら商人にとつては邪魔者以外のなんでもない

ほーほー、なるほどなるほど。

「なら、潰してしまっても構わないんだな?」

俺はそうこうと、一トヤリと笑った。

## 第1-4話（後書き）

ところへいとで、怪しい終わり方にしてみましたw

次は何と、仲間が増えますよ！

誰が増えるかはお楽しみとこいとでw

では感想などなど、お待ちしております！

## 第1-5話（前書き）

どうせー！

パソコンがやばいです、フリーズやらいきなり画面が真っ暗になるやうと、危険信号放ちまくらです。誰か助けて！

そんなことがありつつも、何とか1-5話を書きました。

今回は一度やつてみたかった闇市！ファンタジーっていうたらこれは外せませんよね！

とことことで、第1-5話、はじまりはじまりー

「なんか、如何にもって感じだな」

古道具屋を後にした俺達は、その足で北側にある闇市に来ていた。セラはその間に完全武装になつている。

「そうですね、いたる所から邪な氣を感じます」

「それに何人かわらわ達の後をつけてきてあるしの」

まあ、綺麗処が一人も居ればなあ。  
でも天地がひつくり返るうが、絶対に桜華達が攫われることはない  
けどな。

「さて・・・道具屋のおっちゃんは貴重なお宝はオークションで売  
買されるとか言つてたな」

「ふむ、ではそこに向かうとするかの」

「ああ、でもその前に・・・クレス、お前の仲間はここにいるか?」

なんでも、近くに精靈が居れば気配を感じ取れるらしいので、ネックレスの中に入ってるクレスに聞いてみた。

（うーん、ここには居ないみたいなのです。こここの雰囲気は精靈には毒なのですよ~）

「そうなのか、ってクレスは大丈夫なのか?」

(はい、ツクモさんが居るので平氣なのですっー)

よかつた・・・まあ、元氣じゃないクレスなんて想像できないけどな。

ま、気を取り直して

「オークションに行こうぜー！」

「この宝石はただの宝石ではございません！なんと風の魔法を封じ込めてあり、風よと念じるだけで・・・ほら、この通り魔法が使えるのですー！」

緑色の宝石を持った司会が、丸太に向かって宝石をかざした。すると、宝石が薄く発光し、そこから風の刃が飛んで行き、丸太を真つ二つにした。

「ほー、そんな便利な物があるのか

「ふふ、でもあの魔力量では、あと5回くらい撃つたら効果は切れてしまいますがけどね」

わーお、あまり使い勝手は良くないんだな。

しかしそれを知らない商人らしき人達は、無限に魔法が擊てると思つたのか、拳つて値段を上げ始めた。

「一万ゴールドが出ました！ほかにはありませんか？？？では風の宝玉は一万ゴールドで卸させてもらいます！」

ふーむ、俺達の仲間は居ないのかねえ。

「では、次で最後とわせて貰います。最後の品はこちりです！」

豪奢な布に包まつた2本の何か、あれはたぶん剣かな？司会は、もつたいぶりながらその布を取り払つた。

布の中から現れたのは、美しく輝く紅と蒼の一振りの剣が夕暮れに煌いていた。

その姿は激しく燃える炎と静かに流れる波のようだつた。紅い剣は刃渡り50cm程、そして切れ味を鋭くするためか、軽く反り返つていた。柄頭には真つ赤な宝石がはめ込まれてゐる。対して蒼い剣は、波を連想させるような曲線を描き、その刀身は分厚い。恐らく防御主体なのだろうか。紅い剣と同じく、柄頭には真つ青な宝石がはめ込まれてゐる。

「主様・・・」

「うん、わかつてゐる。あれはお前たちと同じだな

なぜかと言わると、そう感じたとしか答えられないが、あれは間違ひなくセラ達と同じだ。

さて、どうやつて助け出すかね・・・

「このひらの双剣はかの有名なサーヴァンド王國の英雄、『要塞』の二つ名を持つギルフォードが使っていたとされています！」

その名を聞くと辺りに居た人達がざわめき始めた。なんだ？

「彼の死後、この剣は遺族が保管していたのですが、私どもの手の者が長い用日を掛けて、ようやく盗み出した一品です！」

「ほー、それならばこいつちが盗み返しても文句はないわけだ……もつとも盗むじやなくて強奪の間違いだけだな。」

「ではこの品は5万ゴールドから始めませて頂きますー。」

その声を皮切りに、周りからは次々と買い手の声が響く。そんな中、俺は双剣に声を掛けてみることにした。

（おーい、そこの双剣おきてるか？）

（ツー？ な、なに？ 誰よー？）

（だ、誰ですか！？）

お、通じた通じた。つてなんだ、双子か？

（んーと、これ言つてわかるか？？？ 神の語り手つて奴だ）

（（え、ええつー？））

さすが双子、リアクションが同じだな。

（まあそれで、お前ら盗まれたんだって？）

（え、ええ……ギルが死んでから、使い手が居なくて眠つてたんだけど……）

（僕達が異変に気づいて起きたら、もう少しじるに連れてこられて……）

（なるほどなー）

まあ、セラにしてもクレスにしても寝てたしなー……使われないと暇なんだな。

（まあ、それで单刀直入に聞くけど、助けてほしいか？）

（べ、別にあんたなんかの力を借りなくとも……）

（姉さん！……語り手様、申し訳ありませんが、助けていただけませんか？）

弟のほうが素直だな。

まあ、何にしてもやることは一つだ。

「よし、成功した。桜華は俺と一緒に、セラは予定通り頼む」

「わかつたぞ、彼奴らがどんな顔をするのか楽しみじゃのう

「ふふ、そうですね。では主様、『武運を』

俺達は額を合って、オークションを見つめる。

「50万！50万、ゴーランドが出ました！ほかに、いかがこませんか！」

「60万、ゴーランド！」

俺は手を上げ、そういった。

それを聞いた司会は興奮したように煽り立てる。

「60万、ゴーランド！ほかには、ほかにはいかがこませんか！？」

「50、65万！」

50万を出した商人が焦ったように値段をあげてくる。

それを見た俺はニヤリと笑い

「80万！」

そう言い放った。

値段を聞いた商人は、苦々しく「どちらをにらみ付けると、これ以上の値段は無理なのが諦めたように俯いた。

「80万！80万より上はいかがこませんか！？？？無いようなので、こちらの品は80万、ゴーランドで卸させていただきます！」

さて、それでは行きますかね。

「それでは壇上に上がりください！」

金貨80枚を持ってきていたと思わせるために、一袋を懷に入れる

ようには持ち壇上に上がる。

実際は銅貨 80 枚だけだ。

「では、お金をこひらこ・たるこ・

「悪いけど・・・代金は拳つてことにしといてくれや!」

言葉と共に、司会の男のでっぷりと太った腹に思い切り拳を叩き込む。

まさか攻撃をしてくるとは思っていなかつた司会は、その一撃で地面を転がりながら吹っ飛んでいく。

あの腹のせいか、ぽよんぽよん跳ねてたぞ・・・!

それを見た護衛らしき棍棒を構えたマッチョな一人組みが取り押さえようとこちらに向かつてくる。

「桜華、一人頼んだ!」

「おうよー!」

こちらに来た一人の横薙ぎの一撃を屈んで避ける。

そしてがら空きの膝に、水平蹴りを入れて膝かつくんの要領でバランスを崩す。

「つらあー!」

バランスを崩し、膝をついたマッチョの顎に膝蹴りをかまし、意識を刈り取る。

「『ヒュブツ!』?」

吸い込まれるようにして決まった一撃に、マッシュは面白い声をあげて、仰向けに倒れた。

桜華のほうを見てみると、あつという間に護衛を倒していく、増援の相手を楽しそうにしていた。

「うと、じつしてる場合じゃなかつたな」

増援は桜華に任せて、俺は双剣を手に取つた。

「セラ、合図だ！」

会場で様子を見守っていたセラは、その声を受けて剣を抜き放ち、神氣を籠める。

セラの周りは驚き、蜘蛛の子を散らしたように逃げていった。

「はッ！」

十分すぎるほどの神氣を籠めたセラは、空に向かって神氣を開放する。

莫大な光が雲を貫かんと、天に向かって伸びていった。

「おっしゃあ！派手にいくぜーー！」

俺は持っていた双剣をバグナウを刺していた特殊ベルトに刺し、混乱している護衛に踊りかかった。

天に向かつて伸びる光をみたアイナは、集結していた憲兵に伝える。

「師匠からの合図がきました！」

アイナの言葉を聞いた、髭の素敵な憲兵長は部下に号令を放つ。

「者共オ！我々を長きに渡つて捜査といつ鎌に縛つてきた闇ギルドを一斉摘発する時が来た！」

そこで一団言葉を区切り、息を大きく吸い込み、叫んだ！

「行くぞ、者共！命を惜しむな！名を惜しめ！突撃イイイイツ！…

「オオオオオオオツ」「」

憲兵長の元、憲兵の中から選ばれた精銳30名がスラムに向けて突撃した。

それを見ていたアイナは、乾いた笑いを浮かべ、そんなに大げさにしなくとも…と思つていた。

憲兵達が突入し、闇市は一気に騒然となつた。  
そしてしばらくの時間が経ち、闇市の首謀者達や、裏で加担していた大商人達を取り押さえ、カミール町の闇市は事実上潰えたことになる。

「ツクモ殿、我々への協力、心より感謝致しますぞ」

「いやいや、結果的にこつしたほうがいいと思つただけです」

闇ギルドを潰した立役者として、俺は憲兵長から感謝の言葉を送られていた。

なんでもこの闇ギルドは、盗品の売買だけではなく、人身売買や暗殺等といった後ろ暗いことまでしていたという。潰して良かった。

「では我々はこれにて失礼致します！」

そう言って、捕まえた首謀者達を連れてゾロゾロと帰つていった。  
長年苦しめてきたと言つてただけあって、憲兵達は皆晴れやかな顔をしていた。

「さて、それじゃ後はお前らを家に帰すだけだな」

（本当にありがとうござります、語り手様）

（ふん、特別に感謝してあげるわー）

「あー、はいはー。んで、家はどこにあるんだ？」

せつぜん向きながらそつまつてぐる紅いほつの剣を無視して聞く。  
失礼ねーって言つていたが聞こえない振りをしておく。だつて、  
せいし・・・

(僕達の使い手だった人の家は、王都ザナロクリフにありますけど・  
・・)

「ふむ、そのザナロクリフには一度行くつもりだったんだ」

(本当にですか!?)

「ああ、つこでだから届けてやるよ」

(あつがとうござますー)

ねつねつ、ここつてーじとむー

(わ、私は別に届けてほしいなんて・・・)

(姉ちゃん、ちゃんとお礼言つてー)

(う、うう・・・あ、あつがと・・・それでーいんじょー)

「せこせこ、シントレジンナドー」

(シントレジンによー)

文句をこつこつと紅いほつを無視して、蒼いほつと声を掛けた。

「そういえば、お前らの名前ってなんだ？」

（僕の名前はアレスです。姉さんは ）

（アグーよ）

「ふむ、アグーとアレスだな」

俺はうんうんと頷いて、桜華達を呼ぶ。

「おーい、次の目的地が決まったぞー！」

それを聞いた二人はとことことこちらに向かってきた。

「次はどこにいくのかや？」

「ザナログリフにこいつらを返していいんだ」

それを聞いたセラは驚いたよつて叫び。

「返してしまうのですか？」

「ああ、主人の家に返したほうがいいだろ。な、一人とも…」

（あの、僕達はこのまま語り手様の旅についていきたいです！）

これは予想外の返事だな。

「俺は構わないけど、アグーはいいのか？」

（あ、あたしは・・・あんたがどうしてもって言つなら、ついてあげてもいいわ！）

「典型的だなー・・・まあ、一人がいいならそれでいいか。これからよろしくな、二人とも」

（はいー！）

（ふんつー！）

こうして、俺達の次の目的地が決まり、一人の新たな仲間が増えたのだった・・・

「主様に何で口の聞き方・・・神罰が必要ですね・・・フフフ」

（ひいッ！？）

## 第15話（後書き）

とこりましたー！

男がほしいという声が大きかったので、今日はアドバイスを頑きました！  
した双剣を出してみました！

H○nさんのイメージ通りかわかりませんけど、私にはこれが精一杯でしたw

では、感想などなど、お待ちしております！

## 第1-6話（前書き）

どうせー！

パソコンの不調な理由がわかりましたっ、これで一安心です♪

そして、矛盾を教えてくれた方がいますので、その方の指摘通りに修正していきたいと思っています。

ほかにもいっぱいあると思うので、もし見つけたら、ちゃんとかけや「ノーヤローー」と言つてくれますと嬉しいです！

では、第1-6話、はじまつはじまつー！

新たな仲間を加えた俺達は、すぐには出発せず、アイナの修行を手伝っていた。  
それに宿も3日分で予約してるし、なにより金を稼がないとダメだしな！

「やあっ！」

「今のはいい攻撃です、その感じを忘れずにもう一回やっつめてください」

「はいっ！ たあーっ！」

セラの付きっきりの修行のおかげで、アイナは無事ランクロにあがつていた。  
今はランクロのサーベルウルフの群れを討伐に来ている。

「初めの頃と動きがちがうなあ、っと」

(ちゅうとツクモ！ 真面目にやうなさいよー)

「はいはい、悪かったね！」

死角から飛び掛ってきたサーベルウルフを横に避けると同時に、アグニで斬り付ける。

凄まじい切れ味でサーベルウルフは胴体から真っ二つになってしまった。

「ほーれ、犬つじや。どうしたどうした」

桜華には群れのボスを抑えてもうっているのだが、持ち前のサドが発動して遊び倒している。

クレスは危険が無いために木の上で日光浴・・・自由すぎだらうー！

（ツクモ兄さん、来ます！）

「あいよつと！」

仲間をやられた怒りで突っ込んできたサーベルウルフを、アレスで防ぎ、弾く。

やはり想像した通り、アグニが攻撃、アレスが防御という双剣みたいだな。

「ここちに来たのはこいつで最後だつたみたいだな」

俺に向かってきた奴はあらかた片付けたので、アイナのほうを確認してみる。

3匹に囲まれているものの、一歩も退かずに奮闘している。

危ないところはセラが影からけん制しているので、大丈夫みたいだ。

「はつー！」

囲みが一瞬崩れた瞬間を逃さず、目の前の一匹の首を狙い、真っ直ぐに切りかかる。

「やけに素直な攻撃だな・・・止められるぞ？」

やはり、戦闘慣れしていたサーベルウルフは、首を引いて自慢の長い牙で攻撃を受け止める。

そして、受け止めた短剣を弾き、反撃としたが

「かかった！」

隠し持っていた、もう一本の短剣で、サー・ベルウルフの首を深々と貫く。

なるほど、初撃は陽動だったのか！

その攻撃を見て、飛び掛ろうとしていた後の一匹は警戒を強めた。そして今度は一匹が連動して攻撃をしかける。

「わ、わわっ！？」

一匹の「ンビネーション」に翻弄されながらも、攻撃はしつかりと避けていく。

なかなか攻撃の当たらないことに焦れた一匹が飛び出し、爪で攻撃していく。

「つ！」

上段からのひつかき攻撃を片手で受け止める、若干押し込まれバランスを崩しながらも、もう一方でサー・ベルウルフの腹を切り裂く。そして裂かれた腹から大量の血を噴出しながら、絶命していった。

一息つく暇も与えないとばかりに、残ったサー・ベルウルフは横から飛び掛ってきた。

バランスが崩れていたアイナはそれに対応できぬでいた。

もらつた、と思っていたサー・ベルウルフは横からの光に飲まれ、何が起きたかもわからないまま消滅していった。

「最後の詰めが甘かつたですね、アイナ」

「はい、すいません・・・」

剣を鞘に収め、アイナに声をかけるセラ。

俺がなぜ安心してみていたかといふと、セラが居たからだ。他力本願じやないぞ！

「まだボスが残ってるけど、アイナにはまだ無理そうだな」

「うう・・・すいません」

落ち込んでるアイナの頭をぽんぽんと叩き、桜華に声を掛ける。

「桜華ー、そいつは俺がやるよー」

「うむ、わかった」

殺氣を群れのボスに向ける。

このまま桜華と戦つっていても勝てないとわかつっていた群れのボスは、桜華に警戒しながらも、標的をこちらに変えた。

桜華が攻撃してこないとわかると、俺に突撃をしかけてくる。

「それじゃ、行きますかね！」

相手の牙による初撃を、アレスで受け止め流す。

流したときの隙を見逃さず、アグニで足を狙い、切りかかる。

しかし、群れのボスは身体を捻り攻撃をかわし、着地と同時に今度

は爪による攻撃をしかけてきた。

縦横斜めといった縦横無尽の攻撃を、かわし、受け止め、受け流す。

そのボスとの攻防の最中に、俺は一人に声をかけていた。

（なあ、お前らってなにか能力あるのか？）

（僕達の能力は、僕達のような双剣の使い方がわかるようになると  
いう能力です）

（はあー、だからお前らを普通以上に使えるわけだ）

（やうよ、だから感謝しなさいよ！）

（ワー、アグニサンアリガトウゴザイマスー）

（なんで棒読みなのよー！）

つと、そんなことしてゐる場合じゃなかつた。

「グルオオツ！」

「これで決めよーぜエエー！」

「ガオオオツ！」

爪と剣がぶつかり合つた反動で、互いに距離をとる。  
両者とも姿勢を低くし、いつでも飛び出せるように構えた。

弾丸のように飛び出し、突撃する。

俺とサーベルウルフの間に双剣と爪と牙が入り乱れ、ぶつかり合つ。

「おーあああッ！」

「グルオオオッ！？」

牙を弾かれた時の一瞬の隙を見逃さず、俺は一気に攻勢に出た。紅と蒼の斬線が目にも留まらぬ速さで切り裂き、叩きつけ、突き刺し、断ち切る。

「これで止めだあああッ！」

アグニとアレスを交差させ、振りぬく

「ガツ！？」

サーベルウルフの首が宙を舞い、あたり一面に血の花が咲き誇つた。

アイナはこの光景に見とれていた。そして同時に心に誓つた。

「私も、いつかあの高みに」

と…。

戦いを終えた俺達は川で汚れを落としてから町に戻り、ギルドに報告をしにいった。

ギルドに入ったときに騒がしかつたのが一気に静まり返つたけど、なんだだ？

報告が終わつた後、アイナがお別れパーティーをしようとしたと聞い出しお宿に帰る途中に買い物をして、俺達の大部屋でジュースとおつまみと「さやかなパーティー」が始まつた。

この世界には未成年というものはなく、いつでも酒を飲んでよかつたのだが、アイナは飲んだことないし俺は飲むつもりはなかつた。しかし、買出しの中で桜華がこつそりと買つていて、俺達が気づかぬ間に飲み物に混入させたという事件があつた。

そして酒を飲んだ皆はどうなつたかといつと・・・

「でひゅからねー、私はこーと思つわけれすよーあるつわま、聞いてひゅか！？」

「あー、はい。聞いてます・・・」

「じじょーーいがないでぐだざこーつー」

「「「めんね？ もう決まつたことだからね？」

「んふふふ、九十九・・・もつとかこひよれ・・・んふふ」

「いやいや桜華さん、なんで脱ぎだすんですかね？」

「アハハハハハ…世界が回つてしまひゅ のれすー…」

「クレスさん、人の頭をぱしづし叩かないでくれませんか?」

「でつひゅからー…聞いれまひゅかー…?」

「あ、はい。それはとても高尚な考え方で…」

「じじょーーー!」

「だからもう決まって…」

「んふふ…つくもお」

「服をきて…」

「アハハハハ!」

「頭を叩く…いいかげんにしらやあああああああー…!」

(た、大変ね…)

(がくぶる)

「さて、俺達はもう行くな

「はい・・・

夜が明けて、俺達は予定通りに町を出発することになった。  
あの後なにがあったかは、想像にお任せします

「まあ、そんなに落ち込むなって。お前は十分強くなったんだ

「・・・

アイナは何かを言おうとしたが、風が大きく吹いてよく聞こえなか  
つた。

「じめん、なんだって?」

「・・・えっと、旅の無事をお祈りしておきますねっていったんで  
す。」

「そうか、ありがとな!」

「はいっ!」

なんだ、やっぱリアイナはいい子だな!

「それじゃ、また機会があつたらよるから。またな!」

「はい、また会いましょう! そのときは師匠もびっくりするくらい、強くなつてますからね!」

「ははは、期待してるよ

俺達はアイナに手を振りながら、王都ザナロクリフに続く街道を歩き始めた。

「今度会つたら、本当にびっくりさせちゃうんだから・・・」

後にアイナは双剣を使い始め、ランクSまで上り詰めた。そしてギルフォードの再来と謡われ、『双剣姫』といつも名前までついた英雄になつたのはまた別の話である。

## 第1-6話（後書き）

はい、そういうわけで1-6話をお送りしました！

アイナはサブキャラなので、旅にはついてきませんw  
後々出すつもりですけどねw

では、感想などなど、お待ちしております！

## 第17話（前書き）

どうもー！

やりましたっ、10万アクセス、見てくれた人が1万人を超えましたっ！

嬉しいです、本当に嬉しいです！

まさかこんなに行くとは思いませんでしたw

これを励みに、更に精進して行きたいと思つております！

アイナの見送りを受け、ザザーランド王国の王都に向かい始めた。カミール町から王都ザナログリフまで街道を4日ばかり歩くと着くらしい。

「馬車か何かあれば、まつと早くこくるんだナゾなあ」

「ふむ、こうして歩くのも中々悪くないと思つぞ」

ぼやきながら歩く俺に、右に並んでいた桜華は木々を眺めながら言う。

でも科学の力に慣れてるから、歩くのって結構、だるいんだよね・・・

「桜華さんの言つとおりです、こうして外を自分の足で歩いて、主様と一緒に旅をできることは私達にとって、とても幸せなんですよ

」

俺と桜華の一步後ろを鼻歌を歌いながら歩いていたセラも乗つてくれる。

「うーむ、うーうー、わかれると悲い氣はしないなつ

「ツクモさんは単純なのですね~」

「なんだとー?俺の頭から降りるか?」

俺がそう言つと、「いやなのです~」と頭の上で口をぱつこをじていたクレスがしがみ付く。

痛いから髪を引っ張るな！

（随分と仲がいいのね・・・）

「なんだ、仲間に入りたいのか？」

（な、何でそうなるのよー？）

「何かついでましまつな声だったからな

（そんなことないわよー）

（姉さん・・・すいません、姉さんは素直じやなくて。本当は仲間に入れてほしいんですよ）

ほー、やつぱりか。シンデレだもんな！

（アレス！なんで言つのよー！？）

つて自分でばらじてるしー

そうこえーば、ここつらも顕現させてみないとな

「お前、顕現してみるか？」

（はー、お願いしますー）

（わ、私は別に）

「わーいらぐべー、顕現ー！」

もはや当たり前となつて いる光が俺を包み込む。  
そして光が引いていくと、二人の姿

「ブゴフツー？」

「人の話をきけえええ！」

ではなく、光の速さで飛んできた拳だつた。

「い、 いてえ・・・」

「だ、 大丈夫ですか！？ 姉さん、 謝つて！」

「こいつが人の話を聞かないから悪いのよ！」

なんだその理屈は！

そつ叫ぼうと、 アグニのほうを向くと・・・

「フフフ・・・ 主様を殴り飛ばすとは

「 いい度胸じやのう？」

「匹の鬼がいた。

「ひいっ！？す、すみませんでした！」

「私達ではなく、主様に謝りなさい！」

おお・・・一人からではないはずの角と牙が見える・・・  
二人にしかられたアグニは、俺に寄ってきて少し涙目になつながら  
謝つてきた。

「「」めんなさい・・・」

「うん、可愛いから許す」

「なつ！？」

あ、うつかり言葉に出してしまつた。

「い、いいいきなりそんなこと言われても困るつていうかそりや  
あ嬉しいけどもつとムードを考えてほしつていうかそのあの

」

「わー、暴走したけど、大丈夫なのか？」

「え、ええと・・・初めてのことなので僕もわかりません」

アレスは困つたように苦笑する。

ここで一人の姿をよく見てみる。

アグニは肩までのオレンジの髪をサイドテールにしていて、眼は少

しオレンジ掛かった赤で、性格を現すように少し釣りあがっている。身長は俺の肩くらいで、顔は可愛いといつよりか、綺麗といったほうがいいだろう。つまり美少女。

服はオレンジの太ももまでのチュニックに黒いスパッツを履いていて、靴は動きやすさ重視の短めのブーツ。その上に炎の模様が入った紅い胴鎧、ガントレット、レギンスを装着している。

腰の鞘には、自分と同じ色の双剣が刺さっている。

対してアレスはスカイブルーのショートヘアで、眼は少し垂れ目で、色は水を思わせるような青色。

身長はアグニとあまり変わらなく、160あればいい方と言つたところだ。お姉さまに好かれそうな感じの美少年だな。服は白いロングシャツに青いジャケットを着ていて、下は黒いジーンズのような物。靴はアグニと同じ短めのブーツを履いている。姉と同じく、服の上に波の模様が入った蒼い胴鎧、ガントレット、レギンスを装着して、腰には蒼い双剣が刺さっている。

じろじろ見ていたのがばれたのか、アグニは真っ赤な顔をしてキッと睨み付けてくる。

怖い怖い。

「で、顕現してみた感じはどうだ?」

「自然を自分の手で感じれるなんてすごいです!」

「そう、ね・・・悪くないわ」

まったく逆のこといつてるぞ、この双子。

「それじゃ、旅の続きをどこでしますかね！」

そうして俺達は、田標の王都への道を歩き始めた。  
王都までは後4日、これから何があるのか少し楽しみだ。

王都ザナログリフより遙か西へ行つた所に、ある薄暗い洞窟があつた。

しかし洞窟は、普通の洞窟ではない。  
この世界を創つたとされる神と真逆の存在である、破壊神を奉つて  
いた遺跡だった。

遺跡周辺の村々で、昔から冒険者達の間で語り継がれる、この遺跡  
の噂があった。

暗い遺跡の奥深くに、一振りの赤い、血のよう赤い剣がある。  
この剣を持つと、絶大なる力を手に入れることができる。  
しかし、この剣は人を選ぶ。

もし自分を持つに相応しくない者が手をかけると、たちまち全身の  
血を吸い尽くして殺してしまう。

と、いう噂だ。

そして、その噂を確かめようと、ある冒険者達が遺跡に入つていつた。

「薄気味悪いところだな」

リーダーらしき男が言った。

「まつたくだ、本当にあるのかねえ・・・」「ここに

ヒゲの生えた小柄な男が言った。

「ここの周辺の村々にいる冒険者達に聞いたんだ、間違いないだろう」

見上げないと顔が見れないほど大きな男が言った。

「で、でも止められたわよね・・・絶対に行くなつて・・・」

神官のような服を着た女が言った・・・。

彼らは、冒険者の間ではそこそこ有名なパーティでメンバー全員はA、本来は力ミール町周辺でクエストをこなして来た。

しかし、この噂を聞きつけて、自分達こそはと思いやつてきたのだ。

冒険者達は、順調に奥へ奥へと進んでいった。

小柄な男が罠を察知し、迫りくる魔物はリーダーと大男が息の合つた連携で蹴散らし、行軍の疲れや傷は女が癒す。

まさにバランスの取れたパーティと言えるだろう。

そして彼らは、最深部にある、剣の元へたどり着いた。

「なんて美しい剣だ・・・」

「これは想像もできないくらいなお宝だぜ・・・」

「これを、これをお手に・・・」

「綺麗・・・」

そこにあつた剣が放つ妖しい美しさに、4人は魅了され、フラフラと近づいていった。

（ダメっ！来ちゃダメだよっ！）

剣は叫ぶ、しかし4人には聞こえない。

手を伸ばし一歩一歩フラフラと近づく、まるでB級ホラーのゾンビのようだ。

（お願い！来ないで！ダメェェェェェェ！）

いくら叫んでも、聞こえることはない。  
そして冒険者達が剣に触れた瞬間

周囲は赤く、ただ赤く染まつた

4人の人間だつたものが崩れ落ちる。

その一拍後、闇の中から黒い悪魔の羽を持つた者が現れた。その者は、崩れた物を見て、心底愉快だという様に囁く。

「フフ、フフフフ……やはり、人間が悶え苦しむ姿は素晴らしいな……」

（……なんで……なんでこんなことするの……？）

「なんで……？」

剣のほうを向き、嬉しそうに、最高だと言わんばかりに大声で囁き始める。

「フフ、フハハハハハハハッ！？なんで？なんでとな！ハハハハッ！」

ピタッ笑い声を止め、聞くものを恐怖の底へ落としそうな声が響く。

「それが、私にとっての、魔族にとっての最高の娛樂であり、力の源なのだよ！」

そして再び囁く。

「今度はどんなやつが来るか、楽しみに待っているしよつ……フハハハッ」

魔族と名乗った者は囁いながら、闇の中へ消えていった。

（誰か・・・誰か、助けて・・・）

自分が浴びた真っ赤な血が、まるで涙のように流れていった・・・。

## 第17話（後書き）

はい、フラグが発生しましたよー！

このフラグを回収するのも少し後になると感じますけど、  
そしてボス的な物も出てきました！

わざわざ、これからどうなるとか楽しみにしてくださいなー！

では感想などなど、お待ちしております！

ひーー何とか間に合いましたー！

・・・・間に合いましたよね？

「いやあーははは、こんな美しいお嬢さん達と一緒に旅をしているなんて羨ましいなあ」

カミール町から王都ザナログリフに向かうこと、4日が経った。このペースで歩くと、今の時間からすると、予定では今日の昼過ぎには着くはずだ。

隣で愉快そうに笑っている人は、行商人をしている青年だ。名前はハックというらしい。  
なぜ一緒に歩いているかというと、さつき魔物に襲われているところを助けたからだ。

「それにしても危ういところだったよー、ツクモ君達が居なかつたら、俺はきっと魔物の腹の中にいただろうねえ。はははは」

元からこうなのか、魔物に襲われてハイになつてゐるのか、桜華達をみて興奮しているのかわからないが、なんかやたらとテンション高いな、この人。

「え、えーと、護衛の冒険者は雇わなかつたんですか？」  
「それがね、聞いてくれよ！」

「ずずい、と身を乗り出して言つ。  
顔近いって！」

「ランクロの冒険者を雇つたんだけどさー、突然魔物の数に驚いて、

依頼主である俺を置いて逃げたんだ！」

「・・・えー」

なんじやそりや。

確かに命あつての物種なのはわかるけど、依頼主くらう守れよ！

「最近冒険者の質が落ちてきているのと、魔物がどうにも活性化してゐみたいなんだよ」

「ふむ、魔物の活性化って具体的には？」

「本来は出でこない場所に出てきたりだとか、普段は人をあんまり襲わない魔物が人を襲うようになつたとか・・・極めつけは数自体がどんどん増えてるらしいんだ」

ふーむ、鏡が言つてた世界の危機つてこれが関係してゐのか？

「でもまあ、世の中がどうであろうと、俺達商人は結局物を売るだけなんだけどな！ハハハ」

「なんと逞しい・・・他に何か知つてることつてあります？例えば噂ですか」

俺が聞くと、ハックさんはあごに手を添えて「うーむ」と考え始めた。

「そりいえば、なんだか語り手が現れた一つで大陸全土で噂になつてるみたいだな」

それを聞いた俺達はビシッと固まつた。

なんでだ・・・俺が語り手つてことはばらさないよつてしてるし、パートさん達が噂を広めるような人じゃないはず・・・

「ま、まあ、語り手様が・・・それは本当ですか？」

いち早く硬直から立ち直つたセラが、作り笑い全開でハックさんに聞く。

セラみたいな美人に話しかけられて嬉しいのか、ハックさんは若干だらしない笑みを浮かべて答える。

「ああ、なんでも隣の大蘆の聖アルサルム教国の神官達がどんどんこっちに向かつてきてるらしいんだ。向こうのことは良く知らないんだが、なんか神氣を感じ取れる装置みたいなのがあって、それを感じ取つたとかなんとか・・・」

うーん、これはまずいな・・・パートさんに聞いた所だと、狂信者の集団らしいし。

とりあえず、俺が語り手ということは確実に信頼できる人にしか教えないようにしよう。

俺が念話で桜華達に伝えると、みんなから了承をもらつた。しかしクレス辺りがポロッと口に出しそうだな・・・王都に居る間はネックレスで寝ててもらおうかね。

(いーやーなーのーでーすー!)

(でもなあ、つていうかそもそも精靈が気軽に人前に出しちゃダメだろ(つー)

וְעַתָּה — ! )

かわい・・・じやなくて、ここは心を鬼にしなければ!・

— ! )

鬼に  
・  
・  
・

（わ  
わが二  
た。宿の部屋なら出ていいから  
な！）

(む) それと遊んでください……

(ね  
わか  
たよ  
・  
・  
・  
)

わーい、ヒクレスはネックレスの中で喜ぶ。  
決して可愛さに負けたんじゃない、可哀想と思つたからだ。うん。

・・・お前ら、ジト田でみるんじゃねえ！

その後、桜華達にジト目で見られながら、俺とハックさんは他愛もない会話をしながら王都を目指した。

「いやあー、助かつたよー！」

「いえいえ、じゃあ俺達は宿を取るんで」

「うん、俺はしばりくじで商売をするから、何かあつたら気軽に訪ねてくれ！」

王都についた俺達は、市場の前でハックさんと別れた。ちなみに王都の中へは、門番に軽いボディチェックされただけで入れた。それで大丈夫なのか？

それにしてもさすが王都というだけのことはあって、人の数が半端じゃない。

カミール町でもすゞいと思つたが、ここはレベルが違うな。

どこを見ても人々、何かのお祭りですか？って聞きたいくらいに人であふれてる。

まあ、前の世界の住んでたところは、片田舎でのどかだつたからなあ・・・

「ま、とりあえず宿を取るか」

「はーい、それにしても歩くつて意外と疲れるのね」

「もー、姉さんだらしないよ？」

首をぐるぐる回しながら言つアグーに、アレスは苦笑する。それを見た俺は、何か引っかかるものを感じた。

「はて、何かを忘れてるような・・・？」

立ち止まつ、考へてゐる俺に気がついた桜華が不思議そうに声をかけてくる。

「九十九、どうかしたのかや？」

「うーん、何かひつかかるんだよなー・・・」

「ふむ、まあ宿に行つてからゆつゝ考えればよからう」

「それもやうだなー、んじゃ行きますかー！」

後で思い出すだらうと思い、俺は考へるのをやめ、先に行つてゐるやう達を追いかけた。

「んー！久しぶりのベッドですねー！」

「そりだなあ、野宿は地面に寝袋だつたからなあ」

夕食を終えた俺とアレスは、ベッドの上でくつろいでいる。

女性陣はと言うと、隣の部屋でくつろいでると思う。さすがに人数が増えてきたので大部屋でも収容できず、男と女で部屋わけしたのだ。桜華達は案の定駄々を捏ねたが黙殺した。

「あー、ふかふかだー・・・」

「ふかふかですねー・・・・つと、剣を外さないとですね」

アレスは俺のよろこびベッドに寝そべらうとして、腰に挿している双剣に気づき、近くにあったテーブルに置いた。

その置かれた双剣を見て、俺は忘れていたことを思い出した。

「ひまぐらー？」

いきなり大声を上げた俺に、アレスは悲鳴を上げながらビクッとした。

「可愛い・・・じゃなくて！ 肝心なこと忘れてた！！」

「なんですか・・・・？」

「アレスとアグーの里帰りだよ！」

「あ  
・  
・  
・  
」

王都に来て、一番最初にしようつと思つていた里帰りのことをすつかり忘れていた俺達であつた。

## 第1-8話（後書き）

ちょっと不完全燃焼で申し訳ありません……

最近話の構成がうまくできなくて……フラグ回収はもう少しあとになる予定になってるけど、早めようかな（・・・）

では感想などなど、お待ちしております！

## 第1-9話（前書き）

“えつせー！

ほちほちがんばってこまよー！

そして前書きで書くことがなくなつてきただよつな・・・！

では第1-9話はじまりはじまりー

## 第19話

「諸君らに集まつてもらつたのは他でもない・・・」

夜も更け、辺りが静まる頃、ある宿屋の一室に重々しく響く声。声を発した人物は、テーブルに両肘を着け、顔の前で手を組んでいる 別名、碇ゲン ウスタイル

「主様、一体どうしたんですか?」

「我々は重大なことを忘れていた」

「重大なこと?」

「さうなのだよ、アグニ隊員」

組んでいた手を外して、眼鏡をクイッとあげる動作をしながらビシツとアグニを指差す。  
もちろん眼鏡はかけていない。

「阿呆なことしておらんで、わざわざと説明せんか」

「アデッ!」

桜華に頭を軽く叩かれた。

「それで重大なことってなんなのですか?」?

「ああ、実は・・・」

「　「　「　「　実は？」　」　」

「アグニとアレスの里帰りを忘れていた！」

俺達一行はアグニとアレスの元所持者の家へ向かっている。  
え？あの後何があつたつて？・・・記憶が、ないんだ・・・思い出  
そうとする身体が震え・・ふる・・・がくがくぶるぶる。

「これ九十九、早く往くぞ」

「はつ、俺は一体・・・」

まあ、そんなこんなで双子の家に向かっているわけである。

（やこの道を右よ）

「へいへい」

ちなみに、顕現してると誰かわからないと思うので、一人には元の姿に戻つてもらつていい。

しかし、流石王都というだけのことはあって、とても広い。

簡単に説明をすると、このザナログリフには王都としての象徴であるザザーランド城と、唯一の神であるアルフェルを信仰しているために、聖アルフェル教会ザザーランド支部がある。

王都の人口規模は約30万人程。

立地は、城含めて崖の上に立つており、城の後ろは深い谷で、飛行魔法を使わないと登れないようになつていてるらしい。もちろん対策として、対魔法結界が張つてある。

城の正面はなだらかな傾斜で、街の区画が、崖全体を囲う城壁によつて分かれている。

わかり易く説明すると、城 城壁 貴族街 教会 城壁 平民街 市場 城壁・門という風になつていてる。

そしてこのザナログリフは難攻不落の城塞都市として有名らしい。城の色は白で白亜城と言つても過言じやない。

んで今は、貴族街に来ています。周りの家はでかいのばっかりだわ。  
しかも若干趣味が悪い。

そう思いながら、石畳でしつかりと舗装された道をテクテク歩く。  
(この道を抜けたら・・・ありました、あの赤い屋根の家です!)

「意外と小さいんだな」

周りの家と比べたら・・・といつか、普通の家のサイズなのだ。  
なんというか、他の家に比べたら貧相つていうか・・・造りは頑丈  
それだけも。

(ギルフォードがあんまり豪華なの好きじやなかつたのよ)

「そりなんか、まあ俺もいざ家を作るってなつたら、あんまり、『ゴテ』したのは作りたくないけどな」

さつきなんて金ぴかの家があつたぞ。見てるだけで目が痛くなつた。

「んじや、まあ行きますか」

「うむ」

「コンコン」と、ノックをして出てくるのを待つ。  
少ししてから、ガチャッと扉が開き、人が出てきた。

「どうひきまですか?」

出てきたのは、20歳くらいのお姉さんだった。  
ダークブラウンの髪をポニー・テールにしていて、のほほんとした顔立ちをしている。

「えーと、この双剣を……」

「その剣は　　ハアツ！」

「どわあああつ！？」

お姉さんは俺の腰に挿さつているアグニとアレスを見た瞬間、険しい顔つきになり、俺の顔面めがけてハイキックを放つてきた。

「あ、危なかつた……ちょっと、おちついセノオオオウー！」

「ちよ」まかと…その双剣を返してもらいます…」

誰か、「」のお姉さんを止めてくれ…

「これこれ、少し落ち着かんか」

「なつ…？」

祈りが通じたのか、桜華がお姉さんの拳を軽々と止めていた。

「つまり、あなた達は」の双剣を闇ギルドから取り戻してくれたと  
「うう」と…

「は」、それもあるんですけど…・・・

言葉を濁す俺に、お姉さんが右に小首を傾げた。可愛い…・・・

つて一人とも睨むな！

その前に聞いておう。

(二人とも、「」のお姉さんは信用していいのか?)

(大丈夫だと思いますよ)

(うん、ギルの孫だからね。イーラは)

そうなのか、じゃあ俺が語り手つてばらしても大丈夫だな。

「とりあえず、こいつらから直接話を聞いてもらつたほうが早いかな」

「？？」

今度は左に小首を傾げる。ね、狙つてるのか・・・！

「顕現つと」

あたりが一瞬光り、中から一人が現れる。

「え？ええ？」

まあ、初めての人に取つたらびっくりするよな。

「えつと、この姿じゃ初めまして・・・アグニよ」

「えーと、アレスです・・・」

「え、えええええつ！？」

静かな貴族街にお姉さんの驚きの悲鳴が響き渡つた。

「か、語り手様とは露知らず、大変ご無礼を致しました・・・」

「い、いやいや、気にしないでください。」

俺の正体を聞き、ザーンと沈んでいるお姉さん。  
名前はイーラ・ライナスと言ひついでいる。

「それでね、イーラ。私達はいつにいつで行くんだ

「勝手なことだと思いますけど・・・」

「つーん・・・そつね、私が持つても使えないし、お爺ちゃんも  
語り手様に使つてもらつたほうが喜ぶと思つわ」

「うう、イーラさんは柔らかく微笑む。

「それじゃあ・・・」

「ええ、こつてらっしゃい。語り手様、一人のことよりお願い  
します」

「はい、お任せください。もう賊なんかに一本触れさせませんよ。」

「ふふ、お任せします」

俺の言葉を聞いて、嬉しそうに微笑む。

その笑顔に癒されていると、後頭部に鋭い衝撃が走った。

「トーレンしてゐる感じがないわよー。」

「こひえつー。」

「ね、姉さんー。」

「あいあい

な、なんで叩かれたんだ！？

（自業自得、なのですよー）

えー、つていうか、桜華達も何で頷いているんだ！

「ツクモ様はこれからどうするのですか？」

「しばりへり」を拠点にして、ギルドのランクをあげよつかなって  
考えてます

いつまでもランクロじや物足りないし、何より金がなくなつてきたからなー。

「そりなんですか、私にも手伝えることがあつたら何でも言つて下さいね」

「ありがとうございます」

「でもあんまり甘えなこようにしないとな。つと、忘れてた・・・」

「イーラさん、俺が語り手つて秘密でお願いしますね」

「何か事情があるのですか?」

「事情つてほどでもないんですけど、権力とか興味ないのと、自由がなくなるのが嫌なので」

イーラさんは納得したように、ぽんっと手を叩いた。いちいち表現が可愛すぎるぞ、この人。

「わかりました、口外はしません!」

むん、となぜか力瘤を作り、気合を入れるイーラさん。一抹の不安を覚えるのはなぜだろ?・・・?

「と、とりあえず今日は戻りますね

「はーー、また来てくださいね」

イー「アセの家を出たとき」、日が一番上まで昇っていた。

「「うーん、まだ時間あるし、とつあえずギルドに行くか！」

「アセじやのう、討伐の仕事があればいいんじやが

「うだなー・・・ん、ギルドに登録してない人に手伝つてもらひつつ  
て出来るのか・・・？」

「桜華達もギルドに登録したほうがいいのか・・・？」

とつあえず聞いてみたほうが早いと思い、俺達はギルドに向かった。

「申し訳ありませんが、規定に反しているためできません

「ですよねー」

「うーむ、やつぱり全員登録したほうがいいな。

後に待つてゐる姉に、「伝えようと振り返ると・・・

「へへへ、姉ちやん達、ちよつと酌してくれねえか?」

わー、またでたー。

下品な顔をした5人の男たちが、桜華達を囲んでいた。

「そりそり、なんだつたら違つてもしてほしいけどなー。」

ガハハハと下品な笑い声が酒場のあちらこちらから聞こえた。

「下郎が、近寄るでない・・・身体が腐るわ」

「おーおー、言つねえ。じゃあこいつの姉ちゃんは」

男はそう言しながら、いやらしく笑みを浮かべながらセラの肩に手を置こうとした。

「気安く触れないでください、私に触れていいのは主様だけです」

セラは手が触れる前に払いのけた。

「つてえ、主様あ？あの受付に居る小僧のことか？」

「へへ、おこ小僧。女達借りるぜ？つてこつても返さねえけどなー。」

何か勝手に決めてるし。

「あの、助けないでよろしいのですか？」

「あー、あいつらなら大丈夫ですよ。俺より100倍強いですから」

心配そうに声をかけてきた受付の人に、満面の笑みで答える。

事実だしな！

「嬢ちゃん、俺達のとこへ来いよ！」

今度はアグーに手を出そうとして・・・

「姉さんに薄汚い手で触らうとしないでくれませんか？」

アレスが腕をつかんで止めていた。

「なんだてめえは！」

「姉さんに触れていい異性は、僕とソクモ兄さんだけです」

何か俺も含まれるけど  
美しい姫弟愛たた

そして僕は触れていいいのも如きと「アキラかげて！」

おさへてそれ何が違うだろ？

受付のお姉さんかなんか見ていた風で見てきてるじゃないか！

聖書

アレスを殴ろうとしていた男が、すごい勢いでギルドの外へ吹っ飛んで行つた。

「なんかちょっと引つかかっただけど、弟を傷つけよつとすんななら許さないよ。まあ、あんた等じや触れる」とすり出来ないと思つたが、

双剣の峰の部分で思い切り吹っ飛ばしたアグニが挑発する。  
あいつのことだから、本人は挑発したつもりないんだろうけどね・  
・

「なんだと！調子にボファツ！？」

今度はアグニに殴りかかるうとした男が吹っ飛んで行つた。

「だから、汚い手で触れるなっていいましたよね？」

吹っ飛ばしたアレスはすごい良い笑顔をしていた。

「！」  
「こいつらーお前ら、やつちま・・・え？」

「お前らって、この人たちの」とでしょうか？」

「まつたく、暇つぶしにもならんかつたわ」

リーダーらしき男が、部下に指示しようと振り返つたら、死体（死

んではない）の山が出来ていた。

桜華にいたつてはゲシゲシ頭を蹴つていてる。やめなさい。

「え、えっと・・・この小僧！」

「えー、そこで俺か、よつー！」

「ウワラバツ！？」

突っ込んできた男の後に回り込んで足払いをし、仰向けに倒れた

ところに、鳩尾に思い切り掌手を食らわした。  
何か、やられたやつらの悲鳴が世紀末っぽいな。

「ハレ、ジヤ出席登録しなよー」

はーい、と咄とちくに転がつていた男達を蹴り飛ばしながら向かってくる。

たよニとかわしそひな雲かする

「では確認致します、オウカ・ヨシハラ様、セラフィム・ヨシハラ様、アグニ・ヨシハラ様、アレス・ヨシハラ様でよろしいですね?」

え、なに、アーリーリーリー？

「なんで俺の名字を使つてゐるの！？」

「わらわは九十九の妻じゃからな！」

「右に同じくです！」

「わ、私は別にあんたの妻じゃないけどさでもあんたが望むなら別に・・・でもでもまだそういうのは早いっていいべく

「僕はそのー・・・えへへ」

妻じやねえだらうー？

特にアレス、お前はなんなんだ！

「ツクモさま」

「なんですか！？」

「羨ましいですわ」

「うむせーつー！」

## 第1-9話（後書き）

最近アグーをこじるのが楽しいです。  
べ、別にシンテレが好きってわけじゃないんだから・・・すいませ  
んでした。

では感想などなどお待ちしております！

ギルードー！

ギルードのことで説明不足なところがあったので、この話で補足しておきました。

たびたび補足しまくって申し訳ありません。

しかし、小説を書いて楽しいですけど、すぐ難しきですね・・・

そしてこの小説のお気に入り数が200を超えた！

登録してくれた方、ありがとうございます！これからもがんばって

これあるので、よろしくお願ひします！

王都を拠点にして活動すること一週間。俺達は順調に、ギルドのクエストをこなしていく。俺はランクC、他の皆はランクDになつた。

そこでひひとつ気づいたんだが、ランクがひとつ上の時、下のランクのパーティに入ると、金は貰えるけどポイントが半分しか貰えないらしい。

まあ、そんなこんなでクエストを受けるために、ギルドへ来ていた。クエストを吟味していると、桜華が隣に立ち聞いてきた。

「九十九や、今日またやるのじや？」

「こつも通り、討伐系のクエストを5つ受けたか

受付のお姉さんに聞いてみたところ、パーティを組んだ場合、依頼は最高5つまで受けれるみたいだ。

一週間にうち6回は毎回こうしている。

「うーーのとこ毎回こうしてますけど、何か目的でもあるのですか？」

セラが小首をかしげながら聞いてきた。

「うーー、とりあえす皆がランクCになつてから旅に出ようと思つて、

「ね」

旅をする資金も十分溜まってきたし、なによりずっと一人で居るわけにも行かない、この世界を旅したいって気持ちもある。

「ふーん、じゃあもうすぐなわけね」

「でもなんかいい、物足りないです」

まあそういう。

だって一人ひとりが一騎当千の力を持つてるからなー。

「そこには金のためと思って我慢してくれ

「はーい」

とりあえずクエストをサクッと終わらせてくるかー！

「アーマービートル5匹討伐、キラーキャット4匹討伐、狂牛4匹討伐、サーベルウルフ8匹討伐、ギャザー3匹討伐、以上のクエスト達成が確認されました。こちらが報酬となります

朝から始めたクエストは、夕方には全て終わった。

全部合わせて1500ゴールド、なかなか稼いだほうだと思つ。

「ありがとう。あ、これって課金できる?」

「これは・・・オルガベアの角ですか?」

クエストの途中に襲い掛かってきたオルガベアを返り討ちにしたときについでにとつてきたものだ。

ちなみに倒したのは俺じゃない。俺が相手してたら死んでる自信がある!」

「途中で襲つてきて、倒したんだ」

「え、でもソクモ様のパーティは最高でもランクCじゃ・・・」

その疑問は「もつともだ。

だけどこっちにはオルガベアが束になつてもひとりで倒せるほど凶猛者が4人いるんだ。

クレスは無理だけどな!

「あー、うん。何か倒せた」

そんなことを言つと面倒くさいことが起きやつなので、言つわなければいけない。

金や桜華達田辺の寄生虫がわらわら寄つて来そうだしな・・・

「やつですか、申し訳ありませんが、クエストを通してない場合、ギルドでは引取りを行つておりません」

「やつなんですか」

まあ、ギルドの懐事情もあるんだろうな。

これで買取できるなら冒険者は皆大金持りになつてゐるだらう。

「といひでシクモ様」

「はい？」

「チームについて存知ですか？」

「チーム？」

「なんだそりや、サッカーでもするのか？」

「はい、チームと言いますのは代表であるチームリーダーを決めて、メンバー内でクエストを行うことです」

ふむ、オンラインゲームでよくある、ギルドと同じようなのか。

「もちろんそれだけではなく、チームを結成することで、冒険者ギルドからも得点がついてきます」

「と、いつ？」

「はい、まず依頼者がギルドのクエストが受けれるようになります。こちらは一般の依頼者からとは違い、ポイントも報酬も大きくなっています」

「ほー、これなら比較的早くランクアップできるわけだ。

「それと、有名になりますと、指名依頼が入ることがござります。

「こちらも普通の依頼とはポイント、報酬ともに大幅に変わってきた  
す。いかが致しますか？」

「ふむ……別にデメリットもないし、作ったほうがいいか。

「それじゃ、お願ひします」

「ありがとうございます。では、こちらの用紙にチーム名を記入  
ください」

「あー、名前がいるのか……

どうしようとかと悩んでいると、後ろから桜華が抱き着いてきた。

「九十九、どうしたのかや？」

「ちゅう、いきなり抱きつくなー！」

柔らかいものが当たつてるんですね！

「んふふ、当てるのじや」

「どいでそんな言葉覚えた！」

「こうか、思つたことなんでわかるんだよ。

「それは全て顔に書いているからじやの」

「なん……だと……？」

「それじゃ今までのことは全て読まれていたのか……!?」

「ふふふ、愛にやつ愛にやつ」

微笑みながら頬を指で突いてくる。

「つだーー！いいから離れるーー。」

これ以上の羞恥プレイに耐えられるかー

「桜華さん、主様に何て羨ま・・・じゃなくて、何てことをしているんですか！」

その光景を見ていたセラ達がドタドタとやつてきた。  
今何か不穏な言いかけたぞ。

「ただのすきんしつぷとこづやつじや。それで九十九は何をしていたのかや？」

「つたぐ・・・チーム名を考えてたんだ」

そう言つたが、チームというのがわからなかつたらしく、皆で首を傾げたので手短にチームのことを説明してやつた。

「なるほどのう・・・それじゃあ『九十九と桜華の愛の巣』つてい  
うのはどびつゝよ」「却下だ」・・・ちえ」

なんだその怪しい名前はー！

「では『主様と私』つていづく『ダメだ』・・・しゅん」

一人しかいないじゃねえか！

「じ、じゃあ『ラブリー・ピンク』ってこいつ何を言つてんだ」  
可愛じのこ

なんかいかがわしいお店みたいだらー！

（んー、『神の語り手』でいいんじゃなこのですか？）

（それなら自分は語り手つてばらしてるよつなものだら。それに教  
会に田をつけられそれで却下だ）

宗教団体にはなるべく関わらないほうがいいんだ。

「えっと、僕達は武器なので『ウエポンズ』ってこのせびうでし  
ょうか・・・？」

「あー、それいいな。皆はそれでいいか？」

一応確認しておいたりと黙こゝ、後ろを向く。

「やうよ、わらわが正妻なんじゃからこゝせ譲るべきであるわつべ。」

「いいえ、そこそこわけには行きませんー。」

「こやんこやんパラダイスつてこいつのも捨てがたいわね・・・」

（うーん、眠いのですー・・・）

アレス以外、誰も聞いてないし！

「えつと、『ウエポンズ』でお願いします」

「かしきまつました。チームリーダーはシクモ様でありますか？」

「はい、お願ひします」

「ではブレスレットをお貸しください。ありがとうございます、登録いたしますので、少々お待ちください」

勝手に登録したけど、聞いてないみたいだしいよな。

「一度しつかりと話しあつたほうがいいようじやな」

「望むところです！」

「いやでも、わんわんカーニバルも・・・」

（・・・ZZZ・・・）

お前らもつこいよー

「どうあえず、今日一日お疲れ様ーのかんぱーい！」

登録が終わり、ギルド酒場の隅を陣取り食事を始める。

「一週間、毎日ここに座っているためか、開いていり口が多い。まあ、馬鹿な男達が桜華達に手を出やつとして、ソビアとへ吹つ飛ばされたせいだと思うけど。なむなむ。

「ふはー、仕事の後のジュースはうまこー！」

「アグー、親父くせこいぞ」

「うるさいわねー！」

なぜ酒じやないのかとこいつと、一度ひどい日があったからだ……。あれ以来、俺は皆に酒を飲ませないよう日に日に日を光らせてこる。

「おい、聞いたか？ 今度は『銀狼』がアレにいって戻つてこないみたいだぞ……」

「これで何人目だ？」

談笑しながら食事をしていると、隣の席からそんな声が聞こえてきた。  
なんか怪しいな。

「やっぱあの剣の噂は本当だつたんだな」

「ああ、近づかないほうがいいぜ……」

「ふむ、剣とな？」

「もうひとつと詳しく述べてみよう。」

「なあ、そこの一入」

「ん、なんだ？」

「その剣の話、詳しく述べてもいいのか？」

俺の予想が正しければ、おそらく桜華達と同じだらうと思へ。

「で、でも……」

「まあまあ、酒箸のからう」

「あ、ああ……王都から西へ大分行つたところに洞窟があつてな。そこに触ると絶大な力が手に入る剣があるらしいんだ。でも……」

「

「ふむ、間違いないみたいだな。」

「でも？」

「何でも、剣に相応しくないやつが触ると、血を吸い尽くして殺してしまつて噂があつてな……それでここで中堅のチーム『銀狼』が確かめにいったんだが、戻ってきてないんだ」

「なるほどね……」

いわくつきって訳か。

でもおかしいな、血を吸い尽くして殺してしまつたってこと話せば」  
から出たんだ？

「なあ、その血を吸い尽くすって、誰か見たのか？」

「いや、俺達はそこまで知らないんだ」

「詳しく知りたいなら、洞窟の近くに村があるからそこで聞いてみるといいぜ。俺は行くことをお勧めしないけどな・・・」

「そつか、ありがと。」それで酒飲んでくれ

男達のテーブルの上にいくらかの「ゴールド」を置き、自分の席に戻る。男達との話を聞いていたのか、皆が真剣な表情でこちらを見ていた。

「さて、聞いてた通り次の目的地が決まった

「わうじゅのう」

「すぐに行くんですか？」

「まあ、ランクは後でも上げれるからいいだろ」

金もたつぱりあるしな。

なんだつたらまた王都に戻つてくれればいいし。

「でも大丈夫なの？血を吸い尽くすって言つてたけど・・・」

「大丈夫だろ？、呪い付も扱つたことあるしな」

元の世界で、そういうのに関わったことがある。

持つと人を狂わせる刀と話し合つて解決させたのはいい思い出だ・・・

「そりなんですか・・・それじゃ行く前にイーラさんに挨拶してきてもいいですか？」

「そりだな、じゃあ明日挨拶と道具揃えて、明後日出発するか」

（はーいなのです）

よし、次の目的も決まつたし、今日はパーティとやるか！  
もちろん酒無しでなつ！

## 第20話（後書き）

やつと前のフラグを回収しに動き出しました。

ただ、遙か西にあるので着くまでに大分時間がかかると思います。道中をすっ飛ばすか、ちまちま書いていくか悩みますね。・・・どうがいいでしょう？

では感想などありましたら、よろしくお願ひします！

## 第21話（前書き）

うおおおお！

ルパン見てたら間に合わなかつたー！－すいませんー－へへ

少し遅れましたが、何とか更新です！

そして今回は厨二病展開となつておつます、ご注意くださいw

血を吸う剣の噂を聞いた俺達は一日田はイーラさんへの挨拶と旅に必要な道具を買い揃え、一日田はその剣がある洞窟の情報を、麓にある村までの情報を集めた。

イーラさんに挨拶したとき、両手を掴まれてものすごい心配してくれた。

俺のほうが少し背が高いので、見上げられる形になったのだが、後ろから睨む女性陣が居なければ、危うく恋に墮ちるところだった。

情報はといふと、洞窟の情報は全くと言つていいほど無く、麓にある村のことだけが分かった。

村の名前はアルブ村といい、洞窟がある山以外は平原なので、あまり魔物の被害がないらしい。

距離は王都ザナログリフから徒步で10日ほど行った所にある。帝国領に程近く、アルブ村から西へ少し行った所に関所もあるらしい。いつか行こうと思つている。

そして、今は王都から5日程進んだところにある巨大な湖で休憩中。人里から離れてるためか、水がとても綺麗で、見ただけで魚がうようよ泳いでる。

俺のファイツシャーマン魂が唸るぜ！

俺の隣では、釣りに興味あつたのか、アグニも一緒にしている。

「ふんふんふーん 入れ食い入れ食いつと・・・13匹田ー！」

「ちよつとーなんでツクモばかり釣れるのよー。」

だがその差は歴然、俺は今13匹目を釣り上げたが、アグニはまだ  
ちやい魚1匹だけ。

「フフフ、経験がちがつのもつー。」

アグニに向けて親指を立て、言ひ放つ。

「くうううー見てなさい、今に大物を釣り上げてやるわーー。」

アグニは近場で釣つていては埒が明かないと思つたのか、糸をかな  
り長めに調節する。

そして自分が釣り上げた小さい魚を餌にして、遠くへ思いつきり投  
げた。

「いいのかい?せつかく釣り上げた魚がダメになるぜ?」

「うるさいわねー、つていうかその話方は何よー。」

「これはなーー、余裕の表れってやつさー。」

「きこいいー。」

アグニとやんなやり取りをしていく中、他の監は句をじてゐかとい  
うと・・・

「平和じやのう」

「平和ですねえ」

「平和なのです〜」

「・・・放つておいていいんですか?」

澄み渡る青空の下、レジャーシートを地面に引いてお茶を飲んでいた。

「よつしやあー・50匹田ー・」

「ひううう・・・・」

始めたときには真上にあつた太陽は、いつの間にか沈みかかっていて、オレンジ色の光を俺達に照らしていく。

こんなに釣つてどうするのかつて?必要な分以外は逃がしているから大丈夫!

そしてアグニは未だに0匹。

餌に使つていた小魚はいつのまにか逃げ出していたので、しうがないから俺釣つた大きめの魚を餌にしているが、あまりに釣れなくてうな垂れている。

「諦めな、嬢ちゃん。今日は運がなかつただけさ」

「諦めない・・・諦めるもんですか！」

あまりの釣れなさに落ち込みかけていた氣を持ち直し、氣合と共に竿を投げなおす。

なにもそこまでムキにならなくても・・・

そしてそんな祈りが通じたのか、竿が折れるんじゃないかといつぱりに引かれる。

あまりの引きに湖に落ちそうになつたアグーを、慌てて後ろから支える。

「ちよ、ちよっと一ビ一一触つてゐのよー。」

「そんなこと言つてゐる場合ぢやないだらつー。」

この世界に着てから、力がものすいこ上がつた俺でも徐々に湖のほうに引きずられている。

どれだけ大物が掛かつたんだよー

「ぐおおお、何だこの引きはー。」

「も、もつてかかるううー。」

苦戦をしている俺達の後ろから、セリの慌てた声が聞こえてきた。

「主様！湖からとも邪悪な氣配がしますー。」

「ぬぐぐぐ、今かかる事か・・・？」

一人を引きずるほどの魚が、普通の魚なわけが無い。

「おひや ああああ！」

ありつけの力を籠めて引っ張り上げる。

これ以上無いと力を籠めたおかげか、釣竿が激しく暴れながらも徐々に上がってきた。

そして水面に映った影は、ものすごい大きさだった。

「ちくしょ、これ以上は・・・セラ！神氣をあいつにぶつけてくれ！」

「はいっ！」

剣を抜き放ち、周りの光を吸収しているか如く、剣が白く輝きだす。

「破ッ！」

裂帛した気合と共に、白く輝く光を撃ち放つ！

光は水面に映る影に吸い込まれるように当たり

「グギヤアアアッ！」

衝撃で飛び出して来たのは、馬鹿でかい化け物だった。

「のわあああ！」

「あやああっ！」

いきなり飛び出してきた為、俺とアグニは仰向けにひっくり返っていた。

当然、後ろから支えていた俺は下敷きになる。

「むぎゅう！」

「ビ、ビ！」触つてゐるのーーの変態つーー

「ウボフツ！」

倒れた拍子に胸を触つてしまい、アグニからの痛烈な拳が飛んできた。

痛いけど、役得役得。

「や、それよりあいつは一体？」

一撃を受け、空中に飛び出した化け物は、飛行能力があるのか、そのまま俺達をまっすぐと睨みつけていた。

全長は凡そ200メートルくらいで、腹以外の全身を深い紫色の鱗に覆われている。

手のようなものは無く、尻尾には3又に分かれた矛のような棘がついていて、見た目だけで言えば蛇のようだ。

大人三人は丸呑みできるくらい大きい口をしていて、その口から覗く牙は触れただけで切れそうなほど鋭く長い。

頭には緑色の毛のようなものが生えており、額には角、そして金色に輝く眼は3つある。

「ぐつ・・・！」

なんだ？

額についているまつめの眼を見た瞬間に身体が動かなく・・・！

「ふむ、どうやら強力な魔眼のようじゃのう」

「なん・・・だ・・・って・・・？」

くそ、言葉を出すので精一杯だ！

「主様、大丈夫ですか？」

（ああ、何とか・・・でも動くことは無理みたいだ）

念話は何とかできるみたいだな。  
どうしたものかと悩んでいると・・・

「う、うぐうぐ・・・やつと、やつと釣れたと思つたらあんな化  
け物なんて・・・！」

（ちょ、ちょっとアグーさん・・・？）

「吹つ飛ばされるし、む、むむ胸触られるし、ツクモに変な術かけ  
るし・・・もーあつたまきた！・・・」

化け物に怒つてゐるのか俺に怒つてゐるかわからぬよー！

（ちょ、アレス！アレス！ー！）

「な、なんでしょー！」

(あいつを止めるーー!)

「無理です! あんな姉さんみたことないです!」

なんかあのまま放置してるとやばい気がするんだよ!」

「絶対許さない・・・・!」

真紅の双剣を、右を水平にし頭上に構え、左を相手に突きつけるように構える。

その刀身には全てを燃やしきぐすが如く、炎が纏い踊っていた。

「舞えよ獄炎、我が敵を全て燃やし尽くせッ! 衝波獄炎斬! ! !」

こちらを睨んでいる化け物目掛け、右へ左へとステップを踏みつつクルクルと回る。

頭上に構えた剣を袈裟懸けに炎の衝撃波を放ち、その反動を生かし、回転しながら左の剣を振る。

左の剣を振り切つたら、右の剣を振り上げる。

そうして幾重にも生まれ、終わることの無い衝撃波は向かっていく間にも空気を燃やしながら膨張し、すさまじい熱量を伴い化け物に襲い掛かった!

「ガオオオオツ! ?」

あまりの速さに反応できなかつた化け物は、恐ろしいまでの轟音と共に獄炎に飲まれた。

「やつたかしら・・・ツ! ?」

濛々と立ち込める煙の中から、風切り音も聞こえないほどの速さで3又の矛がアグニに飛び出してきた。

当たる！ つと思つた瞬間、鉄と鉄と勢いよくこすり合わせたような音が鳴り響く。

「油断大敵だよ、姉さん」

アグニと矛の間にはアレスが立っていた。アレスは両手に持つ肉厚の双剣で挟るように防いでいた矛を、上に逸らすようにして受け流した。

「ありがと、アレス」

自分を守ってくれた弟に、優しく微笑む。

そして前を向き、自分を襲ってきた敵を睨む。

煙が晴れる。

中から現れたのは、先ほどの攻撃で全身が爛れながらも、未だ健在な化け物だった。

攻撃が当たらなかつたのが悔しいのか、唸りながらちらを睨みつけている。

矛がダメならと、化け物は鎌首をもたげ、凄まじい速さで獲物に喰らいつく！

「つぐうー！」

「あ、ぶなつー？」

流石のアレスも、突進は受け流すことが出来ないのか、二人は横に

転がるようにして避ける。

化け物がアグニ達が居たところに接触すると、ズドンッと地震が起きたように地面が揺れ、土ぼこりが舞い上がる。

「アレス、アレをするから時間稼いで！」

「わかった！」

頭から突っ込んだため、土ぼこりでアグニ達の姿を見失っていた化け物の隙をつき、爛れて柔らかくなっていた腹部を、アレスは深々と切り裂いた。

「グオオオオツ！？」

突然の痛みに驚き、のた打ち回る。

自分を傷つけた張本人を見つけると、怒りに任せて尻尾で猛攻をしかける。

アレスは全てかわしながらも、着実にダメージを与えている。

双剣に水を纏わせ、それを圧縮し長い刃を形成する。

「ハアアツ！」

大振りに振られた尻尾を屈んで避け、そこに生まれた一瞬の隙を突いて化け物の顔面まで飛び上がる。

双剣を交差し、鋏の要領で首を刈り取る一撃を本能で察知した化け物は、慌てて首を引く。

アレスの一撃は、首は逃したが額についていた長い角を断ち切つていた。

「グギヤオオオツ！？」

「姉さん、今だよ！」

「ありがと、集え神炎、我が剣となりて、我が敵を刺し貫け！レーヴァ・テインツ！！」

アグニの頭上には化け物に負けないくらい大きな炎の剣が出来ていた。

アレスが注意をひきつけている間に、アグニは集中し、双剣に纏わせている炎よりも純度の高い炎を練り上げていたのだ。

そしてアレスが作った最大のチャンスに、アグニは巨大な炎の剣を化け物に向かつて射出した。

放たれた剣は、あたり一面を燃やしつゝしながら化け物に迫る。恐怖を覚え振り払おうとしたのか、尻尾を剣に叩きつける。

しかし尻尾が触れた瞬間

「グギヤアアアアアアツ！？」

尻尾全てが灰になつた

炎の剣は消えるどころか、ますます勢いを増して迫る。

「ギヤアアアアアア

」

化け物の身体を貫通した剣は、燃え上がりながら空に消えた。

そして化け物は、貫かれた姿勢のまま止まり、どこからか吹いたそ  
よ風に灰となつて飛ばされていった。

## 第21話（後書き）

戦闘シーンが難しそうな…。

一応ボス戦なんですが、あんまりそんな感じしませんよね（・・・）

もひとつ精進せねば・・・・・×；

とりあえず、あんまり出番のなかつたシンデレアグーちゃんを活躍させたくてこんな感じにしましたw

キャラが増えると描写が大変ですね・・・クレスなんてまた空氣だしま

とこつわけで、感想などなど、おまちしておつまーす！

## 第22話（前書き）

どうもー！

オリンピック開催しましたね。  
あんまりスポーツとかに興味ないんですけど、日本にはがんばって  
ほしいですw  
がんばれ、にっぽん！

化け物を倒した後、俺を縛っていた魔眼の効果は切れた。といつても、まだあんまり身体を動かせないんだけどな……

そして今は夕食……なのだが。

「はい、主様。あーん」

「自分で食えるって！」

「ほれ、九十九。口を開けんか」

「人の話聞こうねー？」

「あ、あんたがどうしてもって言つなら食べさせてあげない」とも  
ないわ！」

「誰もそんな」と言つてねえよー」

「どうしてこうなった?

「ツクモさんはモテモテなのです～」

「あはは、流石ツクモ兄さん

そんな」とより助けてーーー?

「主様、ちゃんと食べないとダメですよー!」

「い、一応あれば私のせこだじ、食べてもいいこせじあがるわ  
た。」

「む、うなれば口移しで……」

「「それだつ……」」

「それだつ、じゃねえええ……」

怒涛の「はい、あーん」攻撃を乗り切り、寝袋に包まって夜が明けた。  
しかし、あれはテンジヤラスだった……最終的に口移しして来ようと迫ってきたしな。

「よし、身体も異常ないし、出発するかー

「「「「はーい」」」

「なのです~」

そして湖を出発する」と6日、ひたすら平原をまつすぐ進んでいる

と、前方に村らしき影が見えてきた。

時刻は午後3時くらいと言つた所だらうか。

「やつとつこたかー」

「ハハ、ベッドで眠りたいわ・・・」

「さすがに寝袋だけじゃしどがつたのう」

こんな長距離を旅したことなかつたからなあ。  
まあ世界を旅すると決めてる以上慣れるしかないんだけども・・・

「それじゃあ急ぎで行きますかー！」

「今までへトへトだつたのに、村が見えた瞬間元気になるつて不思議だなあ」

「まつたくなのです~」

「クレスは俺の頭の上にずっと居ただろつよ・・・

まつたく、髪をレバーのようごグイングインしゃがつて・・・可憐いやつめー

急ぎ足で向かうこと約1時間。ようやくアルブ村に到着した。  
情報通り、村から少し離れたところにあるだけで、他は平原に  
囲まれてゐる。

農地は柵に囲まれており、家は全部木製みた이다。

「うーん、いかにも村！って感じだなあ」

「フレッシュセント村と似た感じじゃの、もつともあつちは森に囲まれておつたが」

桜華の言つとおり、規模的にも雰囲気的にもフレッシュセント村と同じ感じに出来ている。

村つてこりの全部こんな感じなのかね？

「ま、とりあえず宿を確保しようつか」

「ベッドーーー！」

「姉さん・・・」

嬉しそうなアグニに苦笑いしつつ、村の中に入り、宿を探す。中は商店や飲食店が1、2店あるだけで、他は全部住居みたいだ。

「なんか少し寂しいですね・・・」

セラが顎に指をあて、不思議そうに辺りを見渡す。まったくその通りで、買い物をしてる人をちらほら見かけるだけで、あまり人通りはない。

そんな中、村の中ほどまで行つたところで、「春の木枯し亭」という宿を見つけた。

「お、あつた。すいませーん！」

「客かい？」

中に入った俺達を対応したのは、少し小太りのおっさんだった。  
別に綺麗なお姉さんや可愛い看板娘を期待したわけじゃないぞっ！

「「「「じー・・・・」「」」

「そんな眼で見るな・・・・・」

「あはは・・・すいません、部屋は開いてますか？」

「騒がしい客だな。まあ何しに来たか予想はつくけどな・・・部屋  
は開いてるよ」

騒ぐ俺達を見て呆れながら、そう言つておつさるおつさる。

しかし予想はつくってなんだ？

「店主、予想はつくってなんだ？」

「大方、お前らも洞窟の剣田當てだらう？」

「ああ、そうだけど・・・そんなに剣田當てで冒険者が來てるのか  
おつさんは声を何とか搾り出したようだ言つ。」

？」

「まあ、王都ではそこそこ情報が出てたからなあ・・・。  
おつさんは声を何とか搾り出したようだ言つ。」

「いや、数はそんな多くねえ・・・が

「ないが？」

もつたじぶるおつさんには催促をする。

そして俺の田をひりひり見て、俯き、ため息と共に話した。

「剣を探しに行つたチームやパーティは、未だ誰一人として戻つて来てないんだ……」

「……マジで?」

尊の剣つて、そんなにやばいのか?

「悪い」とは言わない、やめておけ

「むー・・・まあ、行けるだけ行つてみるか。危なくなつたら戻つてくる」

「私達が居れば、危険なことなんてありませんよー」

セラが胸を張り、自信満々に言つ。

なんだらか、すくへ頼もしく見えるー

それを見たおっさんは深々とため息をつき、言つた。

「人がせっかく心配してやつてるのに・・・、まあいい。何泊で何部屋つかう?」

「悪いね。とりあえず3泊で一部屋お願い

「あこよ、じやあ一部屋で一泊80ペールドだ

そこそこ安なんだな。

袋から480ペールドを取り出して、おっさんに渡す。

「ちよつビだな。部屋は好きな所取つていいぞ」

「なんだ、セルフサービスか」

ちえ、と呟く俺に、おっさんは苦笑いする。

女はおれたちのことはしゃべた」

俺はそんなおっさんに一カツと笑いながら言つ。

「俺達が泊まらなかつたら経営厳しいだろ?」

「余計なお世話だ！」

おー、こわいこわい。

とあはれず詔座に隠匿下さいしか

皆に相談しながら階段に向かうと、後ろからおっさんか呼び止める。

「おこ、お前が

「ん? なんだ?」

おっさんは真剣な顔をしながら言った。

「洞窟に関する情報なら、いつもギルドで酒を飲んでるクレオって

## 冒険者に聞くんだ

「ふむ・・・これなつづいたんだ?」

俺が少し戸惑いながら聞くと、おっさんは「くつ」とか「ま」を回さ  
答える。

「出来る限りお前らの生存率を上げる為だよ」

「あー・・・素直じゃないな、おっさん」

クスクスと笑いながら言つと、おっさんは怒りでなんか恥ずかしか  
つたのかわからないが、真っ赤になりながら叫んだ。

「うわせえーわかつたらとと部屋こきやがれー!」

「へいへい、じゃあ行くぞー!」

「」までも親切にしてくれたんだから、生きて帰らなことな。

おっさんに夕食は情報集めるつこで、ギルド酒場で取ると、一言、「  
俺達はアルブ村のギルドに来ていた。」

酒場に居る冒険者は数えるくらこしか居ない。

「じゃあ飯を食つ前に、情報集めておくか

「ちうですね、店主が言つてた人は確かクレオさんでしたね」

「ふむ・・・店主が薦めるへうこだから、ベテランなんじゃね?

軽く酒場を見渡すと、奥の席に歴戦の冒険者らしい雰囲気をかもし出している男が一人で酒を飲んでいた。

俺は店員にホールを一杯頼む。

それを受け取り、男に近づいた。

「おっす」

「何のようだ?」

いきなり声をかけてきた俺をジロリと睨む。

警戒心が全開のことに苦笑いしつつ、俺はホールを差し出しながら尋ねる。

「アンタがクレオか?」

「そうだが・・・?」

クレオの警戒心が更に増す。

「まあ、そんなに警戒しないでくれ。春の木枯し亭のおっさんから紹介されたんだ」

「・・・お前らも剣を探すのか」

「その通り！」

クレオは、宿のおっさんと同じ深いため息をつく。  
そして俺の差し出したホールを受け取り、飲みながら言つ。

「悪いことは言わない、やめておけ・・・死ぬぞ」

「生憎と、確かめなきゃならぬことがある」

「そういうと、クレオは真剣な顔で俺を見つめてきた。  
それを正面から受け返す。

少しの時間が経ち、クレオはさつきよつも深いため息をつく。

「ハア・・・何が聞きたい？」

「洞窟の規模と出てくる魔物、あと注意する」とか

「そういふと、クレオは懐から紙を一枚取り出した。

「洞窟の規模や構造はこれを見れば分かる

「いいのか？」

「かまわん・・・と言つても、構造は中途半端で終わつてゐるけどな

「それでも助かるぞ。他に情報は？」

洞窟の地図を受け取りながら、再度質問する。  
すると、クレオは顎に手をやり、少し考へる。

「魔物はゾンビやグールと言つた不死系だな。まあランクロもあれば余裕だ……罠はもう殆ど機能していない」

「なるほど……そうなると結構な冒険者が入つたわけだ」

クレオは深く頷く。

「その誰一人として戻つてきていない……俺は途中で引き返したから生きているが」

「一人で行つたのか？」

「いや……臨時5人で行つたんだが、俺以外は全滅した……んだとと思ひ」

なんだか不確定だな。

「思つて？」

「怪しい雰囲気がしたから引き返そうと提案したんだが、他の4人は拒否してな。俺一人抜けてきたんだ」

なるほどな……怪しい雰囲気か……

「その怪しい雰囲気つて？」

「言葉では現し難い……メンバー4人の様子が少しおかしくなつたとしか言えない」

「ふむ？」

クレオの様子を見る限り、情報を出し済つてゐわけじゃなさうだ。  
‥。

様子がおかしくなつた‥‥か。

「もう情報は全て提示したぞ」

「そつか、ありがと。お礼に此処は俺がおいろよ」

「気をつけろよ」

「ああ」

心配してくれるクレオに感謝しつつ、俺は自分の席に戻る。

「大体の情報が分かつたぞ」

「そつか、じゃあ作戦を練るといよ」

「じやあどりあえず注文しますか。店員さんー！」

とりあえず注文はアレスとアグニに任せると、  
そして俺はクレオからもらつた情報を皆に話した。

「ふむ‥‥何か感覚を狂わせるトラップが発動してるんでしょう  
か？」

セラが鳥の（よつな）から揚げを食べながら言つ。

「さうかも知れないわね。まああたし達は大丈夫だと思つたけど……」  
「いつがねえ」

「ひら、スプーンで人を指すんじゃない」

トマトの（よつな）スープが跳ねるぞー

「ふあ、はんにひてひひってみふあけれふあはからなーじゅう  
訳・まあ、何にしても行つて見なければわからないじゅう」

「桜華、行儀悪い上に、何言つてるか分からなーぞ」

「むう、はむはむ」

注意すると、ちょっと拗ねた感じで食べることに集中する。  
そんな桜華に苦笑しつつ、俺は皆に囁く。

「とつあんず饅は行つてみてからで、んで出発は明日の朝いひん  
じよ」

皆がうなづいたのを確認して、俺も料理を食べることに集中した。

そしてこの一件が、世界の異変の第一歩となることを俺達は誰一人  
と予想していなかった。

## 第22話（後書き）

やつとフラグ回収に漕ぎ着けました。

ちゅうと引つ張りすぎた感が否めませんねw

そしてちゅうと座じい終わり方になりました。

一応これもフラグになるんですかね？

まあ、なんとなくわかつてしまつ方も居ると困りますw

では、感想などなど、お待ちしております！

## 第23話（前書き）

「えつせー。

新型インフルにかかりました……なぜ今頃（・・・）

そして次から前書きをやめよつと思つてます。  
ネタがないからじやなこりや本当ですか？

翌朝、俺達は洞窟の前まで来ていた。

位置はそれほど高いところにはなく、山の中腹あたりにあった。

最初の内は草や木が生い茂って居たのだが、洞窟に近づくにつれどんどん無くなつていつた。ついには、草木の影すら無く、まるで荒野に居るよつた錯覚を起すほどだ。

「うーん・・・不気味なところだなあ」

洞窟の中は暗く、光の加減によつて何も見えない。クレオの情報によると、中に入ると『何か』によつて誘われるよう奥へと行くらしい。

「九十九、どうしたのじゃ？」

「あ、いや・・・なんか入り辛いなあと」

桜華達が居るとしても、やはり不安は拭えない。

「そうだ、結界か何か使えないの？」

アグニは思いついたといつゝ、手をぽんと叩きセラ達に聞く。桜華は無言で首を振り、セラは人差し指を額に当て、少し考えるようにして言った。

「結界・・・といつか、神氣を纏わせる」とは出来ますね

「ど、咄つとへ。」

「簡単だぜ」と、『魔』限定の結界ですね

額に当ててた指を、ピッとはに差し少し得意げに胸を張る。  
「じで可愛じとこつと、話が進まなくなるのでどうあえず聞く」と  
に専念する。

「魔、限定ですか？」

「はい、攻撃魔法とかは防げませんが、チャームとかそういうた呪  
術は防げるんです」

なるほど・・・つて呪術ってなんだ?  
そんな顔をしてたのか、セラは俺に一コリと笑つて教えてくれた。

「ふふ、呪術といつのは、精神面にかける魔法・・・と言つた所で  
すね」

「うーむ・・・中に入つたら誘われるよつに奥へ行くつてこつのは、  
もしかすると呪術かもしれない」と

「専門ではないので、なんとも言えませんけどね」

セラはそつこつて、少し肩を落とした。  
そんなセラに俺は苦笑する。

「まあ、やるだけやつてみよつ。違つたとしても専門じやないなら  
しづがないぞ」

「そりだのう。このまま躊躇していても始まらぬし、中に入つてみよ」

俺と桜華がフォローすると、セラは嬉しそうに微笑んだ。  
たまにしようもない」とで争うけど、基本的に二人は仲がいいんだよな。

「じゃあセラ、よろしくな。クレスは一応ネックレスの中に入つてくれ

「はいなのです～

クレスは両手を上げ、元気に返事をしてネックレスの中に戻つていった。

「では、皆さんに神氣を纏わせますね

セラはそういふと、目を閉じ意識を集中させた。

すると、いつも剣に纏わせている神氣とは違つた暖かな光がセラの身体を包み込んだ。

それだけでは止まらず、更に光が拡大していき、俺達も光に包まれた。

「これで完了です

「おー、なんか暖かいな

全身を淡い光が覆つていて

その光はとても優しく、暖かいものだった。

「それじゃあ、出発するか！」

「さて、何が出るのか楽しみだわ！」

一姉ちゃん、あんまりほしゃがないようにな。

「」は怖かる振りをして十九は「かまないかの?」

桜華さん 亂に来てあります！」

そんなやうとりをしながら俺達は洞窟の中へ入っていった。

「うおー、氣味が悪いな・・・」

洞窟の中はとても暗く、何かが腐った臭いがいたる所から漂つてくる。

天井には鍾乳洞が出来ており、その先から水滴が地面にピョピョと跳ねていた。

「主様、身体に何か変化ありましたか？」

「いや、今のところは大丈夫だな

そう答えると、セラ安心したように微笑んだ。  
セラの頭を撫でながら、俺は注意深く辺りを見渡す。ふにゅーって  
声が聞こえたが気のせいだな。

「とりあえず」のまま進んでみるか・・・

「やうじやのう、戦闘はわらわ達に任せとけばよいだ?」

「その時は任せむや」

少し心配そうに聞いてくる桜華に微笑みながら頷く。

「異は僕と姉さんが探しますね」

「しょうがないから探してあげるわ」

「ああ、頼りにしてるぞ」

一人は照れながらも頷いた。

デコボコした地面を、慎重に進んでいく。しばらく進むと、少し大きな部屋に出た。

左右には進む道がある。

「戦闘した後があるな・・・」

「やうじやな、見たところ魔物の骸しかないようじやが

部屋のあちり一ひらに魔物らしき死体が落ちてこる。

おそらくこの洞窟を根城にしていたサーベルウルフだらうか、ほぼ原型をどどめていないので詳しいことは分からぬ。

「ここまで破壊する必要はあるのでしょうか?」

「恐らく、クレオが言つていた『何か』のせいじゃないか?」

人間の欲求というのはとても恐ろしい物だ。  
何か手がかりとかがないか周囲を調べると、複数人の足跡が右の道へ続いていた。

「足跡があるから、こっちなのかな?」

「地図にも書いてあるから間違いないな」

アグニとアレスを先頭に、セラ、俺、殿に桜華という順で歩き出す。  
途中に罠らしきものがあつたが、前から来ていた冒険者が解除した  
のか、発動はしなかつた。

「つー、主様、この洞窟の奥からとても邪悪な気配がします」

地図からすると大体真ん中辺りまで来たころだらうか。  
セラが何かを察知して、真剣な顔で伝えてきた。

「ん? あの化け物よりもか?」

セラは神妙な顔つきで頷く。

「やうか・・・とつあえず、このまま警戒して進むしかないだろ」

今更戻るのは考えられない。

これ以上犠牲者を出さないため、とか高尚なものではないが、やり掛けたことを中途半端に終わらせたくないだけだ。  
もちろん、危なくなつたら逃げるけどな。

「！」のまま進むとまた大きい部屋に出来る、そこで少し休憩しようか

「じゃあ僕と姉さんで先行するね」

「ちょ、アレス！待ちなさいよー！」

アレスはそう言つと、少しスピードを上げて先に進んだ。  
その後をアグーが慌てて追つ。

「まあ、あの二人なら大丈夫だろ！」

「元気なのはいい」とじやのう

このときの俺と桜華は、子供を見守る親みたいな雰囲気だったとい  
う。セラ談。

「フフフ、また人間たちがお前を求めてやってきたぞ」

暗い暗い洞窟の奥、怪しい声が響く。

(「じりじり・・・ボクに世界を征服する力なんて無いの・・・」)

暗い暗い洞窟の奥、悲しげな声が響く。

「フフフハハハ！まだ気づかないのか、この噂は私が流したってことだ！」

暗い暗い洞窟の奥、楽しげな声が響く。

(「むひ・・・もひやめてよー」)

暗い暗い洞窟の奥、嘆きの声が響く。

「やめられないなあ・・・私の力と楽しみのために」

暗い暗い洞窟の奥、嘲りの声が響く。

(「誰か・・・助けて・・・」)

暗い暗い洞窟の奥、絶望の声が響いた。

「セラちゃん出発するか

時間でいつと、約1-5分くらい休憩をしていた。

夜までには村に戻りたいから、あんまり時間を掛けでは困らない。

「ツクモ、道が3つあるけど、どっちなの?」

「うーんと、地図だと左の道だな。でも次の部屋からの道は書かれてないなあ」

クレオが途中までと言っていたのは、このことだったみたいだ。となると、手探しで行くしかないということか。

悩んでいるヒ、セラが俺の肩にそっと手を置き、言った。

「大丈夫ですよ。魔の気配が強くなっているので、それを迎れば間違いはありません」

「そりなの?」

確かにセラは、魔物とかの気配をよく察知していた。

ある程度近づいてからじゃないと分からないと分つていたが・・・

今回の敵はそれだけ凶悪なのか?

「道がわかるなら進もう。どんな敵が出てくるのか楽しみじゃの

う

桜華はそう言いながら肩をぐるぐると回す。

このところ強い敵と戦つてなかつたから、欲求不満なのかもしれない。

「ハハ、じゃあ早く行かないとな

「つむつむ

そして俺達は、洞窟の最深部に向かつて出発した。

## 第23話（後書き）

いきなりですが、アレスの口調を変えてみました。  
なぜかといふと、セラと被つてやり難いからです！（バーン）

そして、まだインフルを引きずっているので、更新は少し遅れます。  
一週間以内には更新出来たらいいな。

暗くジメジメした遺跡内を慎重に進む。

畏は前の冒険者達が大体突破していったようなので、数えるほどしかなかった。

「つと、オリヤアツ！」

小さい横穴から飛び掛ってきた魔物を殴り飛ばす。  
魔物は居なくなるということはないのか、奥に進むにつれてどんどん増えてきていた。

「主様、もつ少しで最深部だと思われます」

バグナウの血を拭いていると、後ろからセラが神妙な面持ちで声をかけてきた。

いつも微笑んでいるセラがこんな顔をしているのは珍しいと思い、どれほどの物か聞いてみる。

「どうか、それほど魔の気配が濃いのか？」

「ええ、初めのうちはどんな者かわかりませんでしたが、ここに来て確信しました」

セラが俺の目をまっすぐ見つめる。

「」の奥に居るのは、恐らく悪魔です。それも、並ではない程の「うわあ・・・王道な所がついて出てきたかあ・・・

「ほー、悪魔・・・の、鬼とどれ程違つのか見定めてやうひでないか」

「ん、桜華つて鬼と戦つたことあるのか?」

そう聞くと、桜華は怪しく笑つて

「ふふふ、乙女の秘密じや」

なんとも素つ頓狂なことを言つた。

「よし、この部屋にもトラップはないね!」

「姉さん、こっちにもなかつたよ」

例の如く、アグニとアレスを先に行かせて、罠がないか調べてもらつた。

「お疲れさん、まだ道が続きそつか?」

「ううん、恐らくあの道を行けば最深部だと思つわ」

アグニが指を挿す方向を見ると、地下へ続くような階段があった。

「そつか、二人とも、ここまで調べてくれてありがとな」

そういつて二人の頭をぽんぽんなどしてあげると・・・

「な、ななななつ・・・！」

「あうあうあう・・・」

二人とも真っ赤になつて固まってしまった・・・愛いやつめ。

「よし、じゃあ準備を整えて行くぞ」

「九十九、九十九。悪魔はわらわがやるぞ？」

気合を入れて、出発しようとしたところで、桜華がいきなりそう切り出した。

「ん？ 頃でやればいいんじゃないか？」

「そうですよ、桜華さん。相手は悪魔、全員で行つた方が安全です」

普段は自信満々のセラだが、今度の相手は悪魔とあってか、慎重に事を進めようとしている。

「むう、最近強い敵と戦つてなかつたからのう・・・九十九、ダメかや？」

桜華は目を潤ませ、首を「ヒテン」と傾げながら上目遣いで俺に聞いてくる。

「ハハハ、そんなことないぞー！　パパ任せなさい！」

後ろから絶対零度の視線を感じるのは、この際氣のせいとこいつにしておけ。

地下へ続く階段を慎重に降りると、壁全体が仄かに光っている大部屋に出た。

「ふむ、これが・・・」

大部屋の中央にある、RPGなどによくある台座に刺さっている剣を見る。

その剣は半分近く埋まっているが、刃は赤黒くフランベルジュのように波打っていてとても長く、鍔は黒色の片翼の形をしていた。更には刀身全体に、黒いオーラのような物を纏っている。

そして光があるせいで、見たくもない物まであった。

「うげえ・・・どうやら血を吸いつていうのは本当らしいな」

剣の周りには、黒く干乾びた人だつた物が無数に転がっていた。  
防具や武器があるところから、この遺跡に入つて行方不明になつた  
冒險者達だろう。

「魔物とかで死体には慣れたつもりだつたけど、流石に人間の死体  
は辛いな・・・」

「主様、大丈夫ですか・・・？」

セラのほうを向くと、皆が心配そうな顔をしていた。  
それを見た俺は心配してくれる嬉しさに「心配ないよ」と軽く笑つ  
て見せた。

「しかし綺麗な剣だな。怪しい美しさっていうか、心を魅了される  
つていうか・・・」

そんなことを考えていると、セラが真剣な顔をして囁く。

「お気をつけください、姿は見えませんが、確実に居ます」

桜華達もその気配を感じているのか、得物に手をかけて、辺りを警  
戒している。

「潜んでいるのか？」

「はい、何のつもりかはわかりませんが・・・」

湖にいた化け物以上のやつか・・・俺じや瞬殺だな。

「どうあえず、あの剣を回収しなことな……」

そうしなければ始まらないだろ？

一応警戒しながら、ゆっくりと剣に近づいていく。  
すると……

（ダメ、来ちゃダメッ！）

これがあの剣の意思なのか、幼い少女の声が頭に響いてきた。

（ふむ、じつや剣の意思自体に害は無むけだな）

そう思つと、自然に歩調を速くなつ、一気に近づいてしまつた。

（ダメ、ダメだつてば！ボクに触れると死んじゃ）

必死に遠ざけようとする剣の柄に手を掛けた。

「死なないんだけどな」

（ え？ ）

「な、なんだとー？」

触れても死なないことが分かつた瞬間、俺達以外の声が響き渡つた。

「そこかっ！」

いつのまにか練り上げていたのか、声のした方向に白く輝くセラの神気が迫る。

「ヌウツ・・・・！」

声の主は、瞬時に黒いオーラのような障壁を作りだした。

白い光と黒い塊がぶつかり合つた瞬間、ものすごい光と衝撃が発生し

「「つおつまほぶしつ！ つてうわああつー！」

柄をしつかり握っていた俺は、その衝撃で剣ごと壁に吹き飛ばされた。

「いてて・・・おい剣、無事か？」

剣を見ると、140cmはあるだろうか、大剣といつても過言ではない長さで、そして何よりも重い。力が上がっている今ですら、米10キロを持ったときの重さくらいだ。

そう思つてみると、剣がおずおずと話しかけてきた。

(う、うん・・・お兄さんこそ大丈夫？)

「おひつ、俺は頑丈だからな！」

心配そうに聞いてきた剣に、にやりと笑いながらおひつと、安心したのかクスリと笑つてくれた。

しかし、そんなほのぼのした空気をぶち壊す声が煙の中から聞こえてきた。

「チツ、私の闇の術式を突破するやつが居るとはな・・・・

中から現れたのは、紫色の身体に、赤い瞳、長い2本の角と鋭い牙。極めつけは、ゴツゴツと筋張った、真っ黒な翼。

「当然です、私の主様なんですから。」

それは理由になつてないだろ?と思ひながらも、とりあえず頷いておいた。

「貴様、もしや忌まわしきアルフルの使いか……！」

「ふふ、正解です。賞品は……魂まで消滅して差し上げますね?」

セラは言つやいなや、再び凄まじい神気を剣に籠め始めた。そして今にも放たれようとした、その瞬間……！

スパーンと小気味いい音が、セラの頭から聞こえてきた。

「い、いったああ……桜華さん、何をするんですか！」

「あれはわらわがやると言つたうじ……！」

セラのほうを見ると、一体どこから取り出したのか、桜華がハリセンでセラの頭を叩いていた。

俺はそれを見た瞬間恐れた、たつた一瞬の出来事でシリアスな展開が一気にギャグになるのか……。

「ですから、その場のノリといつものがあるでしょう！ 大体桜華さんはいつもそうです！ 私が主様と一人きりにならないように、いつもいつもいつも邪魔をし

「ノリなどしらんわつ！ それに、元々九十九はわらわだけの物じやつたのに、後から来て何を偉そうにべラべらと！ 九十九がお主と出会えたのは単なる偶然じや！ お主」

えー、この喧嘩、ただ今10分くらい経過しています。

ていうか、もはや喧嘩の論点が修正不可能なところまで来ています。

・・（泣）

（お兄さん、いつも大変なんだね・・・）

「流石の私も、これには同情するぞ・・・」

幼女と敵（しかも悪魔）にまで慰められた！？

「まあ、せつかくのチャンスだ。有難く頂いておくとする・・・か  
ツ・」

悪魔はそういうと、ギヤーギヤー言い争っている一人目掛けて、両手から黒い波動を放つた。

「「邪魔をするなッ！」」

「え、ちょ・・・『フォツ！？』

凄まじい怒りと共に、二人から莫大な量の神気と桜が放たれた。悪魔の放った波動が、輝く神気と舞い散る桜に飲み込まれ、ついでに悪魔まで飲み込んだ。

悪魔はそのまま壁まで吹き飛ばされ、ズゴォと恐ろしい音共にめり込んだ。

そして瓦礫の中から現れると、一言。

「危なかつた・・・ギャクパートじゃなかつたら死んでいた」

アンタも案外ノリがいいな！

「フフフ、やはり今日の主役はわらわという事じゃな！」

ジャンケンの結果、桜華に軍配が上がったようだ。

負けたセラは隅っこでいじけてる・・・後で何か買つてあげよう。

「どうやら、決まったようだな」

結果が決まるまで、律儀に待つてくれていた悪魔は、ようやく出番かといつよに首をコキリコキリとならしながら前に出てきた。

「つむ、待たせたのう・・・思つ存分暴れよつぞ！」

「わう来なくてはなあツ！」

悪魔は両手に黒いオーラで出来た剣を作り、桜華は腰に挿していた一対の鉄扇を引き抜く。駆け出すのは、ほぼ同時だった。

瞬間 重い鉄と鉄がぶつかり合つた音が部屋全体に響く。

その音は一度では終わらず、一度、二度、三度、四度、と続く。そして五度目の音が響くと、両者は大きく距離をとつた。

「フフフ、お主、案外やりおるのう」

「フハハ、貴様こそな！」

二人の間にあつた台座は影も形もなくなり、地面を踏み碎くほどぶつかりあつたのか、穴がいくつも開いていた。

「少し本氣を出さうかのう」

桜華は、両手に持つてある鉄扇に桜色のオーラを籠める。

「ならば、私もそうするといつ」

悪魔は、両手に作り出した剣に更に黒いオーラを纏わせた。

両者はジリジリと間合いを詰める。

そして、もう2メートルも無くなつたといひで、踏み出す

「疾ッ！」

「ヌンシ！」

それぞれの得物がぶつかり合つた瞬間、遺跡が震える程の衝撃が辺り全体に走つた。

## 第24話（後書き）

どうもー。

自分も不調でYUも不調という中、何とか投稿することが出来ました。

クオリティは全く無いんですけどね・・・( 、 、 、 )

次はなるべく早く投稿・・・できたらいいなあ

## 第25話（前書き）

「…」来るまでに、数え切れないほど のフリーズがありました…。

そして…。」自体つかない」ともしじましじま。

こんな状態な私でも、応援してくれると血の涙を流して喜びます（

・・・・）

満足にネットも見れないんだよおおおおおおおおウワアアアアアアン  
！！

悪魔の剣と桜華の鉄扇がぶつかり合つたび、部屋が崩れ落ちるんじやないかといつぽどの、凄まじい衝撃波が押し寄せてくる。

すでに、二人の間に在つた障害物は全て消滅していた。

その障害物とは、血を吸う魔剣があつた台座に、血を吸われた冒険者の骸達のことだ。

戦つている桜華を抜かした俺達は、巻き込まれないように入り口付近で固まっている。

近くに居たら消し炭になること間違いないからな！

「ふうむ・・・埒が明かんのう」

「クツ・・・それは」ひちりの台詞だッ！

そう呟く桜華に、悪魔は叫びながら左右に持つてゐる剣で斬りかかつた。

「無駄じや、無駄ツ！」

しかし、初めから來ることがわかつてゐたように、2対の鉄扇で斬撃を受け流す。

だが、受け流された衝撃波がこちらに迫る

「危ないなあ、もう」

前に、アレスの作った結界によつて弾かれた。

「アレス、今俺はお前が天使に見えるよ・・・」

「そんなん、えへへ・・・」

なぜか照れてるアレスを放つておいて、目の前の戦いに集中する」とにする。

「チイツ、ここまで出来るとほな」

「フフフ、女を舐めたらいかんぞ?」

悪魔は焦っていた。

初めから出来る相手だと感じていたが、ここまでとは思わなかつたからだ。

悪魔は人間の血や魂等を力にすることが出来る。

魔剣に血を吸わせ、その血を魔力に変換して、自分の力とする。この計画を始めてから、上級悪魔でも上位の力を手に入れたはずなのに、目の前のおかしな格好をした女は自分と渡り合っている。

どんなに力を籠めた一撃も、風が木の葉をくすぐるよつに流されてしまう。

「ヌウンツー！」

「おつと、怖い怖い」

普通の人間なら、原型も残らないような一撃を桜華は楽しげに口元を歪めながら、軽く受け流す。

「今度はこいつらから・・・破ツー疾ツー！」

「ヌグツ、グオツー!?」

受け流した隙を突かれて、桃色のオーラを纏つた鈍器が迫り来る。直ぐに闇の魔術で作つた剣を引き戻し、連撃を弾く。

「むう、惜しかつたのう」

まったく悔しそうでもなく、むしろ笑いながらそんな事を言つ女が、無性に腹が立つ。

何なのだ、一体何なのだ、この女は！

怒りに任せ、剣に纏わせていた闇のオーラを更に増加させる。

「死ねえツー！」

纏わせたオーラを相手に放ち、それを曰くましにして、直ぐ後ろを追いかける。

（オーラは確実に防がれるだろつ。しかし、その後ろに居る私の追

撃は防ぎ切れまい！）

案の定、放ったオーラはかき消された。  
もらつた

「爪が甘いわッ！」

瞬間、悪魔の身体は壁にめり込んでいた。

「ふむ、やり過ぎたかのう？」

まあ、こんな物で死はないじゃうつが・・・と、桜華は呟いた。

一瞬、一瞬だつた。

悪魔が部屋全体を包みこむ程のオーラを、桜華に向けて放つた。

それを見た桜華は、桜色のオーラを纏わせていた片方の鉄扇を開き、回転するように廻いだ。

たつたそれだけで、全てを飲み込むような闇のオーラを消し飛ばし、その後ろから奇襲しようとしていた悪魔の腹に、回転の勢いを利用した、もう一方の鉄扇を凄まじい勢いで叩きつけた。

闇のオーラの後の追撃を読めない、もしくは読んでいたとしても、ほぼ全力で放つたオーラを完全にかき消すことは出来ない。そう思っていたのだろうか・・・そんな予想を一步踏み越えた結果が悪魔を待っていた。

「グ・・・グホッ、おのれ・・・オノレエッ！」

「フフ、やはり生きていたか。そうでなくてはのう」

崩れた壁の中から、全身傷だらけの悪魔が出てくる。

怒っているのか、目が血走り、恐ろしい牙をむき出しにしている。

「キサマ、今の一撃・・・オレを殺せたはずだッ！ なぜ手加減をスルッ！」

「ふふつ、簡単に死なれたら、九十九に良い所を見せれないではないか！」

そう言って、胸を張る桜華。

「グガ・・・ガアアアアアアッ！？」

そんな言葉に完全に怒った悪魔は、全身から身の毛も弥立つほどの大オーラを迸らせながら桜華に襲い掛かった。

上、下、右、左、怒りに任せて桜華を切り裂こうと、縦横無尽に剣を振り回す。

大雜把ながらも、それでも反撃の隙を「えいほど」の速さで振るわれる剣に、桜華はただ防ぐことしか出来ない。かと思われたのだが・・・

(九十九、アレスに結界を最大まで強化するよつておくれ)

(え？ あ、わ、わかつた)

桜華からの突然の念話に驚きながらも、指示にしたがつ。

「アレス、桜華が結界を最大まで強化して欲しいらしい」

「はい、わかりました・・・ハアツ！」

アレスは目を閉じて意識を集中し、気合と共に地面上に手をつけた。すると、今まで無色だった結界が、海を思わせるよつた青色に変わつた。

「ふう・・・出来ましたよ、ツクモ兄さん」

「そつか、ありがとう。綺麗な色だな」

ぼむぼむと頭をなでる。

「むツー！」

「むう・・・

(むう～)

何か2人と1振りから恨めしい視線を感じるけど、ここは無視しておこう。

「シネエツ！シネエエツ！..」

「むつ！はつ！」

何故だ、何故当たラなイツ！  
力を蓄えタノに、あの方に次ぐホドの力を手に入れたノーツ！

怒りと焦りに支配され、目の前の女を切り裂くことしか考えられな  
い。

だから氣づけなかつた。

目の前の女が企んでいることを、罠にかかつた獲物を見た獵師の如  
き笑みを。

「グルアアアツ！」

碎け散れと、怒りを籠めた大振りの一撃。

「ぬうツ！」

避け切れないと思ったのか、女は2つの鈍器を交差して受け止めた。  
それでも衝撃を抑え切れなかつたみたいで、大きく後ろに吹き飛び、

片膝をつせ、身体を支えるよつて銃器を地面に突き立てた。

チャンスだ。

そう思い、勢いを殺さず、また先ほどと回じよつな攻撃を繰り返す。

今度は斜め前に飛んで避ける。

ダメージは抜け切れてないみたいで、また膝をつこう。

追いかける。

また同じよつに避けられた。

そんなことが、この後3回ほど続いた。

片膝をついていた女が、ダメージを受けていたはずの女が、なんとも無いよつに立ち上がった。

そのときになつて、悪魔はようやく気づいた。

これまでの動きは全て演技、何かの法則によつて動いていた、と。

「『戻づいたよ』の、だがもつ遅いわッ！」

「戻づいたよ』の、だがもつ遅いわッ！」

桜華は2対の鉄扇に大量に桜色のオーラを纏わせ、地面に突き刺した。

すると、その場所からオーラが地面を走る。

その場所は、桜華が悪魔に吹き飛ばされて片膝をついて鉄扇を刺していたところだ。

ポイントにつくと、次のポイントへ。

そして全て繋がった頃には五芒星の形が出来上がっていた。

「グガアアアツ、身体が動かヌ！？」

「フフ、我が奥儀・・・その身に受けて散れッ！ 桜花星結印ッ！」

「！」

五芒星が立体的に浮かび上がり、星の形をした柱が悪魔を中心に封じ込めた。

しかしそれだけでは終わらず、浮かび上がった星は桜の花びらを舞い散らせながらクルクルと回転する。

「グガガガツ、ガツ、ガギヤアアアアアツ！」

悪魔の断末魔と共に、封じ込めていた五芒星と舞っていた花びらは、桜色の光の残滓を残してはじける様に消えていった。

## 第25話（後書き）

前書きで取り乱してすいませんでした。

何とか、悪魔編完結です。w

無駄に引っ張つたり、次話を早くあげなかつたりして、大変お待たせしましたが何とか終わらせることができました。

もちろんこれで終わりじゃないんですけどね。w

これからも頑張っていきますので、どうぞ末永くよろしくお願ひします！

綺麗な桜色の光が、まるで雪のようだ。部屋一面に待っている。悪魔を一瞬にして倒した技だが、俺はそれを美しいと思つた。

(わあ、綺麗!)

「ええ、本当に・・・」

そう思つて居たのは俺だけじゃないらしい。

後ろを見ると、皆がうつとりとした様子で、その光景を見ていた。

「あ、今結界を消しますね」

「ああ、頼む」

アレスがはつとした様子で、慌てて田の前の結界を消した。結界の向こうから桜華が歩いてきたのが見えたからだ。

いつもの不敵な笑みを浮かべ、歩いてくる桜華に労いの言葉をかける。

「桜華、お疲れ様!」

「うむ、久々に大技を使つたが、さすがに疲れたのう」

苦笑しながらも少し疲れた様子で、肩をトントン叩いている。後で肩でも揉んでやろうかな?

と、思いながら桜華を見っこねと、ざぶざぶ俺に迫つてきつこる。

「え、ちよ、桜華？」

「わい、」<sup>レ</sup> 優美<sup>レ</sup> 優美「

ないからー。もうこいつのないからー。

俺の心の叫びを聞き取つたのか、セラが慌てて俺を守るように立ちふさがつた。

「ダメです、桜華さん！ そんな羨ましい・・・もとい、破廉恥な」とは許しません！

「なんじゅとー。あんなに頑張つたんだから優美くらに良いではないかつー！」

「あーあ、また始まつたわよ？」

ギヤーギヤー言い争つてゐる一人に、呆れた様子で止めなくていいのかと聞いてくるアグー。

今回ばかりは助かつたので、放つておくことにした。決して巻き込まれたくないし面倒だとか思つてないことを、<sup>レ</sup> 優美<sup>レ</sup> 優美記述しておぐ。本當だ。

それよりも今は、<sup>レ</sup> のでかい剣のことが重要だ。  
とりあえず名前から聞いてこいつ。

「君、名前はなんていうんだ？」

(ボク？ボクは悪魔さん<sup>レ</sup> ブラッティウイング<sup>レ</sup> って呼ばれてたよー。)

何だその禍々しい名前は。

「そ、そ、うか・・・それじゃ長いからな、愛称を考えるよ」

(はーいっー)

「ラッシュディウイング・・・ウイン・・・違うな、もつと可愛い感じ  
がいい・・・ラッシュディ・・・ラディ・・・これだ!」

「よし、今日から君はラディだ!」

(ラディ・・・うん、ラディでいいよー、ありがとう、お兄ちゃん  
!)

お兄ちゃん。

それは男を惑わせる甘美な響き。

お兄ちゃん。

それは男を狂わせる魔性の響き。

お兄ちゃん、「落ち着けっ!」「うんばつ!?

「はー、俺は一体・・・?」

「何か危ない感じでトコッ�してたわよ・・・」

危なかった、もう少しで俺は戻れない領域に踏み込むところだった  
のか。

「気を取り直して、ラディ」

( なあに、お兄ちゃん? )

「 もうとお兄ちゃん とよこでぐ 」 「 ギロコ 」 ヒイツ・スマセンツ  
「 」

アグニが双剣に手を掛けながら、恐ろしい形相でこちらを睨みつける。

危うく視線だけでさびつになつた。

「 え、えっと・・・ 顕現ってわかる? 」

( 顕現へー! ーん・・・ あ、何か頭の中に浮かんできたよー )

オーライオーライ。

これまでの経験で、顕現できる物と、出来ない物があることがわかつた。

基本的に古くなり、強い意志を持つ物が出来るみたいだ。

現に俺の使用している武器、バグナウは新品で買ったので意志自体存在しない。

それと、古くなつたと言つても出来ない物もある。

そこらへんの基準はわからないけどな。

「 よーし、お兄ちゃん顕現しちゃうやーー! 」

( わーい )

「 姉さん、ツクモ兄さんのおかしいよ? 」

「 元から変態だと思つてたけど、いじまでは思わなかつたわ・・・ 」

「わざわざよー

通路から部屋に入り、とりあえず中央まで行く。

たどり着くと、両手で落とさないよじこしつかりと構える。ズシリと重みが伝わってくるが、持てないほどではないので続行する。

「よーし、久々の・・・顕現せよッ！」

皆の時と同じ、懐かしくも強烈な光が部屋中を照らし出す。そして光が晴れると、そこには・・・

「あ、おおー！ わーい、自由に動けるよー！」

『じつへ刺々しい鎧を纏つた小さな女の子がはしゃいでいた。

その姿に、俺は驚愕した。

髪は黒に近い紫色で肩口までのセミロングで、もみ上げをクルッとふた巻きほどカールにしている。瞳の色は血のような赤。身長は俺

の胸辺りまでしかない。

容姿はまさに美少女然としていて、全国のお兄ちゃんを虜に出来る  
ほど可愛らしき。

自分の髪と同じ色をした、首から下を覆うフルプレート。背中には  
身の丈とほぼ同じ長さの大剣。

しかし、俺はそれだけに驚愕していた訳ではない。

「い、妹属性でボクつ娘、極めつけは鎧つ娘だと……!? 馬鹿  
な、連邦のモビルスー「いい加減にしなさい、この馬鹿ッ!」が  
んだむつ!？」

「あはは……姉さん、それ以上やるとシクモ兄さんが死んじやう  
よ……?」

「ゴホッ……いいパンチだぜ……。

「お兄ちゃん、大丈夫?」

「な、なんとかね……まあ、今日からよろしくな、ラティイー。  
「うとう、よろしくねつー」

嬉しそうな笑顔を浮かべ、俺に勢い良く抱きついてきた。トゲトゲ  
の鎧のまま。

「ちよ、まつイデイデイデイッ!？」

「あつ、お兄ちゃん!」めんね……?」

「ラディはすぐに身を離し、俺を傷つけた」とを気に病んでか、涙目になりながら見上げてきた。

「『ハフウツ、だ、大丈夫さつ！』

「でも鼻血出てるよ・・・？」

「『、これはあれだ、うん、鼻血が突然出ちゃう病なんだ！』

涙目が可愛すぎるから出たなんて、とてもいえない！  
しかし素直なラディは嘘まみれな言葉を信じて、俺の袖をきゅっと  
掴み、心配そうに見上げながら言つた。

「そ、うなんだ・・・お兄ちゃん、ボクに出来ることがあつたひと言つ  
てね？」

「ホブウウツ！？」

「きやーつー？」

もう俺に・・・悔いは・・・な・・・い・・・ガクツ。

「ラディ、恐ろしい子つー！」

「姉さん、ハンカチかみ締めて何言つてるの・・・？」

しばりくして復活した俺は、とりあえずあんな騒ぎも氣づかず喧嘩している一人を止めるにこした。ラディーのこと紹介しないとだめだしな。

アグニとアレスは、俺が血を失っているときによく紹介を済ませたみたいだ。

「桜華、セラ、」<sup>1</sup> 優美なら今度あげるから取り合はず<sup>2</sup> おこで

「うむっ。」

「はいっ。」

その一言だけで、一人は喧嘩を止めて目を輝かせながら<sup>3</sup> ひつひつ<sup>4</sup> つてきた。

若干後悔してるのは秘密です。

「あら、その子は？」

ようやくラディーの存在に気づいたのか、セラと桜華はラディーを見ている。

そんなラディーは恥ずかしいのか、俺の後ろに隠れてしまった。

「ほひ、ラディ、挨拶して

「う、うん・・・、ブラッティングじゃなくて、ラディって言います、今日からよろしくお願ひしますっ！」

「桜華じゃ、そんな固くならなくていいぞ」

「セラファイムです。セラって呼んでね?」

二人の優しい気遣いに、ラティは満面の笑みを浮かべた。

「うそ、桜華さん、セラお姉ちゃん、よろしくね!」

「うむ」

「はりん」

よしよし、これで監仲良く・・・はうん?

変な声を出したセラのまつを見ると、顔を真っ赤にしてクネクネしていた。

そして我に帰ると、ラティの肩をがつしり掴んで聞いた。

「ハ、ラティちゃん・・・今なんて?」

「え? ようしぐね?」

「その前」

「セ、セラお姉ちゃん・・・?」

「お、おね、お姉ちゃん・・・ハアアアンシ、なんて可愛いのかしらー? 天使? 天使なのね!?」

「あひあひあひあーーー?」

セラはその言葉を聞いた瞬間、ガバッとラティに抱きつきクルクルと回り始めた。

ちなみに棘は刺さつてはいるのだが、痛覚はどつかに行つてしまつたらしい。

「わつか、セラよ。君も紳士・・・いや、淑女だつたんだなー。」

「うふふふ、ラティちゃん！ 今度はお姉さまつて呼んでみてー！？」

「あうあーー！ 田が回るーー！？」

涙を流しながらウンウンとうなづいている俺と、ネジが一本外れたセラは気づかなかつた。

後ろから赤鬼が、ゴキゴキと指を鳴らしながら近づいて来ている」と。

そのとき気づいていれば、あんな悲劇は生まれなかつただろう 完  
どつむじる生まれます。

## 第26話（後書き）

どうせー！

若干2名、変態が居ましたが気にしないでくださいね！

さてさて、今回から魔の大剣ブラッティウイングこと、ラティが仲間になりましたがどうだつたでしょうか？

また女かよ！って思った方も居ると思いますが、次仲間になるのは男ですので、その手にもつた石を置いてくださいお願いします投げないでいじめないで！

さて次の話ですが、キャラ紹介を計画しています。

九十九つてどんなやつ？って指摘があつたのでw

話が進まず、がっかりするかも知れませんがご了承ください（・・）

## 今更なキャラ紹介（前書き）

タイトル通りに今更なキャラ紹介です。

本編で作者の能力不足のため語れなかつた、世界や宗教のこと等も盛り込んであります。

## 今更なキャラ紹介

### 異世界ファルム

#### 【概要】

九十九が救う為に呼ばれた世界。現在何者かの手によつて魔物の被害が多い。

### 武神アルフェル

#### 【概要】

ファルムの絶対にして唯一の神。武神の名のとおり、戦いの神でもある。

聖書では幾つもの武器を自在に操つたと言われている。

### 破壊神ゼラフェル

#### 【概要】

ファルムに生まれた破壊神、アルフェルとの戦いに負け滅びた。

### アルフェルの鏡

#### 【概要】

ファルムが危機に瀕したとき、別世界から語り手と呼ばれるアルフェルの使徒を呼ぶための鏡。

何の説明もしないで九十九を送りだし、その事に気づいてすぐ後悔するほどのドジっこ。

神の語り手

### 【概要】

アルフェルの使徒とされている。

古くなり知らないうちに意思を持つたり、語り手のために作られた武器を顕現することができる。

語り手自身は特に強くない。世界移動の際に身体能力が向上するのと、文字が読める、言葉が話せる・わかる。

吉原 九十九

### 【性別】

男

### 【年齢】

18歳

### 【身長と体重】

178cm 65kg

### 【職業】

主人公・神の語り手

### 【使用武器】

バグナウ・桜華達

### 【性格】

めんどくさがり屋だが、一度やると決めたことはしつかりやり通す。そして意外と面倒見が良い。

### 【概要】

黒い短髪で目つきが少し悪い。生まれながらにして古くなつた物と話したり動かしたり出来るという能力を持ち、その力のせいで幼少期はいじめられて過ごした。

しかし、家族はそんな九十九を気味悪がつたりせず、そして物達にもよくしてもらった九十九はグレずに育つた。そしていじめを克服するために取つた九十九の方法は、強くなること。

それは武術を習つとかではなく筋トレと喧嘩の経験によるものなので、あまり強くない。

桜華で腕力を鍛えている。

### 【神の語り手】

前述の通り、古くなつて意思を持つようになった物の声を聞き、操ることが出来る。

### 【異世界移動による身体能力倍化】

異世界移動によって得た主人公補正。

桜華

【性別】  
女

桜華  
【愛称】

【鉄扇の長さと重さ】  
50cm 10kg

【擬人化の身長と体重】  
160cm 53kg

【スリーサイズ】

B 83 W 58 H 85

【武器系統】

鉄扇

【特殊能力】

攻撃魔法を無効化する

【使用武器】

鉄扇を二つ両手に構える。

【九十九の呼び方】

## 【一人称】

わらわ

## 【性格】

九十九と同じめんどくさがり屋、そして九十九に依存しているところがつて、甘えん坊。

セラとはいつも九十九を取り合っている。口調は旧日本風

## 【概要】

古くなり意思を持つた鉄扇。生まれば安土桃山時代。どんな武将が使っていたか不明。どんな手法で作られたか分からないが黒の鉄扇で扇を開くと桜の花の模様が刻まれている。

時代が過ぎ、骨董品店で九十九の父親に買われたところを九十九の能力で目覚めた。

腰までの黒い長髪で切れ長で少したれ目、右目に泣きボクロがある。服装は黒い着物で、袖口や裾に桜の模様が入っている。普段着にも戦闘着にも使っている。

寝るときは黒い着物を脱いで、桜色の肌着をきいている。

## 【桜花乱舞】

両手に持ったオーラを纏った鉄扇を開き舞うことで、妖力の籠った桜の花びらを目標に向かって大量に発生させる。

花びらに当たった敵を切り刻んだり、花びらを全方位に広げることも可能。範囲は視覚内のみ。

## 【桜花星結印】

地面上に五芒星を描くことにより、魔物や悪魔等といった者を封印、

消滅させることが出来る。

使い所が難しく、普段はトラップ的な要素として使用する。

効果は桜花乱舞より高い。

聖剣セラフィム

【性別】

女

【愛称】

セラ

【剣の長さと重さ】

90 cm 0 kg

【擬人化の身長と体重】

163 cm 55 kg

【スリーサイズ】

B 85 W 60 H 86

【武器系統】

聖剣

【特殊能力】

持ち主に重さを感じさせない。柄頭の宝石には治癒効果がある。

【使用武器】  
聖劍

【九十九の呼び方】

主様

【一人称】  
私 わたくし

【性格】

普段は真面目でお淑やかだが、九十九のことになるとやきもち焼き。弱気を助け、強気を挫く。

桜華といつも九十九を取り合っている。口調はお嬢様風

【概要】

神の語り手のために作られた聖劍。フレッセント遺跡で眠っていたところ九十九が発見。

本来なら語り手が降臨したときに目覚め、遠くからでも語り手に意思を伝えるのだが、あまりに長く放置されたので分からなかつた。語り手以外が触れようとすると電撃が走り、決して触れることが出来ない。

刃にはこの世界の古い文字が刻まれており、薄く光っている。

鍔には大きな蒼い宝石がはめ込まれており、その両側には羽の模様が施されている。

柄頭には、鍔と同じ宝石がはめ込まれている。

腰までの銀髪を髪先で青いリボンで束ねている。眼は綺麗な蒼色。戦闘時は、白い膝丈のワンピース。銀で出来た古い文字が刻まれた胸当て、サポーター、ガントレット、ブーツ。

腰は「ルセットとベルトが一緒になつてゐる物をつけてゐる。

普段着は白いフリルカットソー。下は黒の膝より少し上のタックス

スカート。

靴は花の「サージュがついた赤いパンプス  
寝るときはレースがふんだんに使われた白いネグリジH。エロくはない。

### 【流星の煌き】

神氣を剣に纏わせ、それを放つことで相手を切り刻む。

### 【断罪の剣ジヤッジメント・セイヴア】

剣に清浄なる煌く神氣を纏わせ、相手に放つ。魔物等に絶大な威力を發揮するが、生身の人間が受けても余程のことがない限り消滅する。

詠唱（我が振るうは断罪の剣、我が放つは戒めの光、聖なる輝き、ジヤッジメント・セイヴア）

祝福のネックレス

### 【性別】

女

### 【愛称】

クレス

### 【精霊の体長】

30cm

【道具系統】  
ネックレス

【特殊能力】  
身に着けている者の身体能力を僅かに上昇させる。

【使用武器】  
なし

【九十九の呼び方】  
ツクモさん

【一人称】  
クレス

【性格】

天真爛漫でいつもにこにこしている。九十九の頭の上がお気に入り。九十九のことは好きだが、他の皆ほどではない。口調は「～なのです」を語尾につける

【概要】

魔力を持つたアクセサリー職人が手がけた作品。フレッセント村にある古道具屋に売られてた所を九十九に買われる。

古くなつたところに精霊が宿つた。擬人化は出来ないが、中の精霊を呼び出すことが出来る。

精霊が出てくるだけなので、アイテムは首にかかつたまま。特に何かできるわけではない。

金縁に緑色の宝石がはめ込まれている。首に引っ掛けるタイプ。

髪と眼は緑色。耳がとがっている。服は薄緑色のワンピース。マスコットキャラだが、最近出番がなくネックレスの中でふて腐れている。

双剣アグニ

【性別】  
女

【愛称】  
アグニ

【双剣の長さと重さ】

50 cm 5 kg

【擬人化の身長と体重】

158 cm 46 kg

【スリーサイズ】

B 78 W 55 H 80

【武器系統】

双剣

【特殊能力】

手に持つたとき、歴代の双剣使いの動きがわかるようになる。

### 【使用武器】

紅い双剣

### 【九十九の呼び方】

ツクモ

### 【一人称】

あたし

### 【性格】

所謂ツンデレ。素直になれない女の子で根はとても優しい良い子。ただし九十九の事になると色々暴走したりする。見えないとこで九十九の事で桜華、セラと争っている。

### 【概要】

伝説の英雄が使っていた双剣。

英雄の死後に所在不明になり、闇市に出ていた所を九十九に回収される。闇市は壊滅。

アグニは紅く、斬ることを主体としているために、刀身は薄く、反り返っている。柄頭にはオレンジの宝石がついている。

肩までのオレンジの髪をサイドテールにしている。目は赤い。

戦闘時は炎の模様が入った紅い胴鎧、ガントレット、レギンスを普段着の上に付けている。

普段着はオレンジの太ももまでのチュニックに黒いスパッツ。靴は短めのブーツ。

### 【衝波獄炎斬】

双剣に炎を纏わせ、踊るようにステップを踏み、纏わせた炎の衝撃波を相手に撃ち出す。

詠唱（舞えよ獄炎、我が敵を全て燃やし尽くせ、衝波獄炎斬）

### 【レーグヴァ・テイン】

頭上に全てを灰にする高純度の炎で出来た巨大な剣を形成し、相手に射出する。

詠唱（集え神炎、我が剣となりて、我が敵を刺し貫け、レーグヴァ・テイン）

### 双剣アレス

#### 【性別】

男の娘（女の子のような男の子）

#### 【愛称】

アレス

#### 【双剣の長さと重さ】

40cm 8kg

#### 【擬人化の身長と体重】

160cm 48kg

### 【武器系統】

双剣

### 【特殊能力】

手に持ったとき、歴代の双剣使いの動きがわかるようになる。

### 【使用武器】

蒼い双剣

### 【九十九の呼び方】

ツクモ兄さん

### 【一人称】

僕

### 【性格】

姉と違つて素直な弟。九十九に突つ掛かる姉を止める苦労人。兄の  
ような九十九を頼りたいと思  
うお年頃。

### 【概要】

伝説の英雄が使つていた双剣。

英雄の死後に所在不明になり、闇市に出ていた所を九十九に回収さ  
れる。闇市は壊滅。

アレスは蒼く、防御主体のために、刀身は分厚く、受け流すために  
波打つていて。柄頭には水色の宝石がついている。

スカイブルーのショートヘア。目は青い。

戦闘時は波の模様が入つた蒼い胴鎧、ガントレット、レギンスを普  
段着の上に付けている。

普段着は白いロングシャツに青いジャケット、下は黒いジーンズ。  
靴は短めのブーツ。

攻撃技は現時点では使用していないので、後回し。

魔剣フラッシュ・ディウイニング

【性別】

女

【愛称】

ラディ

【大剣の長さと重さ】

140cm・40kg

【擬人化の身長と体重】

145cm・40kg

【スリーサイズ】

70・50・72

【武器系統】

魔剣・大剣

【特殊能力】

呪いや毒など状態異常を受けない

【使用武器】  
魔劍・大剣

魔劍・大剣

【九十九の呼び方】  
お兄ちゃん

【一人称】

ボク

【性格】

無邪気で甘えん坊。九十九にべつたりとくつ付いており、片時も離れようとしない。

普段は笑顔だが、戦闘になると無表情で敵を殺す。

セラと相性が悪そうだが、その見た目と言動、容姿なのでパーティ内では特にセラに可愛がられている。

口調は元気な妹風

【概要】

遺跡の内部で上級魔族に力を蓄えるための道具として使われていたが、桜華が倒して回収した。

強力な魔族と人間の血を合わせ、魔界の名工が作ったとされていて、普通の人間や魔物が触れようとしたら、身体中の血を吸い尽くされる。

刃は赤黒く、フランベルジュのように波打っていて、黒いオーラを纏っている。鐔は黒く片翼の形をしている。

黒に近い紫色で肩口までのセミロング。眼は血のような赤。

戦闘時は、髪と同じ色のフルプレート。両方の肩には、翼の形をした肩当をして、ガントレットには赤い宝石が埋め込まれている。背中に収めるベルトがついており、そこに剣を収めている。

普段着は淡い紫色のレース使いブラウスに、黒の膝丈までのショートパンツに同じく黒のハイニーネッククス。靴は赤いヒールスニーカー。

寝るときはネコのパジャマ。

攻撃技は現時点では使用していないので、後回し。

ドルーガリフ大陸

#### 【概要】

サザーランド王国とミシシユガルド帝国が半分ずつ治めている。戦争はない。

地図上の大きさはアフリカ大陸くらい

サザーランド王国

#### 【概要】

九十九が降り立つた異世界の神である、絶対唯一の武神アルフェルを奉つている。

降臨した語り手は、アルフェルの使徒とされ、王より地位が上とされている。

国旗は天使の羽の前に赤い剣と青い盾がクロスしている。

## 王都ザナログリフ

### 【概要】

ザザーランド城と聖アルフェル教会本部がある。規模は30万人程。崖の上に立つており、城の後ろは深い谷で、魔法を使わないと登れない。そして対魔法結界が張つてある。正面はなだらかな傾斜で、街の区画が、崖を城ごと囲う城壁によつて分かれている。

城　城壁　貴族街・教会　城壁　平民街・市場　城壁・門となつて  
いる。

難攻不落の名城。色は白い。

### 【人物】

#### イーラ・ライナス

【性別】女　【年齢】21歳

英雄ギルフォードの孫娘。普段は天然でおつとりしているが、腕つ  
節は強く、ランクCになつてている。

両親は他界していて、ギルに育てられた。

## フレッセント村

### 【概要】

九十九が降り立つた場所の近くにある村。のどかな農村と語り手の  
ために作られた遺跡がある。

規模は500人くらいで、遺跡日当ての学者くらいしか来ない。

ギルドもあるが、カミール町に行く冒険者がために来るくらいで、まったく来えていない。

よつて、盗賊に襲われたときにはクレアしか居らず、クレアはギルドを守っていた・・・ということにしてください（汗）

## 【人物】

### シェラ

【性別】女 【年齢】17歳  
ミレルの姉。両親は他界しており、母親の弟だった自警団団長のバートが面倒を見ている。

九十九に助けられたときに一目惚れをし、どうにか気を引こうと思つたが結局ダメだった可哀想な子。

### ミレル

【性別】女 【年齢】14歳  
シェラの妹。九十九に対する感情は兄へ異性止まり。

### バート

【性別】男 【年齢】38歳

シェラ・ミレルの叔父。一人の母親の弟で自警団の団長をしている。

### ジーナ

【性別】女 【年齢】37歳

バートの奥さん。おつとりとしているが、バートを尻に引いている。姉妹を実の娘のように可愛がっている。

### クレア

【性別】女 【年齢】24歳

学者兼冒険者。ランクはDで、片手剣を使っている。実力はあまり

無いが、学者としては優秀。

地味にフラグが建つたが、回収することはない。

## カミール町

### 【概要】

フレツセント村と王都ザナログリフの間にある、山に囲まれた町。山菜がおいしい。

山に面しているために、魔物の被害が多いので冒険者が多く集う。小さな教会もあるが九十九は寄らなかつた。

規模は15000人ほどで、治安はあまり良いとは言えない。

### 【人物】

#### アイナ・キャンベル

【性別】女 【年齢】15歳

茶髪のショートヘアで、目も同じ茶色。九十九のおかげで冒険者でランクDになつた。

短剣を使つたすばしつこい戦いが得意だつたが、九十九の双剣技に心を打たれ、双剣使いに転進。

その後、長い修行の末、ランクSSの英雄まで登り詰め「双剣姫」の二つ名を得た努力家。

もしかすると再登場するかも？

## アルブ村

### 【概要】

平原に作られた長閑な農村。平原にあるため、あまり魔物の被害はない。

血を吸うという魔剣がおいてある遺跡がある。被害者は後を絶たない。

規模は600人程。

### 【人物】

クレオ

【性別】男 【年齢】42歳

厳つい顔と屈強な身体をしたベテラン冒険者。魔剣のせいで冒険者があまり来ない中、村のために残り続ける良い人。ランクはB。九十九達が来るまでは魔剣騒動の唯一の生き残りだった。

### ミッシュガルド帝国

### 【概要】

サザーランド王国とは昔戦争をしていたが、現在は軍事と経済の同盟を結んでいる。

## 今更なキャラ紹介（後書き）

そして重要なお知らせが。

前々から述べた通りに、パソコンの調子がおかしいので、キリが良いここまでで更新を休止したいと思っています。

調子がおかしいというのは、マザーボードがイカれているので、電源を落とすと中々起動しなくなってしまうんです。  
しかもその起動しない時間は日に日に延びていって、いつ完全に起動しなくなるか分からぬ状態なのです。

この駄文を待つていてくださる方に、まだかなーと思わせるのが申し訳ないので、休止を決定しました。  
復帰の日処は今のところ立つてませんが、恐らく長くて半年でしょう。

大変申し訳ありませんが、どうぞご承くださいませ(・・・・・)

## 第27話（前書き）

うあああああ、すいませんんんん！

復帰してからもー、大分時間経つてしましました・・・(・・・)

言い訳はしません、すいませんでした；

待つていてくださった方達、大変お待たせ致しました！

久しぶりで、アレな小説ですけど。第27話どーぞー！

「ん・・・?」

『気がついたらベッドの上に寝ていた。  
隣のベッドを見ると、セラも同じように寝ている。』

「何で寝てるんだ・・・いてて」

なぜか痛む頭を摩りながら、一体何があつたか考えてみると扉がガチャリと開いた。

「あ、お兄ちゃん起きたんだね！ おはよっ」

「ああ、おはよっ」

元気よく入ってきたラディを見ると、洞窟で着ていたフルプレートを脱いでおり、上は淡い紫色のレース使いのブラウスに、下は黒の膝丈までのショートパンツに同じく黒のハイヒールソックスで靴は赤いヒールスニーカー履いていた。

ラディの雰囲気とピッタリな服装で、とても似合っていた。

「おお・・・可愛いな」

「えつ、えへへ・・・照れすよ」

可愛いと囁つといつぱりは、顔を赤らめもじもじと照れる。

「う、うおお・・・ホブッ」

「ああー？ お兄ちゃんまた鼻血がつー？」

噴出す鼻血を抑えてこると、ワトトイが直ぐにトイッシュショ（のよいな  
もの、この世界では一般的に使われている）を俺に持ってきてくれ  
た。

「お兄ちゃん、大丈夫・・・？」

「おお・・・いつもすまないねえ・・・」

「それは言わない約束だよ、おとつあん」

「アンタ達、なんつー芝居じてゐのよ

俺たちが3文芝居をしてると、開きっぱなしにしていた扉からア  
グーが腰に手を当て呆れた顔でじいちらを見ていた。  
何故だらへ、その顔を見ると・・・身体が震えて・・・

「あ、あああ・・・鬼じや、鬼がある・・・」

「だ、誰が鬼よおーッ！」

「ああああああああッー！」

「まつたく・・・心配して損したわっ」

「こして・・・悪かつたつてば」

あの時のアグーはトライウマ物だったが・・・

「わういえば、桜華達は？」

「桜華さん達なら酒場でおじさんとお話してたよ？」

おお、居ないと困つたら先にクレオさんと報告してこたのか。

「わういと知つたら腹も減つてるので起きて俺達も行くか！」

「わーい、『飯』『飯』」

さて、セラの様子はつと・・・

「ウフフ・・・アティちゃん、そこが弱いのね・・・かわいい子・・・

・ウフフ」

「わー、飯食いにいくぞー！」

「めだーこの人と関わってはいけない！」

ということと、俺達は幸せな夢を見ているセラを放つておいて酒場に行くこととした。

酒場に着くと、桜華達はクレオと談笑をしていた。

「おーい、桜華ー。アレスー。」

「む、おお九十九！こっちじゃー！」

談笑をしてるときは凛とした態度だった桜華は、俺を見るとまるでその名の如く、桜の花が開いたような笑みをこちら向けてきた。それを見ていた、他の男性客は全て桜華に見惚れ。女性客は何かを悟ったような目でこちらを見ていた。

もちろん俺もちょっと見惚れかけたのは内緒だ！

「「ほん、取り合えずよく生きて帰つてきた」と言つておこう

「ありがとさん。まあ俺には頼もしい仲間が居るからな。生きてるのは当たり前さー。」

そんな軽口を言つて、俺達はテーブルに着く。テーブルに着くとしばらくして、ウェイトレスが注文をとりに来る。

「「注文はお決まりですか？」

「んー、とりあえずエール2つと果物のジュース1つ。あとは……・ラディ、食いたい物はあるか?」

「お肉！」

「はいよ、じやあお勧めの肉料理を適当に何でも

「かし」になりました

注文を取つたウェイトレスさんは素敵な営業スマイルで厨房へと去つて行く。

「それで、詳しいことを聞いてもいいだろ？」「

「ん、ああ・・・桜華はまだ話してなかつたのか」

「う・・・「む、」うう話はやはり九十九がしたほうがいいと思つての」

桜華の目が泳いでる、ただ単に言つのがめんどくさかつただけだな、  
これは。

「はーはー」了解つと、その前にまずは腹(ハラ)ヒヤヒヤしてもいいか?」

タイミングよく、素敵営業スマイルウェイトレスさん（仮）が「お待たせ致しました」と料理と飲み物を持ってきた。

「なるほど、その娘が例の魔剣の正体とこいつわけか・・・」

「うん、まあ魔族に無理やりつっこつこつとやらされただけなんだけどな」

食べ物を粗方片付けた俺は、クレオさんに事情を説明していた。無理やりとは言え、多くの命を奪つてきたことに罪悪感を感じていたラティはしゅーんと泣きそうな顔をして落ち込んでいる。その顔も萌えるとかは思つてないぞ！

「やうか・・・、ラティだったか？別に俺はお前を恨んだりしない。だからそんな顔するな」

そう言いながらクレオさんはグシグシとラティの頭を撫でた。

「ほんと・・・？」

「ああ、それに冒険者なんていつ死のうが、どこで死のうが、どんな死の方をしようが自業自得なんだ。だからラティは罪を感じるこはない・・・まあ、ただの気休めと言わいたらお終いだがな」

「うん・・・ありがと、クレオさん」

クレオさんの言葉に、ラティが花が咲いたような笑顔でお礼を言つ

た。

クレオさんも厳つい顔に似合わないような優しい微笑みをラディに返した。

それを見ていた俺は

「なんか親子みたいだな

と言つてしまつのは仕方ないと思つんだ。

「もうね、でもそうだとしたら、クレオさんがあたし達全員のお父さんになっちゃうわよ？」

「やつだね、ラディは僕達の妹だしね

アグニとアレスも穏やかな笑顔を浮かべながら俺の思いに肯定する。しかしクレオさんが親父か・・・なんだか野郎には厳しそうだな。

「ふむ、となるとわらわは九十九に嫁いできたと言つてじやな」

「ちよ、なんでもうなるのよー」こつは・・・その・・・「ゴーゴーゴー」

「じゃあじゃあ、クレスはラディちゃんのお姉さんっていうことなのですね！」

頭の上で、小さく切つた肉をもぐもぐしてたクレスが胸を張りながらそんなことを言つてきた。

「いや、クレスはペットだな

「ペシードじゃな」

「ペシードな」

「あはは・・・」

「ええええーー?」

「そんなことないのですーお姉ちゃんなのですー」と俺の髪の毛をひっぱって暴れてるクレスを放つておこで・・・

「それじゃあ、こには親父のねいつぱーつとやらむかー」

「 」 「 」 「 賛成ーー.」 「 」

「お前らな・・・じょうがないガキ達だな」

そんなこと言いつつ、満更でもない顔をするクレオと達と朝まで盛り上がるのだった。

一方その頃のセラ

「フフフ・・・あら、主様も混ざりたいのですか・・・？いいです  
よ、3人で楽しみましょう・・・フフフフフ」

「まだ幸せな夢を見ていたとさ。

## 第27話（後書き）

はい、もうアレですね。文才の欠片もない小説で申し訳ありません。  
：

こんながぶりえるですが、これからもどうぞよろしくお願ひします；

そしてなんと、PVが100万アクセス、ユニークが14万突破しました！

もうホント、田がおかしくなったんじやないかとか、夢でも見てるんじやないかと思いましたが・・・なんかすごいうれしいです！

こんな駄文を応援してくれるなんて、とても幸せです！

これからもがんばりますので、よろしくお願ひしますっ！

第28話（前書き）

大変長らくお待たせしましたー！

これで年内更新はこれで最後ですね。  
挨拶はあとがきで！

あの後から少し田口ちが過ぎた頃の朝。

「もう行くのか、なんだかちょっとの間だが、騒がしいお前らが居なくなると寂しくなるな」

「ああ、世話になつたな。いつか来るからそれまでこの宿潰すなよ？」

ヒロヒロ、おひきに向かってニヤニヤと笑つ。

「つるせ、俺の宿は評判がいいんだ。ひつとやわひとじや潰れねえよ。」

「おひおひ、それならまた今度の楽しみにしておくよ」

こんな話をしている後ろでは、クレオの親父と他のメンバーが別れを告げていた。

「クレオよ、世話になつたな。」

腕を組み妖艶に微笑みながら言つ桜華。だが俺にはわかる、あれは恥ずかしへつけんとお礼を言えないだけだ。

「何、俺がやつたことは少しの情報と、酒をおひつただけだ。」

「それでもうれしかったよ！ ありがと、クレオお・・・お父さん・

・「

恥ずかしさでお父さんとお母さんとお爺爺奶奶と一緒にラティ萌えー。

「何か馬鹿が変なこと考へてるけど……クレオさん、お世話になりました。」

「あ、あはは……とにかく、今度着たときは僕達にいりませんださーね?」

「ああ、期待してるよ。」

馬鹿つて言つたほうが馬鹿なんですかアグニサンハバカジャナイデスヨ?

そうそう、次の目的地だけど、とりあえずエルミネの塔に行つてみることにする。

アルブからエルミネの塔までは歩いて5日ほどかかり。

クレオの話によると、普段は入り口が何もない塔なのだが、満月になると一つだけ入り口が出来るということだ。

その塔は異様な雰囲気が出来ていて、入り口が開いていても命知らずな冒険者ぐらいしか入らないようだ。

ちなみに満月の出る日がなぜ分かるのかといつと、昨日の夜の月からみて、大体5~7日で満月になると、長年培つてきた経験と勘でわかるらしい。さすがベテラン。

そんな話を聞いたのは一昨日で、昨日のうちに準備を済ませておいた。

エルミネの塔を探索し終えたら、そのままもう3日ほど待った後に帝国の村があるので、そこに行ける分より少し余剰ある食料などを用意することにした。

簡易テントや寝袋は古くなつてきたので、これらも新しいのをアルブで買つことにする。

まあ、最悪食料が足りなくなつても、誰かが武器に戻つてくれればその分だけ食料などが浮くので問題はあまりない。

そんなこんなで、出発当日となつたわけである。

「よし、それじゃあ行つてくれるわ。またな！」

「ああ、気をつけろよ。」

「死ぬんじゃねえぞ！」

そうして俺達は、まだ朝日が昇り始める時に出発した。

「ねえ、クレスさん。主様が少し前から他所よそしくなつたのだけれど、何か知つてますか？」

「さ、れあ・・・クレスは何も知らないのですよぅー・・・？」

アルプ前に広がる平原を小休止を入れながら進むこと約半日、モンスターの襲撃は特になく平和な時を過ごしていた。

もう少し進んだところには森が見えるが、桜華達が流石に夜に森に入るには面倒だとのこと、ここいらで野宿することになった。

「しかし、なんだかんだでアルプに結構いたからキャンプも久しぶりに感じるな。」

「そうですね、ベッド生活も良かつたですが、いつこつたのも悪くはありません。」

「ボクは初めてー！ ねえ、お兄ちゃん。ボクは何すればいいの？」

ラティは興奮を抑えきれないのか、俺の周りをピョンピョン飛び跳ねながら笑顔で聞いてくる。

そんなラティに癒されつつ、頭を撫でながら周りに田を向けてみる。

アレスは簡易テントの準備をしてくる。

アグニは焚き火の準備をしている。

桜華は携帯食料だけじゃ味気ないと言つて、森に入つていった。

クレスは俺の頭の上で器用に寝ている。働け。

そして俺とセラは料理をしている。

と言つても、スープとかそこらへんの簡単な料理だけだな！

思つてみると、ラティに出来ることがほとんどないな・・・でもそれを伝えると落ち込みそうで怖い。

うーむ、どうしたものか・・・。

「そうねえ、それならフライちゃんは料理を作ってる私達の護衛をしてくれないかしら？」

「護衛？うふ、わかつた！護衛はませーーー。」（ブンブン）

やめてーつとは言えないですよね。

仕事を任せられたのが嬉しいのか、自分の背丈ほどもある大剣を軽々と振り回してるフライ。可愛すぎるー！

「しかしうまい事言つたな、セラ。」

「ふふふ、何か仕事を任せないとフライちゃんが拗ねてしまいそうなので・・・拗ねてるフライちゃんも見たかったのですけど（ボソ）

「

聞こえてる聞こえてるー！

「え、えーと。後は塩で味調えて完成だな！」

「そうですね。私と主様の愛情たっぷり特製スープを皆さんに食べて頂きましょー。」

料理がちょうど完成したところで、桜華が『カイ猪と幾つかの果物を持つてきた。』

思わず駆走に舌鼓を打ちつつ、夜が更けていった。

食事も終わり、明日のために寝るといひした俺達はある問題に直面していた。

それは

「桜華さん、主様の隣は私が寝るんです！」

「何を言つか、ここにはテカイ獲物を取つてきたわらわに譲るべきであらう！」

「あ、あたしも・・・その・・・どうでもって言つたら隣で寝てあげてもいいわー。」

「ねー、お兄ちゃん。一緒に寝よ?」

なんだこのカオス！

セラと桜華はにらみ合つてゐる。アグニはなぜかこゝちを睨んでる。ラディは裾を引っ張りながら上目遣いで聞いてくれし、可愛すぎる。

とにかく、埠が明かないからアレスに助けてもらおう！

「アレス、ちょっとたすく僕も一緒に寝たいなあ・・・」お前もかーー！」

桜華とセラの言い合いが終わり氣づいた頃には、俺の隣にラディと

アグニ。アグニの隣にアレス。そして腹の上にクレスという形で寝ていたとさ。

## 第28話（後書き）

はい、とこりーとで・・・これを見んでくださいてる皆々様。  
今年は応援していただきまして、誠にありがとうございます！

前書きでも描きましたとおり、これで年内の更新は最後となります。  
来年もまたがんばってこきますので、よろしくお願ひ致します！

では皆様、良いお年をーー！

## 第29話（前書き）

チョー短いですが、なんとか間に合いました。

これからはたぶん、更新スパンは短めで小説も短めになってしまつ  
と思います・・・申し訳ない；

今更ながらの説明になるが、なぜこのエルミネの塔に行こうと決めたかと言つと、アルプの酒場で興味深い話を聞いたからだ。クレオからは異様な雰囲気が出ていると聞いたが、その他にいつからか塔の名前になつてゐる「エルミネ」とは実在した伝説の魔法使いの名前らしい。

そのことから、この塔には何かエルミネの手がかりがあるのではないか？と噂になつてゐる。

もちろん国はたかが噂などで調査団など動かすはずもなく、面白半分で行つた冒険者達は戻つてこない。

それなら面白そうだから行つてみようぜつてことになつた。

それに桜華達が居れば、大抵のことはどうにかなると思つたから。そこ、自分でもわかつてゐから情けないなんていうな！

そんなエルミネの塔は、アルプから帝国の関所を抜けて村まで続く街道 といつてもしつかりと整備されてはいない砂利道なのだが の途中から不自然なほど鬱蒼とした森の中にある、辛うじて人が通れるくらいの獣道を進んだ先にある。

俺達が付いたのは、エリオのおつちやんの予想したとおり5日後の満月の夜だつた。

「うーむ、本当に入り口がぽつかりと開いてるな」

俺達の目の前には巨大な塔が聳え立つており、正面には人が3人並んでも余裕で通り抜ける大きさの穴がぽつかりと開いている。この入り口の説明でわかると思うが、塔 자체が馬鹿でかい。試しに周囲を歩いてみたが、1周するのに普通の速さで歩いて20分ほど掛かった。

高させと云ふと、首が痛くなるから云ふて置いた。

まあ、なぜわざと入らないで塔の考察なんかをして居るのかと言つて、「しかし氣味悪いわね、穴の奥が闇かかつてまつたく見えないし・・・」アグニが代弁してくれたが、異様なほど不気味なのである。よつするに怖い。

「せうだとしても、入らなければ始まらんぞ？まあ、何が出よいつとわらわ達が蹴散らすがの」

「そうですね、何があつても主様とラティちゃんには私が指一本触れさせませんので」安心ぐださいーーー

頼もしいことをいつてくれるな、お前達。

でもなんとなく、セラの言葉に俺は邪な感情が混じってるよう思ひついで。 えて仕方ないんだよな・・・主にラディのことで。

「そりだよー、ボクもお兄ちゃんを守るから安心してっ」

「クレスも守るのでー！」

それに引き換え、君達はなんと恥じこゝとか・・・まさに天使！

「あ、あたしもどーしてもつて言つなら、あなたのことを守つてあげてもいいわよー?」

ラディとクレスを撫でくりまわしてると、いつのシンデレ姫がスタンダードなシンデレ文句を言つてきた。

「おお、そつか。なら君の手腕に期待をしそひ、シンデレ姫よ」

「シンデレ姫つてなによー。シンデレが余計よー。姫だけなら・・・そ の・・・あんたがそう呼びたいならあたしは別」

わーい、久しぶりの暴走だー。

「ツクモ兄さん、守りなら僕が得意ですよ?」

「うん、アレスの守りにいつも助けられてるからな、今回も期待してるぞ」

「はいひ、何か何でも守り抜きます!」

満面の笑顔で、大きい瞳をキラキラ輝かせ、うつすらと頬を赤く染め、上目遣いでこっちを見るアレス。

なんだらうつ、最近アレスが俺を見る目が変わってきたような気がする・・・うん、気のせいだ・・・気のせいだよね・・・?

と、とりあえず！

「何時までもこいつしてるわけにも行かないし、エルミネの塔このつこめーへへ」

「　「　「　「　わあーい♪♪」」」

「あたしが姫で・・・ツ、ツクモが騎士で・・・最初は護衛対象としてみてたけど、それはいつしか違う感情に変わってきて・・・身分違いのラブロマンス」

アグニは放つておこう。

えー、感想を読まれた方も居ると思いますが。

主人公の名前が同じ、擬人化も同じ、擬人化したキャラが主人公を呼ぶときの愛称も同じという小説が他所のサイトのほうであつたそうです。

私の投稿年月は2010で、その方の投稿年月は2007なので、パクリと言われば私のほうがパクリ担つてしまふわけでして・・・。

なにが言いたいのかといつと、この小説をこのまま続けてもいいのだろうか？と疑問に思いました。

言い訳になりますが、私はその方の小説を教えられるまで知らなかつたので、決してぱくつたといつことはございません。

そちらの作者さんに連絡をとったのですが、2ちゃんねるのスレに投稿という形式で出しているみたいで、特に「自分のサイトも持つてないので連絡が付かない状態です。

そこで一応アンケートというか、このまま続けていいのか読んでくださっている皆様に聞きたく思いました、もし良かつたら感想のほうにでも続けるか続けないか、書いていただけると幸いです。

期間は2週間で決めたいと思います。お手数ですがよろしくお願ひします。

お久しぶりで「jazz」ます。

例の件ですが、痛烈な批判等あると覚悟して参りましたが・・・この駄文が、皆様にこんなに愛されていいのか、作者は喜びと共に驚愕しております。

本当に嬉しいです。

ここまで応援されている以上は皆様の期待に答えて、誠心誠意を持って完結まで乗り切るつもりです。

相変わらず亀並みの速度になってしまいますが、もうしばらくすればリアルも落ち着きますので、少しずペースを上げていきます。

終わりになりますが、感想を書いていただきました皆様や応援してくださる皆様、そしてこの駄文を読んでくださっている皆様、本当に、ほんとーーにありがとうございます！

これからも駄目な作者を応援していただけると幸いです！

### 第30話（前書き）

遅くなりましたー！

皆様の「」声援のおかげで、やる『』が出てますよー！

・・・と言いましても、亀更新にはかわりないのでですが・・・申し  
あけありません（・・・）

ではでは、第30話どうぞーー！

「アレスお兄ちゃん、がんばれー！」

ラディの声援の先には、アレスと1体のモンスターが戦っていた。ギシギシと石で出来た身体を軋ませながら、マリオネットはその手に持った無骨な斧でアレスに襲い掛かる。

「ハアツ！」

しかし、そんな攻撃が当たる筈もなく、少し横にずれるだけで簡単にかわし、痛烈なカウンターを返す。

その一撃を受けたマリオネットは石で出来ているにも関わらず引きちぎられるように胴と腰が泣き別れし、吹き飛んだ衝撃でさらにバラバラになつて他のマリオネット達と同様に沈黙した。

アレスの剣は防御主体の剣だが、別段切れ味が悪いという訳ではない。

むしろ、普通の剣より分厚く重いために、遠心力を乗せねば乗せるほど威力が上がっていく。

どっちかというと、綺麗に斬るではなく、叩き切る・・・と言つたほうがいいのかもしれないが。

さて、何でセラ達が居ないのかと言つと、塔を入つてしまひしての事だった。

穴を抜ければ、あれほど薄暗く不気味な雰囲気をかもし出していたにも関わらず、内部はぼんやりと明るかった。原因を調べようと周囲を見渡してみれば、一定の間隔を置いて、光を放つ石のようなものが設置されていた。

「ふむ、案外すんなりと入れたのう」

拍子抜けした、という様な顔をしながら話す桜華。

「そうですね、何かあるか警戒していたのですが・・・まあ」

話に乗りつつ、セラは入ってきた穴に振り返ると、ガゴーン！、とまるで上から石でも降ってきて硬い地面に激突したような音が聞こえた。

驚いた皆が振り返ると。

「閉じ込められてしまつたよつですけどね？」

と、ぽつかりと開いた穴が隙間なく塞がつた様子を見ながら、セラがおどけたように言つのだつた。

「困ったな、斬つてもダメ、叩いてもダメ、聖氣や妖氣もダメとなると・・・おとなしく登るしか道はない、か」

先ほどふさがった壁に手をやり咳く先には、エントランスと書いていいのだろうか。

大き目の家一軒が余裕で入るほどの広間があり、その奥には階段がある。

しかしこの階段が曲者で

「でも階段が一つあるけど、どうするつもり？」

「そう、二つあるのだ。

」「うなつた以上、俺達の取れる行動は二つしかない。

「二手に別れるか、一つに集中するか・・・だよなあ。まあ二手に別れるかな」

そう言つた直後、なぜだか強烈な寒気が俺を襲つた。

（これは・・・なぜだか村以来、避けられて居たのを挽回でき、尚且つ主様に接近するチャンス！？）

（ほほう・・・普段は何かと邪魔されておつたが、ここでの一人を出し抜けることが出来れば・・・フフフ）

（も、もしかして・・・いやダメよアグニ、あれは下僕、下僕よ！・・・

・・でも襲われるところを助ければ、気持ちは私に・・そしてそのままめぐるめく禁断のゴニヨゴニヨゴニヨ

(そつかあ、一手に別れるなら、今までんまり活躍できなかつた僕が目立てるよね。そしてがんばつて活躍して、ご褒美としてツクモ兄さんに・・えへへ)

「 」「九十九（主様）ツクモ（ツクモ兄さん）、「お兄ちゃん、一緒に昇るー！」「おー、いいぞー！」しまつたーッ！？」

( )( )となると残り枠は一人・・・( )( )

「えーと、なんで睨みあつてるのか知らないが・・・残り一人はジャンケンで決めてくれ」

そのセリフの後、俺の人生の中でもっとも白熱したジャンケンとうなの戦いが勃発した。

そしてその結果はわかると思うが・・・

「ううう・・・なぜ私はあの時にグーなんて・・・」

「ば、馬鹿なわらわのチョキに断てぬ物などなかつたはず・・・

「アレス・・・帰つたらこのパーでビンタするから・・・

「あ、あはは・・・なんでだろ？勝つたのに、素直に喜べない・・・

・

といった結果になり、冒頭に戻るのである。

「ひとまず、このフロアは制圧しましたね」

「そうだな・・・お疲れ様、アレス」

「どうやらこの塔は、階段の先に大きな部屋があり、その中に入るとモンスターがいる。それを制圧して上を田指すといった仕組みらしい。」

そしてモンスターは昇る」と強くなっていく・・・最初は俺でも倒せるような雑魚だったのだが、10階を過ぎる頃からきつくなり、15階になると俺は手も足も出なかつた。

自分の弱さに凹みつつ、俺を守りつつ簡単に蹴散らして行くアレスとラティに感謝している。

「さて、とつあえず20階まで来たし、一休みしようか」

「そうですね、武器の手入れもしておきたいですし」

「休憩はまかせろーー」「ローロー」

まじめなアレスと無邪気なラティを見ながら、俺達は休憩を入れるのだった。

一方その頃、桜華達の方はといつと・・・

「九十九と一緒になれなかつたのは、貴様らのせいじやーっ！」

ドガーーーンッ！

「私だつて主様と一緒に行きたかつたですよーっ！」

ズドーーーンッ！

「べ、別にあたしはあんなやつなんて・・・あんなやつなんてーっ！」

チュドーーーンッ！

ハつ当たりの真つ最中でしたとさ。

### 第30話（後書き）

如何でしたでしょうか？  
とりあえず出てきたモンスターの説明を。

#### マリオネット

特殊な魔法で、木や石、鉄などで出来た人形に魂を籠めて生み出されたモンスターで、簡単な命令なら聽く。

動きは遅いが、手に武器を持ち、こちらを攻撃してくれる。  
人形なので身体がいくら傷ついても向かってくれば、1匹でいることはまずなく、最低でも10匹くらいで固まっている。  
このことから、モンスターのランクはB。石でA、鉄はCとなっている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5079j/>

---

神の語り手といわれた少年

2011年4月6日19時52分発行